特214
689

國民學校に於ける綜合授業

0044410000

0044410-000

特２１４－６８９

国民学校に於ける綜合授業

長野県師範学校附属国民学校教科研究会・著

信濃毎日新聞社出版部

昭和１７

AHF

特214
689

帝國圖書館藏

長師附屬國民學校叢書　第二編

國民學校に於ける綜合授業

長野縣師範學校附屬國民學校教科研究會著

帝國圖書館

長師附屬國民學校叢書の刊行

國民學校實施せられて玆に一年有餘、その間われわれは日々の實踐によつて、國民學校の主眼とする皇國民錬成を實にすべく努力して參つたのであるが、今や大東亞建設の聖業が雄々しく進められてゐる現實に直面して大東亞日本人の育成こそ皇國民錬成の具體的把握でなければならぬと信ずるのである。

洵に劃期的なる國民教育制度の刷新に當り、實に雄大なる構想の下に進展しつゝある大東亞建設の基礎工事たる大國民の錬成に當る教育實踐者の任務は眞に重且大なるものがある。われわれは彼の戰線に於ける勇士達が日本人の眞面目を身を以て示されつつあるあの意氣を以て日々の教育實踐に邁進し、國民學校教育の眞髓を發揮すべく献身的努力を致さねばならぬ。それが教育者の聖業を翼贊し奉る所以てある。

わが長野縣師範學校附屬國民學校に於てもお互の乏しきを顧みずかゝる意氣を以て諸先生方の御指導の下に教育實踐に精進しつゝあるのであるが、これ等實踐記錄を整理することは次の發展への契機となり、且は互の備忘として有意義であると考へて、こゝに實踐記錄を整理し長師附屬國民學校叢書として刊行することにした次第である。國民學校草創の機會でもあり、一般國民學校教育の實踐者に對しても何等かの參考となることあらば斯教育進展のため洵に望外の仕合せである。

長野縣師範學校附屬國民學校教科研究會代表

上條茂

序

洵に劃期的なる刷新であるだけに、國民學校教育に於ては幾多その特色とする點を列擧し得るのであるが、われわれ教育實踐者にとつて感銘深く且その責任の重大なるを感ぜしめられることの一つは、指導監督の責任者である文部當局が教育實踐者に對して直接指導の手をさしのべられ、指導の責任者と實踐の責任者との一體的協力によつて健全なる國民學校教育の發達を將來せんとの熱意を示されてゐる點である。これは法規の上にも、教科書教師用書の編纂の上にも、講習協議會などの開催の上にも、大臣以下文部當局の視察指導の上にも、よくこの精神を見得るのである。

尊嚴なる我が國體に基づく獨自の國民教育制度が實施せられて二年、この崇高なる教育精神・制度を充實して行くのは正にわれわれ教育者の努力に懸つてゐる。その意味で教育實踐者の責任は洵に重大と謂はねばならない。殊に初等科第一學年に於ける綜合授業については、その教育的意義を認めこれが實施については法規に規定してゐるのであるが、實施上幾多の方法上考慮すべき問題の存するのに鑑み、直に一般國民學校に實施することなく、高等師範學校附屬國民學校、府縣師範學校附屬國民學校に於て實踐、研究せしめその成果に俟つて漸次一般に及ぼさんとするの態度に出でられてゐるのである。われわれ職を師範學校に奉ずる者は格別なる實踐上の責任を感ずる次第である。本書「國民學校に於ける綜合授業」もかゝる使命に鑑み、本省の指示に基づき、國民學校制度實施の準備期間たる昭和十五年度より本年に至る三ケ年間、初等科第一學年三組に渡つて、當校附屬國民學校訓導の周到なる用意の下に實施し、熱心に實踐・研究せる結果の記錄である。

本書は法規の趣旨に則り、皇國民錬成を主眼とする國民學校教育に於て、特に初等科第一學年に綜合授業の要求

せらるゝ教育的意義を明らかにし、そこに立脚して綜合授業の方法的考察をなし、三ヶ年の實踐の成績について述べて聊か綜合授業實施上の諸問題を明らかにしたものである。綜合授業實施に關し一般の參考となるところ尠からざるを信ずるものである。殊に綜合授業の精神は入學當初に於ては、綜合授業を實施するとせざるとに拘らず、必ず具現せらるべき性質のものであるを以て、初等科第一學年の全期間に渡つて綜合授業を實施せざる一般初等科第一學年の學級經營の上にも亦好箇の參考となるであらう。

本書の構想、材料の整理上については青木誠四郎先生の御教示を賜はつたことを記して感謝の意を表したいと思ふ。尙本年六月二十日には綜合授業の實際について、親しく橋田文部大臣閣下の御視察を仰いだことは洵に光榮の至りである。綜合授業實施學級の擔任者は昭和十五年度太田訓導、昭和十六年度隱岐訓導、昭和十七年度神波訓導であり、これ等學級擔任者の實踐記錄は山積してゐるのであるが、紙數の關係上ここにはその一部を摘錄せるに止りたるは遺憾であるが、凡そ綜合授業の概貌は傳へ得たことと思ふ。一言記して序とする。

昭和十七年九月五日

長野縣師範學校長　能谷美登利

長師附屬國民學校叢書の刊行

目次

序……一
第一章　國民學校に於ける綜合授業の意義……二
第一節　綜合授業に關する法規……八
第二節　初等科第一學年兒童の特質と綜合授業……一五
第三節　兒童生活の轉換と綜合授業……一八
第四節　從來の合科學習と國民學校に於ける綜合授業……二四
第二章　綜合授業方法論……二四
第一節　教科書の教材系統と綜合授業……四三
第二節　綜合授業の方法的原理……四八
第三節　綜合授業の教材體系……五五
第四節　綜合授業の指導計畫……

第三章　綜合授業の實際……五九
○私タチノ學校……六〇
○天　長　節……九五
○丹波島川原……一〇九
○七　夕……一二九
○お　天　氣……一二七
○善　光　寺……一四四
○お　客　様……一五三
第四章　綜合授業實施上の諸問題……一五八
第一節　綜合授業の反省……一五八
第二節　綜合授業に關する施設……一六五
第三節　綜合授業擔任教師……一七〇

國民學校に於ける綜合授業

國民學校教育の目的は言ふまでもなく、「皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的錬成ヲナス」にあるのであつて、これ實に我が國體に淵源する教學の本義を徹底し、教育の全般に亙つて皇國の道を修練し、以て大東亞建設の聖業翼贊の負荷に堪え得る次代の大國民を育成するにあるのである。而してこれが目的達成のために最も重要に考究せらるべき問題の一つは方法的考慮である。由來方法は目的を實現するための手段であるが故に、目的を離れての方法は存すべくもなく、すべて皇國民錬成の一途に期すべきは勿論である。國民學校制度實施に當つて文部當局はその目的實現のために、各方面に亙つて細心の注意を拂はれてゐるのであるが、方法的考慮にも亦愼重なる注意を拂はれてゐることはよくうかゞはれるところである。初等科第一學年に於ける綜合授業の如きもその一つと言へよう。

國民學校令施行規則第二十七條にも示されてゐる如く、綜合授業については其の長所は十分認められつゝもその實施については極めて愼重なる態度を持され、相當の準備期間を設け、夫々の實施機關を通じてその研究を進められてゐるのである。當附屬國民學校に於ては、師範學校長會議に於ける文部當局の指示に基づき、附屬國民學校の使命に鑑み、國民學校制度實施に先立つて昭和十五年度より進んで第一學年の一學級に綜合授業を實施し、これが實踐的研究を積むこと三年に及んだのであるが、玆にその方針、經過の概要等の大要を記して參考に資し度いと思ふのである。

第一章　國民學校に於ける綜合授業の意義

第一節　綜合授業に關する法規

一　國民學校令施行規則第二十七條第五項

國民學校に於ける綜合授業については、國民學校令施行規則第二十七條第五項に「初等科第一學年ニ在リテハ學校長ニ於テ地方長官ノ認可ヲ受ケ全部又ハ一部ノ教科及科目ニ付綜合授業ヲ爲スコトヲ得」と定められてあり、國民學校教則案說明要領には、「初等科第一學年に於ては周到なる監督の下に全部又は一部の教科の綜合教授をなすことを認めた。ここに綜合教授とは家庭の未分化的な生活から分科的教授に移行する過渡期に於ける未分科の教授を指し、夫が教育上自然的で且必要な處置であることは夙に識者の間に唱導せられ諸外國に於ても或程度の研究は遂げられてゐる。けれども之が實施には十分な注意を必要とし、若し教育者其の人を得ず、施設宜しきを得ざる時は綜合教授の長所を發揮し得ざるのみか、却て惡結果を來すのおそれがあるから、一般の學校にありては文部省より地方長官に對し何分の指示をなしたる以後之を實施することとし、高等師範學校附屬小學校、師範學校附屬小學校に於て適宜之を研究せしめ、其の成果に鑑み一步一步之を擴大することゝした。」と說明されてあるのは周知の如くである。

斯の如く國民學校に於ける綜合授業は皇國民の錬成を目的とする國民學校教育に於て、その方法的特質の一として初學年の兒童の意識、體驗に於ける未分化狀態に基づく過渡的段階の授業法として法規の上に認められてゐるものである。更に綜合授業の教育的意義については教育審議會答申要綱並にその說明及び國民學校教科書編纂上の趣旨等よりもうかゞひ得るところである。

然るにこの綜合授業はその實施について、地方長官の認可の下に行ひ得べきことが規定され乍ら、文部省に於ては、これについてその後何等の指示をも與へず又法令中に實施し得ることを明記しつゝもその認可については相當に嚴密なる態度を以て臨んでゐるやうである。さしあたつては先づ高等師範學校附屬國民學校、府縣師範學校附屬國民學校等の特別なる準備を持つ學校に研究的に實施せしめ、その成果に鑑み適當の時期に及んで何分の指示が地方長官に發

せられるものと思はれるのである。尙高等師範學校附屬國民學校、府縣師範學校附屬國民學校に於ける研究と並行して文部省內に於ても委員を定めてその認可基準についての研究が行はれてゐるとの事である。

然らばこの國民學校に於ける綜合授業が理論上、又過去のこの種授業實施の經驗よりして、低學年の教育に實施して妥當の方法たることが認められつゝも、未だ我が國初等教育の現狀に卽して考へる時、その實施の時期が尙早なりとされるのは如何なる理由によるのであらうか。先づ教則案說明要領に示されてゐるところの㈠教育者その人を得ること、卽ち教師の問題、㈡施設宜しきを得ることの他に、(1)從來我が國に行はれ來つたこの種の方法には自由主義的基調に立てるもの多く、兒童の活動も個人主義的色彩が強かつたこと、(2)教科書に依存せず取扱が整一的ならざること、(3)これに適應する教科書の編纂が困難なること、(4)兒童の學力の問題、(5)我が國の實情に卽した準備研究の不足、等が考へられる。

これ等はいづれもその實施を阻む障碍と見られるものであり、文部省もこれ等の點を懸念されてか相當の期間をその試驗・準備期間として、愼重なる研究に俟たんとされてゐるのは亦故あることと謂はねばならぬ。

而し綜合授業に對する準備研究の不足なる點よりしてその實施を拒むことは、綜合授業そのものを拒否すべき理由とはならない。我々附屬國民學校に職を奉ずる教育實踐者としてはその立場よりして、國民學校教育の趣旨に最もよく適應した教育方法を考慮實踐することは何より重要な使命でなければならぬ。綜合授業についても、過去の成績のみから見て消極的態度に終始することは當らない。あくまでも法規の精神を省察し、その教育的意義を明確に把握し、積極的に進んでこれが實施研究に當り相當期間の實施成績を嚴正公平に檢討し、我が國體の本義に適ひ、進取創造的なる次代の大國民を育成するに足る適切なる授業形態を將來せしむべく不斷に工夫努力すべきであると思ふ。

二　國民學校に於ける綜合的取扱並に綜合授業

國民學校教育の根本的特色は、それがすべて皇國の道に則ることであり、皇國民錬成にある。又その方法に於ても、從來の注入的、分科的方法を避けて皇國の道への全一的統合が意圖されてゐることである。國民學校に於ける統

合的全一的趣旨は、既に教育審議會第一回の總會に於ける近衛首相の挨拶及び文部省の諮問案についての伊東次官の趣旨說明にも明らかにこれを見ることが出來る。又教育審議會の答申要綱並にこれについて行はれたる田所特別委員長の報告要領等にも、明らかに教育の劃一的・形式的・抽象的・分離的の弊を打破し、綜合・聯關・統合・若しくは一體といふことを屢々繰り返し强調し、而も重要なる意味を與へて强調されてゐる。從來の小學校の十三乃至十五に分るゝ教科目は、國民としての須要なる資質錬成より國民科・理數科・體錬科・藝能科・實業科の五教科に統合せられ、更に授業の方法上に於ても、「初等科第一學年、第二學年ニ付テハ周到ナル監督ノ下ニ全部又ハ一部ノ教科ノ綜合教授ヲナスコトヲ認ムルコト」とされてある。この答申要綱の趣旨說明には、「我ガ國教育ノ本義ガ皇國ノ道ノ修練ニアルコトヲ明確ニ」し、義務教育八ケ年の努力を擧げてこの本旨に綜合統一さるべきことを述べ、玆に國民學校教育に於ける根本的なる統合の性格を示し、更にその統合の眞精神を明らかにし、教科統合の精神を述べてゐる。そしてその方法に關しての說明には、「別紙教科ノ備考ニ記載シタル如ク、特ニ初等國民學校第一、第二學年ノ教科ニ關シテハ周到ナル監督ノ下ニ之ヲ綜合教授ト爲スコトヲ認メタノデアリマス。」と述べられてゐる。

以上の如く教育審議會の答申及びその說明には明らかに教育的主張として綜合的の動向が見られ、その方法に於ては統合されたる四・五の教科の下に各教科・科目の相互關聯を緊密にし、特に初等科第一・二學年に於ては綜合教授をも强調してゐた。然るに「綜合教授」に關しては、それが後に至つて國民學校令施行規則に「綜合授業」として規定され、而も第一學年のみに限らるゝに至つたのであるが、それ迄には相當の錯綜した經過があつたかの如くである。卽ち教育審議會答申要綱についての田所特委員長の說明には、初等國民學校教科案にその第二項として最も明瞭に第一、二學年の綜合教授が强調されてゐたのであり、その後この答申案が條文化された教則案にも矢張りこれが明瞭に現はされてゐる。卽ち昭和十五年一月十二日の審議に提出された教則案には、「第　條初等科ノ課程ハ第一號表ニ依ルベシ」として教授時數を定め細案が記され、「第一學年及ビ第二學年ニ於テ全部又ハ一部ノ教科及ビ科目ニ就キ綜合教授ヲナスコトヲ得。前項ニヨリ綜合教授ヲ實施セントスル場合ニハ指導細案ヲ具シテ地方長官ノ認可ヲ受クベシ」と

記されてゐた。然るにこの案文が專門分科委員たる國民學校教科調査委員會に附された時は、種々實際上の考慮を拂ふ人々によつてかなり論議があり、昭和十五年三月一日の委員總會に附議された案には一應この條項は保留されて、たゞ分科會主査聯合會の名を以て次の如き附帶決議として添附されるに至つた。

「國民學校初等科ノ課程ノ第三項ノ次ニ左ノ項ヲ加フルヲ適當ト認ム。

第一學年ニ於テ全部又ハ一部ノ教科及ビ科目ニ就キ綜合教授ヲナスコトヲ得。

前項ニヨリ綜合教授ヲ實施セントスル場合ニハ細案ヲ具シテ地方長官ノ認可ヲ受クベシ。」これによれば綜合授業に關する規定は最初の案よりも漸次その積極性が稀薄となり、先きには初等科第一學年及び第二學年についての規定であつたものが第一學年のみに限定される結果となつた。そして五月二十一日の省議に於ては決定案として「第一學年ニ於テ全部又ハ一部ノ教科及科目ニツキ綜合教授ヲナスコトヲ得

前項ニヨリ綜合教授ヲ實施セントスル場合ニハ地方長官ノ認可ヲ受クベシ」の條項を施行規則の教科課程表に卽して規定されることになつたのである。

かくしてこれが昭和十六年三月十四日の國民學校令施行規則の條文にはその第二十七條に「初等科ノ課程ハ第一號表ニ依ル

第一學年ニ在リテハ學校長ニ於テ地方長官ノ認可ヲ受ケ全部又ハ一部ノ教科及科目ニ付綜合授業ヲ爲スコトヲ得」として示されることになつたわけである。國民學校に於ける綜合授業は大體以上の如き經過を辿つて、現在の如き形で法令中に示されるやうになつたのであるが、綜合授業の教育的意義は十分に認められてゐることがよく理解出來るのである。

綜合授業の實施については、そこに種々なる制約の存することは前述の通りである。教科の存立と夫々の意義特色を全く豫想せず、教科書を度外視した全學年に亙つての所謂合科學習は、國民學校の趣旨に添ふものでないことは勿論である。而し皇國民の錬成を根本原則とする國民學校教育に於て、その實際的取扱の上に授業方法として綜合的取

扱を認めたことはその特色とするところである。たゞ國民學校教育の趣旨に則つた授業方法としての綜合授業も、實際上技術上の問題に於ては、全國的な即時施行についてそこに多くの顧慮を要するのであつて、問題は寧ろ主として準備と時期の點にあるとも考へられるのである。

綜合授業實施についての準備が今迄に不足であつたこと、これに即した教科書の編纂が困難であつて早急の間に合はぬことは事實である。而しこれ等のことが綜合授業を否定すべき理由とはならない。而も綜合授業についての規定は必ずしも全般に亙つて強制すべきものではなくして、「ナスコトヲ得」といふ程度であり、且充分なる監督の規定も附されてゐるのであつて、弊害ありと認むれば直に監督官廳に於て禁止もし、指導もなし得るのである。この程度の法規は國民學校教育の實踐方法の考究にあたつて、洵に妥當なるものと謂はねばならない。

從つて先づ最初は適當なる條件を具へた高等師範學校附屬國民學校、府縣師範學校附屬國民學校等に於て適宜實施研究せしめ、これを討究し、以ておもむろに全國に施す豫定とされてゐるのである。

以上綜合授業に關する法規について、主としてそれが法文化される迄の經過を通して、その趣旨の存する所を考察して見た譯であるが、更に國民學校低學年教育に於ける綜合的取扱の趣旨を法規によつて考察して見れば次の如くである。

(1) 各教科並に科目はその特色を發揮せしむると共に相互の關係を緊密ならしめ之を國民錬成の一途に歸せしめる。教科・科目の實際取扱に當つて、或科目の全部又は一部を他の教科又は科目と特に相互連絡せしめることを必要とする場合が少なくない。このことは低學年にあつては特に重要視せられて居り、教材取扱の上にも各所にこのことが注意されてゐる。

(2) 教授・訓練・養護の分離を避け心身を一體として教育する。文部省訓令にも知德相卽心身一體の修練道場たるべきことが述べられ、常に國民的人格の統一的發展を期してゐる。この見地からも特に低學年に於ては綜合的取扱が強調されてゐる。

(3) 兒童心身の發達に留意し男女の特性、個性、環境等を顧慮して適切なる教育を施すように留意してゐる。國民學校に於ては心身の發達より兒童を四期に分ち、初等科第一、二學年を第一期(兒童前期)とし、この期は空想現實未分化、主客未分化の時期として、學習を未分化的全體的たらしめることを期してゐる。而もこの兒童觀は、皇國民錬成上よりの課程的意義から心理學者の研究によつて考へられたものであつて、決して兒童本位の兒童觀に立つたものではない。更に教科及び科目の排列については教則案說明要領に「初めはなるべく綜合的に、漸次分科的に進む方針によつて排列した。」と述べられてゐる。

(4) 課程表に見られる綜合的全體的取扱ひの趣旨。更に第一號表に示されてある教科・科目に配當された時間の併合の狀態を見ると、この趣旨を一層具體的に見ることが出來る。卽ち第一期の初等科第一、二學年にあつては、その授業時間の配當は教科を單位とし、國民科が合せて十、十一時間、理數科が五時間、體錬科と藝能科音樂と合せて五、六時間、他の藝能科の時間が合せて三時間となつてゐる。これは第一期の兒童の心意に卽して夫々の教科に於て科目は常に適宜に綜合未文化的に取扱ふようにとの意であり、更に各教科間に於ても課程表に卽して綜合的取扱をなし得ることが示されてゐるのである。

(5) 教科書編纂上に見られる點。教科書はすべて分科的に編纂されてはゐるがその教材の表現、實際指導に當つては出來るだけ各教科乃至科目の間を相互連絡して取扱ふようにとの意を各所に示されてゐる。ヨミカタ一教師用書には、「ヨミカタは單に國民科教科書としてヨイコドモと一體たる關係にあるばかりでなく、理數科藝能科の各教科書と殆ど餘すところなき迄に連絡相卽してゐるのである。けだし此の期(第一期)に於ける兒童は、見方、感じ方、理解の仕方に於て未分化であり、全體的直觀的である關係上、これによつて學習を未分化的全體的ならしむることを期するものである。」と述べてある。又自然の觀察一教師用書には第一期の特殊性について、「第一期第二期を通じて『自然の觀察』と言ふことになつてゐるが、施行規則第一號表によると第二期に對しては『自然の觀察』に獨立して一時間の毎週授業時數が配當されてゐるが、第一期に對しては理數科全體として毎週授業時數が定められてゐて、『自然の觀

察』と算數一般とに分けて配當されてゐない。これは等しく『自然の觀察』と言つても、第一期は特に算數との未分化的な度合を強くし、第二期は次第に分化を明にすることを意味する。即ち第一期は理科指導の第一段階であつて、算數と未分化的な點をその特殊性とする」。と述べられてある。即ち分科的な教材を實際取扱にはその分離的傾向を出來るだけ補つて、綜合的に取扱ふべき態度を示してゐるのである。

教科・科目の横の聯關の重視は、國民學校教育の根本趣旨に基づき、全學年を通じて充分に顧慮されてゐるのであるが、殊に兒童心意の發達過程よりして、兒童前期に於ては、各教科・科目の實際取扱に於て特殊なる科目の間に於ては右の如く實に密接なる關聯を持たしめ、その指導にそれ等科目の綜合的取扱を重視してゐるのである。

而も兒童が入學して學校生活に馴れる迄の一學期間位の過渡期を未分化的に指導する事は最も必要な事であつて、文部省に於てはこの期間は認可を受けることなく、何れの學校に於ても全科目に亙つて綜合的取扱をなし得ることを認めてゐるのである。即ち「初等科一學年への入學の初期に於ては家庭の延長として綜合的取扱をなさゞれば、兒童の生活指導不可能と思はれるが、この場合でも地方長官の認可を要するのであるか。」といふ教育實際家の質問に對して、文部省は昭和十五年十月、國民學校教員講習資料中に、「地方長官の認可を要する綜合教授は一年を通じての綜合教授で、入學初期に於ける綜合的取扱は受持訓導に於いて適宜處置」すべきであるとしてゐるのである。

第二節　初等科第一學年兒童の特質と綜合授業

一　初等科一學年兒童の特質

綜合授業の實施さるべき初等科第一學年の兒童とはそもそも如何なる特質を有するのであらうか。教則の說明要領に示さるゝやうに、家庭の未分化的生活から學校の分科的教授に移行する過渡期に立つ子供であるが、更にその發達の段階からは如何なる特色を有つのであらうか。國民學校では教科書編纂の立場から國民學校兒童を四期に分かち、この初等科第一學年兒童を第二學年兒童と共に第一期に屬せしめ、これを發達的見解のもとに兒童前期に位置するものとしてゐる。

兒童前期に屬する發達段階にある兒童心身の特色は、生活全體が融合未分化の形態にあるといふことであらう。そしてこの未分化の生活形態を最もよく特質づけてゐるものを、この期兒童に求むるならば、行動の中にあつて凡そ行動と共に表現し理解する行動性、刺戟に對する情緒的反應性と更に思考作用に於ける自己中心性及び全體的直觀的受容性等を擧げることが出來よう。以下初等科第一學年兒童に對するわれわれの觀察記錄に從つて、やや具體的に省察して見よう。

1　行動性

「城山公園の櫻狩」に於ける櫻花の觀察は四分咲だつたといふばかりではない、子供達は淺黄色の空を背にして可憐に咲き出した美しい花を見ることが出來なかつたのは、噴水あり、動物園あり、花の下には團子屋、おでんや、これに群がる人群あり、この活動的な場面が心をさらつてか、自然鑑賞の方へはその眼があまり走らなかつたやうである。否それは客觀を客觀として見る眼、眺める態度がないからであらう。

櫻樹のトンネル、記念公園の櫻を見廻つて大分疲れたので歸途寬慶寺に立寄つて參詣し本堂前の芝生に休んだ。寺につゞく墓地の中に一本の彼岸櫻が八分咲位に咲いてゐた。子供達はこれを見つけて、見るより早くとらうとしてゐるのである。如何にとりたかつたことか。これを制して一輪二輪宛折り與へられた時彼等はどんなに喜んだことであらう。手に持つ女兒、帽子の徽章にはさむ男兒、胸にかざる子。かくて二時間の花見も最後の寬慶寺の庭の遊びにおいて、少しく花に接した感ありであつた。兒童は自然をも亦自己の所有として、自我の一部分として、始めてそこにその意義を見出すもののやうである。（四月二十日土）

○

今日は七八分にも咲いた本校の手工室の裏の櫻の下へ行つて先づ取つて與へた。小枝を一本づつ。子供達は夢に群がる緋鯉のやうに皆もらひたがつて、しばし騒いでゐた。而し、折る手を止めて、爛漫と咲き出した花を見ようと、

時々見上げたりした。

一枝づついたゞいてゐる時二三の男兒は自分で木に登つてとつたりした。そして皆いただいた。女の子供はかたまつて、花をさしあげ、十時頃の日光すがすがしい空に鮮かに振りかざした。とても美しく見えたことであらう。男の子供もさうやつた。兩方とも向かひあつて美しさうに話しながら見入つてゐたが、一人の子供が握り占めた自分の花を喜びながら「萬歳」といつた。つゞいて皆さう叫けんだ。唉きほこつた三本の花の雲をふりむきながら歸途に着いた。

その夜六人の父兄に逢つた。子供達は夫々家に歸つて皆一樣に瓶に挿して大切にして居つたと話してくれた。私はつくづく思つた。子供は鑑賞の對象として自然を見るよりも先づ自己の行動の內容として持つて來ることが先行してゐることを。そして又思ふ。花を、分析觀察の對象として捕へるよりも、自己の友達、生命として自己自身と一體的に把握するものであることを。(四月二十二日月)

以上は最初に綜合授業を實施した年の四月の記錄である。初等科第一學年、このころの兒童は正に行動において物を理解し、對象を把捉する。この行動性を外にしては、到底外界の刺戟に答へる道を知らないのであらう。卽ち、櫻の花を對象的に觀察し、細密に分析する理知の發達を伴はないものと考へなければならぬ。この故にこの時代の子供は抽象數の計算や理論的構成、論理的抽象的思考の生活は營み得ないのである。初等科一學年に入學して來た兒童は、その幼少の時と同じやうに、正しく行動性をその生活の根本とする。而して、この行動性の特色は當に國民學校入學兒童の對象に對する反應・思考が、實に未分化的であるからである。

2 情緒性

第二にこの時代の子供は又實に情緒的である。この情緒の分化發達は新生以後四五年までに極めて著しい發達をするとされてゐる。青木誠四郎先生の「兒童心理學」三十二頁には次の樣に述べられてゐる。「かやうな情緒の早い發達は、後に述べる知的發達の比較的後年に屬する事と關聯してそこに幼兒の生活に注意すべき種々な特色を與へる事となるのである。卽ち、まづ情緒が早期に著明な發達を遂げて、推理、思考の知的な發達のおくれる事は、幼兒の生活が思考に訴へ判斷によつて環境に應ずると云ふよりは、情緒的にこれに應へそこから行動が誘發されてこれに應ずると云ふ趣を與へる。卽ち、成人の如く論理的な推理によつて、かくすべしと云ふ如き判斷をまつのでは無く、興味により情緒の動きによつてその生活を規定するやうになる。」と。本當に子供は知的判斷の生活よりははるかに情緒的規定の生活が多いやうである。

ミンナガ ベンキヤウ シテキタ トコロヘ コヅカヒサンガ クウシウケイホウトイツテキマタシタ。ソシテカバンヲ ショツテ マツテキルト カウドウヘ バクダンガ オツタ。一年生ヤミンナガ ニゲテイツタ。シバンノニハヘニゲテキタラ マタ テキノ ヒカウキガ キタノデ マタ ニゲテイツタ。カモジンジヤデカクレテキルト ヒカウキガ ニゲテイツタトデンレイガ キタ。ソレデミンナガ ガツカウヘ カヘツテミルト フゾクハ ブジダツタ。ボクハ アンシンシタ。カウドウヘ イツテミルト ミヅダラケ ダツタ。ボクハ ガツカウガモエタカト オモツテ シンパイシテ キタラ ガツカウガモヘナカツタカラ ヨカツタ。ソシタラミンナガ カウドウ イツテミタラ スコシモ ヤケテキナカツタト イツタ。ボクガ モウ一ド イツテミルト ナカガ スコシヤケテキタ。アンマリヤケテキナイデヨカツタ。ボクハ ハジメ バクダンガ オツコツタトキハ ビツクリシテ マダ オツカナカツタ センセイガ モウダイジヤウブダトオツシヤツタ。ソレデモ ボクハコハカツタ。ソシテ ベンキヤウ ヲシテ イタラ シウシウト オトガ シタノデ ビツクリシテ マドノ トコロヘ イツテミタラ コヅカイサンガ ポンプ デ ナニカシテキタカラ キイテミルト ミヅマキヲ シテキルノダト イツタ。マタベンキヤウ シテキルト マタ ヘンナオトガ シタ。マタ マドノ トコロヘ イツテミルト モンヲ アケタ オトダツタ。ボクハ シマナクテ ヨカツタ。サツキハ オツカナカツタ。マタクルカト シンパイダ。(七月十八日作。一年男)

昭和十五年七月十八日。何時敵機の來襲を受けぬとも限らないので、附屬では防空避難演習を實施した。子供達は

本當に支那の飛行機が來て爆彈を落したと思つたやうである。眞青くなつてにげた。隊伍の中で泣きながらにげたものもあつた。右はその日に作つた綴り方の一つである。

程遠い講堂迄調査に行く子供、庭先から來るふとした刺戟にも出て行く子供。かゝる行爲も靜かに考へれば何でもないものを、恐怖の然らしむる情緒的行動として現れてゐるものと考へられねばたらぬ。さういへば、同じ年夏季修養會のことも思ひ出される。その記錄中に

茂菅溫泉の廣間に集つて來た子供達。ヅボンをまくつて川からあがつて來た子供。草笛を手に持つ子供。花を持つ子供。廣間に四角に行儀よく並んでゐる。午前十時。おやつの時間である。大きな箱から出してキャラメルを一箱づつ與へて行くと、驚く程お行儀のよい子供達。喜びを胸にして今か今かと待つてゐるからでもあらう。一番最後の子供の時であつた。「ないかなあ」と言つて大箱をのぞくやうに手を出した。すると「ワーツ」と大聲を擧げて泣いてだきついて來た子供がある。大箱から出したキャラメルを手にしながらもしばらくは泣きやまなかつた。子供のこの行動は正に刺戟に對する感情的思考の應答に外ならない。かく感情と行動とが不可分に結びつく時、兒童の思はしからざる行爲行動を是正する道は一つある。それはその行動に結びつく刺戟の排除によつてでなければならぬとしみじみ思はざるを得なかつた。(七月二十五日)

この情緒性はこの時代の子供の精神的特色の一つである。而して、かゝる情緒的生活現象の常に見られる原因はこれ等の兒童の精神の發達過程が正に未分化な情態に存するからであると考へられる。前引用「兒童心理學」三五六頁には「かやうな行動性と情緒性とは、幼兒の生活の未分化な狀態から來る大きな特色と見られるのである。」と述べられてゐる所である。更に第三の特色として、兒童の自己中心性がある。

3　自己中心性

新生兒の時期から續く漠然たる時代につゞいて現れる思考する生活の始めに所謂自己中心的傾向を示すとされてゐる。卽ち自己の主觀的存在だけあつて自己以外のものはそれと融合して、その故にこれと自己と對立しない。この

他者を自己と同じに思ひ、同じに感じてゐる狀態が卽ち自己中心性である。

自己中心性に生活する故に、第一に兒童は物語なり、文章なりの主人公と直ちに一體となる。豐かな空想をめぐらして童話の中に飛び込み、その童話中の英雄に自分自身がなりすましてしまふことをしばしば見受ける所である。第二に情緒性行動性と一緒になつて、先生のお話の主人公になりすまして、そのお話の延長を自分のことゝして語り出すことがしばしばであつた。これが脫線するとそれからそれへと橫道へは入つて行つて、隨分こまらせられることになるのである。

第三に生物は無論のこと、器物、無生物に對して呼びかけて行く。空を飛び來る飛行機に「ヒカウキ、オリテオイデ」と呼び「ギンナンの實、澤山おちろ」と叫んでゐる。

第四に自分の思ふこと感じたことを客觀的に構成し、他に說明することが困難なやうである。教師の問に對し、恐ろしく元氣よく擧手した子供がつと立つて、さてこまつた樣な顏をしてゐることが折々見受けられるだらう。これは虛僞ではなく、本當に知つてゐるのだけれども表現的自覺に到つてゐないことを意味するものに外ならぬ。

かゝる幾つかの現象はこの時代の兒童の自己中心性に由來するもので、思考の形態に於いて根本的に自他の區別を見得ない未分化性から來る所と考へられる。

4　全體的直觀性

○　今日は輪投げの遊びをした。梧桐の樹の下で男女二組にして、一人に二箇づつの輪を與へた。大きな圓を二つかき、中央に柱をおいて、この柱に投げかけて競爭をさせたのである。子供にとつては、どちらが多くは入つたかよりも却つて、圓の中に投げてしまつた「輪」を拾ふことに興味を持ち努力してゐる者が多かつた。協同意識、團體的責任感は淡く、個人意識、自我慾のみ旺盛なるを如實に見た思ひがした。

○　この遊びは一時間中殆んどあきることなく出來た。そしてやうになつた。男兒の中にはその負ける理由として、① 女の圓の小さいこと　②女は圓の中に足を踏み入れて投げ勝負に於てはしば〳〵後には女が勝つて男が負ける

ることなど比較研究して申立てて來た。

大小の觀念は直觀的に強く正しく把握するもののやうである。

○　又この量の直觀は次の事項にも表れてゐた。即ち、投げ終るや、柱にかかつた輪を見て、直ぐに「負けた、負けた。」と言つたり。「今度は勝つた、勝つた、」と叫けんだりした。實に皆が投げ終つた直後言ひ合ふのであつた。量の集合を直觀してその大小を知る能力は、これを數へて知る方法によるより先に會得したもののやうである。（四月二十二日）

自然の觀察に於て、圖畫の描寫に於て、この全體的把握・直觀的な理解は往々にして見受けられる所である。分析的・論理的・抽象的理解は彼等の能くとらざる處である。凡そ全體的生命を銳敏に直觀するのが又この兒童の特質であつた。而してその由因する所以は正に知性の芽の分化發達せざる所にあると考へられねばならまい。彼等の精神發達の未分化段階が然からしむるのに外ならない。

以上の行動性、情緒性、自己中心性、全體的直觀性等の特質は國民學校入學兒童に就いて、われわれが常に觀察し得た結果から裏づけることが出來ると考へられるが、心理學者も亦この六才乃至七才迄の兒童の精神的特色として多くこれらを擧げてゐる所である。而してこれらの特質は悉く、未分化性に因由するといふことが出來るであらう。

二　綜合授業

かゝる未分化の發達段階にある兒童に對して如何なる教授形態が最も有効適切なるものであらうか。輪投遊びの記錄の一節は次の如くである。

「量の集合大小を直觀出來たのであるが、早速、これを數へ調べることによつて集合數の理解に導かうと考へた。然るに、兒童はそこには全く興味をもたなかつたのである。勝敗を且は喜び、且は殘念がりして、數へやうとする意欲は自然に湧かなかつたのは殘念である。」

大小のわかつた量を數へることは現實に起つた具體的事實の抽象的作業に外ならぬ。全體を全體として見、事實を事實の具體に卽して了解するのがこのころの兒童である。そこに全生命力を擧げて行動的に情緒的に全體的に直觀的に了解しようと意欲する。かゝる現實の子供に對して營なましむべき教育の方法に、分科學習を以てすることが果して妥當であらうか。分科はその性質上事實具體の抽象的分析的の論理的構成に基づく論理的體系に成立つものに外ならぬ。かゝる原本的性格に立つ分科的學習がこの兒童前期の未分化的發達段階に在るもののよき學習方法でないことは明らかなるところである。また同樣に發育不十分なる身體を持つ兒童でもある。この心身の未分化的發達段階にあるものへの教育方法として必然的に要請されるものが卽ち國民學校の綜合授業でなければならぬのである。

第三節　兒童生活の轉換と綜合授業

一　學校生活の開始

國民學校入學以前の兒童は、その大部分を家庭に於て生活してゐる。それが入學といふ兒童生活にとつては劃期的な變化によつて、今迄とは凡そ樣相を異にする新な環境に入り、學校生活の開始となるのであるが、これは兒童にとつては實に大きな生活上の轉換であり、これが心身に及ぼす變化も亦著しいものがある。今迄父母兄弟その他の家族や、限られた人數の友達とのみ生活し、時には一家愛撫の中心となつて起臥寢食に拘束なく、誰に對する氣兼ねもなく、自分の興趣のまゝに振舞へる言はゞ時も場所も心も自由なる氣儘な生活に馴らされて來た兒童である。それが學校といふ整理されたる生活環境に於て、同級生といふ何十人かの見知らぬ顏を始め多くの年長兒童との共同生活の間に入り、机の澤山竝ぶ教室、長く續く廊下、便所、運動場等すべてが目新しい生活である。而も兒童には偉大な權威者たる先生に初めて接して、非常なる緊張の生活が始められるわけである。以後每日かゝる學校生活が續けられるのであるが、實に急激な飛躍的な變化と言はなければならない。この變化に接して、兒童は無意識であつても、甚だしく心身の疲勞を感ずるのであつて、兎に角一度はその活動性が委縮し、新な生活環境に順應せんとする努力がなされ

るのである。

もとより入學以前の生活にも學習はないことはない。就學以前の兒童は夫々家庭に於て自己の活動を中心として、心身の兩面に亙つて未分化的な躾が行はれ、又一般社會からも種々なる學習が與へられ、自發的訓練が營まれるのである。而し家庭に於てはそれが極めて自然的であつて意圖的でなく、家庭の雰圍氣の中に於ての生活を共にしての導きであることが特徴であり、又一般社會からのものは、それが同僚間に於ける遊戲的交涉の間に於て無意識的になされるのである。これに反し學校は人爲的・意圖的・目的的であつて、入學によつて新に秩序が要求され、規則的、團體的な生活が營まれ、一定の規格の下に生活することになる譯である。このやうな點からも兒童の環境の急變を顧慮した「適切なる教育方法」が實踐されなければならないのである。

二　社會的團體的訓練

而も學校に入學するといふことは單に知識を學ぶのみではない。共同體としての學校生活の開始と共に學級社會に入つて、學級に於ける社會生活の開始となるのである。學級では教師を中心とした團體的な社會生活に入り、學校としては校長を中核とする共同體に入つて、學級・學校の一員となり、社會的訓練を受け、立派な皇國民としての基礎的訓練への出發をするのである。從つて入學直後はこの意味に於て殊に重要な意義を持つのであつて、先づ家庭生活と學校生活との懸隔をなるべく緩和し、教師に親しみを持たしめ、學校に親しませ、毎日喜んで登校するやうに導くことが何より大切なことである。學校生活の第一印象となる最初の期間の指導の如何によつて、兒童の學校・教師・學習に對する觀念や態度が基礎づけられ、級風も自ら作られ、將來を左右する力となるのであつて、この期間は殊に重要視されなければならない。

個人的な家庭生活より團體的な社會生活に入らしめる第一歩は先づ兒童の持つ自我中心的傾向を自然に社會化して行くところにある。兒童は兒童自身の獨自性に生きると同時に一面學級・學校の一員としてその社會に順應し、交涉して生活せねばならない。而も入學直後は同級生をお互に知らぬ關係から、勢ひ群集的共同體を作ることになる。この群集的學級を教師を中心とした組織的結合體としての協同體に導く努力が先づ必要なのである。

カズノホン一の四頁には「おはじき」の教材がある。これは竝んでゐる同志で持つたおはじきの數をあて合ふ遊びから入つて、おはじき遊びをさせ、更にそれから發展させて面白い形の竝べ方を工夫させ、その間に空間觀念の基礎を指導するものであるが、かうしたお互に「……しあふ」といふ遊びはこの頃の兒童には自然で、お互に工夫し、自ら社會化を習得して行く第一歩をなすものと言へる。更にそれが「……どつこ」の形に進めば、その生活の場に從つて次第に人數を增して生活の仕方、正しい處理の仕方も工夫され、自己中心的な傾向も順次反省され、協同作業の初歩も躾けられ、更に、この時期からの兒童には最も適した人數の單位であるところの「自然の觀察」に言ふ四人組の協同作業に進むことが出來るやうに考へられるのである。兒童の社會性の訓練、團體生活の修練は以上の如く教科書においても系統的に考へてゐるのであるが、兎に角も、比較的狹い家庭社會から學校社會に展開されて行く時、これが移行に特別な指導形態を要求するのは又當然である。ここにも亦生活轉換期に於ける綜合授業の必要なる所以を見ることが出來るであらう。

三　初等科第一學年に於ける綜合授業

尙一面兒童には入學と言ふ變化を契機としてそこに特に新な心構へを持つものであることを忘れてはならない。學校へ上つたと言ふことゝ「お前はもう國民學校の生徒ではないか。」と言はれることとは、そこに大きな覺悟が與へられ、生活再構成の意志力を喚起せられるのである。そしてそれによつて家庭生活迄も規制せられて來るものである。この兒童相應の自覺は見逃すことの出來ない大切なるものであり、兒童の自發活動の根源をなすものと言ふことが出來る。

綜合授業は、單に未分化的な家庭生活から分科的な學校生活に移る過渡期の兒童の生活に於ける飛躍的變化を一時的に緩和するための、單なる方法上の橋渡しとしての目的のみに立脚するものと考へることは出來ない。この入學と言ふ環境の變化によつて起る兒童相應の自覺、心構へを學校生活・家庭生活・社會生活の上に生かし、更に學校生活に

おいて全一的綜合的の觀方考へ方の基礎を養ひ、自修の習慣を養成して、皇國民としての自發的・實踐的態度・生涯修業の基礎を啓培すべき教育實踐の一階程に立つ方法としての意義をも考へ得るのである。

斯くして初等科第一學年に於ては、先づ兒童を家庭生活より學校生活へ極めて自然に圓滑に導入して、幼兒末期の兒童心意に卽した獨特の學習生活をなさしめ初等科第二學年の分科教授への移行を圓滑ならしめる所に綜合授業の意義が存するのである。

第四節　從來の合科學習と國民學校に於ける綜合授業

我が國に於ける國民學校以前の綜合授業の研究は專ら合科學習とか全體教育と稱されて實施研究され來た。大正九年四月より開始された奈良女高師附屬の合科學習は卽ちその一つに外ならぬ。奈良附屬に於ける合科學習は、學習者自らが教師指導の下に或整理された環境の中にあつて、自ら機會を求め、自ら刺戟を得て、自ら目的と方法とを定め、社會的自我の向上と社會文化の創造とを圖つてゆく教育作用に立つ學習論を低學年の學習に實施したものといふことが出來る。「學習研究」(一九二七、一一號)に「私が合科學習に想到したのは如何にすれば、低學年の兒童が自ら學習內容を定められるかの疑念が端緒となつたのである。それから考へれば考へる程、今の分科制度が邪魔になり、形式的劃一的の時間割が邪魔になつた。斯く考へてゐる間に不圖思ひついたのは兒童が入學する前の家庭生活である。學校教育に眞似て居ない家庭教育では別に教師があるのではない。勿論、學科別も學年別もない。規則も賞罰もない。然るに子供は幾年かの後には相應に發展する。家庭の環境如何に依つては文字も覺える、計算もするといふ有樣である。私は考へた。この家庭教育固有の意義を保持しつつ、更に之を改良して之を學校に延長したならば、必ず低學年の兒童も學習することが出來て、人生を渾一的に發展させることが出來る。斯くて自信は得られたが實施上の困難が尠くなかつた。」と木下主事の述べてゐる如く、家庭生活の延長の中に學習理論を樹立獲得して、そこに合科學習指導を意圖したものに外ならぬ。かくて學問授與、知識注入の教師中心の教育に反抗して兒童性を尊重した教育精神を明らかに汲みとることが出來るのである。

家庭教育に暗示を受けた教育方法については、ベルトールド・オットーが思ひ出される。彼は一九〇二年に伯林に家庭學校と稱する私立學校を開設し、そこの教育法の一つとして合科教授を實施したのであつた。その方法に從へば、六歲より十九歲までの全校生徒を一堂に集め、自由に對話や意見やらを言はせ、オットーは勿論、出席せる他の教師や參觀人迄がその仲間入りして談話を交換するのである。日日食卓を圍んで食事をとる家族の間に行はれる自然なる教育を彷彿せしむるものがある。

このオットーの方法は在來の教授とは凡そ相對立するものと言ふことが出來る。卽ち、先づ第一に、學究すべき問題の主題は原則として兒童から提出される。兒童は何について學ぶかを決定し、如何に進展するかを決定する。その決定には一切學科の制限がない。出來得る限り兒童間に問題の發見と討究とをなさしめ、最後に自身が結末をつけるのであつた。彼は卽ち、世界は全體として吾人の前に立ち、吾人は又全體としてそれを支配せんとする。それの支配の仕方や方法にも制限はない。總ては個人精神及びその全體精神の自然的成長を期するのであると考へた。卽ち彼の家庭學校の教育の本旨として、兒童の力の陶冶を考へ、そこにも我々は、彼が兒童を尊重し、兒童性を完全視し、兒童精神の自然發達に信賴し、かくさせることが教育の使命の核心であるとする彼の教育的信念を見ることが出來やう。これ等は正に教師主體の教育、知識の注入が、教育の對象の興味や意向に無關係に營まれた舊教育の否定面として新しく登場した二十世紀の革進教育の先驅に屬するものと言はなければならぬ。全兒童の興味と要求とを土臺とする教育方法、兒童の新しい把握の優れた仕方の反面に我々は「兒童自身が、それに依つて、又それを以て自己を陶冶する限り如何なる材料と雖も正當である。」とする單に個人の完成を本旨とする缺陷を認識しなければならない。

奈良女高師附屬に於ける合科學習は、オットーのそれと直接何等の關係は無いやうであるが、先にも述べた通り「學習論」と一體的發展をとつてゐる以上、その根本思想は、新教育の根本思潮をなす兒童中心觀の教育思想でなければならぬ。當時の主事木下氏の「學習原論」には氏のいふ學習概念の內容について、次のやうなことが論述されてゐ

る。

まづ第一に、學習は教師指導の下に行はれる。とし、「教師の言行を以て直接に兒童生徒の言行を拘束し指導するのは教師中心の教育法に於いては重視する所であるが、兒童中心主義の學習法に於ては教師は直接に學習者を動かす事を成るべく避けて出來るならば間接に指導し、兒童生徒に自ら進んで學習を遂げさせる樣に」することを重要視しなければならぬといひ、第二に、學習は整理された環境を必要とすることをのべ、環境には自然的環境と社會的環境とがある。教師や學校や家庭は何れも學習の環境となつて學習者の行動に影響を與へるものである。人は環境に支配せられ、順應を餘儀なくさせられる。若し順應が出來なくては生存を絶たれる。之と共に人は環境を創造し自己に順應させる。玆に文化の進歩があり、人生の意義がある。人と環境とは互に因となす果となつて影響を與へる。學習者は整理された環境中にあつて學習する。其の環境を整理することも重要な學習である。兒童中心主義の學習に於いては環境整理は實に重大な要求なのであるとしてゐる。第三に學習の目的は社會的自己の建設、社會文化の創造。とし、卽ちいふ、學習の目的は簡單に言へば自己の建設である。而もその自己は社會化したものでなくてはならぬ。社會的自己の建設は同時に社會文化の創造である。我々は個人と社會とを同體二面と見て行かねばならぬ。從つて社會に依據して進展した學習でなくては決して學習の目的を達することは出來ないとしてゐる。

かゝる根本思想としての學習論より生れ出たこの低學年合科學習は奈良女高師附屬に漸次體系化し、東京女高師附屬の作業主義全體教育と共に大正末期より昭和初頭へかけては、全國各地の小學校低學年教育に大いなる影響を與へたのではあるが、これ亦オットーに於ける危險を禁じ得ない次第である。

凡そ新しい研究といひ、新しい發足といひ、これらは常に眞實を追求し、本然の道にあこがれて止むことなき者の間に生ずる奔流の如き情熱の結果、具體、實踐として形成されるものに外ならぬ。奈良女高師に於ける合科學習の實踐的研究も亦正にかゝる追求心の情熱の結果生み出された貴重なる研究といふべく、我々のこれに學ぶもの尠しとしないところであるが、國民學校綜合授業の新しい發足を見る今日に於いては既に根本の問題に於いて遺憾な點の少なくないのを見るのである。

國民學校に於ける綜合授業は第一に皇國の道に則つて兒童を皇國民に迄錬成する初等科第一學年に於ける教育方法でなければならぬ。兒童性を尊重し且兒童の心身發達に卽應して施さるべきは勿論なれども、どこまでも皇國民の錬成にして、個人の完成、社會的自己の建設を目的とする教育であつてはならないのである。この點に思ひを致す時、所謂生活環境の整理の原理と方法に於いて、或は生活題目選擇決定の方向と手段に於いては極めて深い考慮賢察が拂はれなければならぬ。單に個人格の完成の目的のため兒童の興味のみに墮することなく、兒童の心情に卽しつゝ而もそこに皇國の道の如實に通ふものでなければならぬ筈である。かゝる生活題目を通して、行爲しつゝ働きつゝ學ばしめる所に兒童相應の道の錬成が重ねられてゆくのである。

第二に綜合授業を施すべき兒童は國民學校第一學年の兒童である。昨日迄家庭生活乃至は幼稚園の生活を營んでゐた子供達ではある、そして又兒童(卽期(第一期)に屬する未分化の兒童には相違ない。而も國民學校入學の今日よりは、この兒童が一人なし國民學校兒童としての名譽を心に覺え態度に表して、言行その日から改まるのをしば〳〵經驗するのである。人も亦いふ、人に言はれるまでもなく、「國民學校一年生だから、そんなことはしない」「かうしやう」といふ自意識を明確に持つのである。この點を深く考へる時、單に國民學校第一學年の兒童を家庭生活そのまゝの兒童として見ることが許されないのである。こゝを思へば兒童は兒童でありながら單に遊戲と眠と食事の自然にのみ支配される兒童としては受け取ることが出來ないだらう。こゝにも亦單に兒童性を尊重しすぎることを戒めて、自ら皇國民としての錬成にその意を志向するものの心を汲まなければならぬ所以が存する。併しながら、その精神と身體の發育は正に兒童前期にして高い意味の錬成を受けるには甚だ未熟といはなければならぬ。その身體は比較的自由な家庭生活の起居動作からすれば、靜座正視の緊張は無理であらうし、後に說くやうに、その精神の發達は抽象的・知的・分析的學習を營ましむるに不十分といはなければならないだらう。この心理的な發達段階に卽應して初等科第一學年に入學せる兒童に對して施すのが國民學校の綜合授業に外ならぬ。

奈良女高師附屬に於ける合科學習は三年乃至高學年に迄及び、東京女高師附屬に於いても同樣で、昭和十年四月號「兒童教育」に論ぜられてゐるやうに「例へば、コンクリートの路を作るプロヂエクトには、セメントの性質の研究といふことが含まれて來る。卽ちセメントの砂礫等に對する作用、風雨に抵抗する力、使用せられる季節、他の材料例へば板、タール、煉瓦、アスファルト等に比較しての代價の高下、砂セメント石の混合の割合の算術的決定、その形の幾何學的決定、各種材料の産地の地理的事情、セメント購求の商業的事情等の研究が是である。」といふやうに、かゝる高級なる作業をも含む作業主義全體教育の思想の中にはこの教育が高學年に迄打ち貫くことを物語るものがあるといはなければならぬ。

然るに國民學校の綜合授業は正しく初等科第一學年のみに限られる。この間に、未分化的學習をなし、分科學習の基礎を得て、第二學年に於ける分科學習に圓滑に移行せねばならないのである。これがためには初等科第一年の綜合學習の後半に於ては少くとも漸次分科的學習の出來るやうな蹊に立ち、無理のかからぬ程度に於いて、分科の意識に立脚しない分析的追究が漸次行はれなければならぬのである。この第三の特色に基づくが故に後に詳述する如き、教科書教材の綿密なる分析とその連絡系統とを研究し、これを生活題目に關聯せしめなければならぬ必要を生ずるのである。

第四に綜合授業が單に分科の便宜的合同といふ意味の合科であつてはならないことである。東京女高師附屬の全體教育に於ては、大體教科を文科的教科、理科的教科、技能的教科の三つとしてゐた。所謂お茶の水の三分科主義と稱せらるゝもので、この三分科に應じて擔任教師も大體三人を原則的にして夫々その文科的、理科的、技能的の一方面を指導してゐるのであつた。この三分主義はその後低學年教育に完全な形の全體教育を實施してからも高學年には猶適用されたところのものである。

初等教育の進歩に隨ひ、社會の種々なる要求が出現し、この教育に對する要求を取り入れて教育内容としての教科目は著しく增加した結果、習得された教科目は恰も兒童精神内に引かれた平行線の如く何等合して一人格の修練をなさざるの弊が論ぜられ、この弊を救はんがために立案された所の合科學習も外國にはある。國民學校の五教科設立統合はかゝる方向に近寄つたものであらうけれども、その綜合授業は教科目を單純簡素にして教育の實踐的資質を豐富にするといふ點より來たものでなくして、初等科第一學年兒童の發達段階からの要請と考へなければならないのである。卽ち、綜合授業は煩鎖な教科目を統合整理する處に生ずる授業形態ではなくして、理知的覺醒の未だ乏しく、從つて分析的思考判斷の能力の開發されない兒童教育の必然的要請に依る授業形態に外ならぬのである。この故に兒童にとつては、生活題目の一つが、生命活動の全體であり、具體的事實の一切であつてこの一切全體の全一的經驗を營なましむるところに初等科第一學年としての皇國の道の修練を適切ならしめんとするのであつて、それ以外に何の意味も有たないのでなければならぬ。

教育史上のこの種の教育活動、教育思潮は洵に複雜多岐にして、簡單に考察論斷することを許さないのであるが、我が國に於ける該教育の研究と實踐とはこれを總括して、少くもその依存する根本思潮の一つを兒童尊重の新教育運動に根源せることは上述によつても既に明らかな所であらう。今日既に歷史的な意義を持つこれらの教育は、兒童には兒童の世界を嚴然と持つことが顧慮されなかつた過去明治時代の理知的注入主義の主知教育に明らかに抗義を提示して、そこに兒童の本性に基づき自發活動に俟つ授業形態を形成したのであつてその功は實に大なるものであるといはなければならぬ。實に子供はこの全體教育、合科學習によつて本性を顯示して自由に學習を續けたことであらうが、それにもかゝはらず、此處に明治時代の皇國の道に則つた高い修養は姿を沒したかの觀があるのであつた。國民學校の綜合授業は正しく、この兩者を止揚して、皇國の道に則り且兒童の本性を顧慮しての初等科第一年生の錬成方案、授業形態たるところに意義が存するのである。

第二章　綜合授業方法論

第一節　教科書の教材系統と綜合授業

上述の如く、國民學校に於ける綜合授業は、兒童の心身發達の狀態と兒童の生活の轉換とに應じて家庭生活から學校生活への移行を圓滑にし、錬成の効果を擧げんとする處にその意義が認められるのである。而してこれをその法規の趣旨に則つて實施せんとするに當り、先づその特質として考慮すべきことは、それが初等科第一學年に限られ、第二學年からは當然全教科に亘つて分科的取扱に移行せねばならないことである。從つて第一學年の終りに於ては、一年間の綜合授業に依る指導の結果が、國民學校初等科第一學年用として編纂された教科書の全課程を殘りなく履修し、第二學年の課程に順調に移行されるやうになつてゐなくてはならないのである。而もその課程は兒童の實生活から出發した渾一的な全體の中に內容として各教科の教材を未分化的に包含せねばならないのである。この意味よりして先づ初等科第一學年の錬成內容の基準を示す教科書について、綜合授業の立場からその特質を知り、その教材系統を綿密に調べてその教材內容を綜合授業系統案の內に包括せしむる必要があるのである。

一　綜合授業の立場から見た初等科第一學年教科書の特質

初等科第一學年の教科書は所謂第一期のものであつて、これは教科書編纂上、又實際指導上特殊の苦心を要するものとされてゐる。教材は「國民學校教科書編纂方針」の「取材ノ方針」の項に「教材ハ皇國ノ道ニ則テ普通教育ヲ施シ、國民ノ基礎的錬成ヲナスニ適切ナルモノヲ、國民生活ニ卽シ兒童心身ノ發達ニ留意シテ精選ス」とある如く、兒童の心身發達に卽應して發生的體系を取つて四期に分ち、四段階に組織されてゐる。特に第一期に於ては「童心ニ適合スルモノヲ採リ、躾及初步ノ訓練ヲ重ンズ」とあつて、專らこの期の兒童の生活環境に卽し、兒童の遊戲的、自己

中心的、想像的樣相を尊重する方針が取られてゐる。

かうした方針に基づいて初等科第一學年用として編纂された教科書は次の如きものである。

兒童用書。ヨイコドモ上、ヨミカタ一・二、コトバノオケイコ一・二、カズノホン一・二、ウタノホン上、テホン上、エノホン一・二

教師用書。ヨイコドモ上、ヨイコドモ掛圖初等科第一學年前期用、後期用

ヨミカタ一・二、ヨミカタ掛圖初等科第一學年前期用上・下、後期用、カズノホン一・二、自然の觀察一・二、ウタノホン上、ウタノホン掛圖初等科第一學年用　テホン上、テホン掛圖初等科第一學年用、エノホン一・二、國民學校色彩指導用掛圖初等科第一學年用、藝能科圖畫鑑賞指導用掛圖「初一」一・二・三・四・五

これ等兒童用書の名前はいづれも親しみ易い名前であり、その內容はこの期の兒童に對して教科・科目の境を取り去り、各教科・科目の融通無碍の境地を狙ふといふ苦心が十分に拂はれて居る。表紙の色、圖版等も高雅な氣品と清純な童心を漂はせてゐる。更に挿繪については特に美しさ樂しさを備へ、子供らしい心情の溢れた親しさの中にも逞しさを持ち、繪本として鑑賞せしめても十分の價値があり、兒童はこれより直接の影響感化を受けて深き感銘を持ち、十分情意的錬成が得られ高雅な國民的情操に培ひ得るやうに苦心されてゐる。而も教科書として鮮明な各種の掛圖が作成されてゐるので一層その趣旨が達成せられるわけである。

更に第一期の兒童用書の編纂に當つては、その注意事項として次の三點が擧げられてゐる。

1　全國ニ共通ナル兒童生活ニ取材シ、生活曆ニ從ツテ排列ス。但シ教師用書ニ於テ是等ノ教材ヲ鄕土化セシムルヤウ適宜指導スルコト。

教科書としては出來るだけ全國の兒童に共通なる生活の相を教材に取つて來てはゐるが、實際の指導に當つては、この期の兒童が極めて狹い鄕土的環境に生活する事實に鑑み、夫々の特殊性によく適應し、鄕土化した指導を工夫するやうに注意されてあるのであり、又それが季節に卽した生活曆によつて排列され、大體同種類の教材は同時期に提

出されてゐることも綜合授業の實施上注意すべき點である。

2　各教科ニ亙リ或程度共通ナル材料ヲ取リ、ソレニ主題ヲ求メテ各教科ノ教材ヲ作成スルコト

この期の兒童の見方・考へ方・理解の仕方が全體的であり、未分化的である關係上、特に各教科・科目の連絡を密接にして、學習を全體的にさせることを主眼としてゐる。全一的な具體的・實踐的な人格を錬成するために、全一的具體的な生活の全面を對象とし、それに出發點を求め、皇國民錬成の立場からその心身の發達程度に應じて次第に錬成する部面を組織立てゝゐるのである。從つて各教科に於ては各共通的な材料・人物を選んで一體的な運營を期待してゐるのである。而も同時に又各教科書は夫々の系統と組織を持ち、その特色を發揮すべく仕組まれてゐるのであつて、この點が、國民學校教科書の持つ特徴である。分科の立場から編纂されてはゐるもの〻編纂の根本の考へに於ても教材の具體的關聯に於ても、十分全一的統合的に考慮せられてゐる點が教科書の上に見られるのは綜合授業の實施上特に注意すべきところである。今初等科第一學年各教科書に擧げられてゐる各教材の相互關聯の狀態を見ればその主要なるものは次の如くである。

初等科第一學年教材の關聯表

ヨイコドモ　上

一　ガクカウ　「テンチヤウセツ」の課と結び、また自然の觀察「學校の庭」と關聯させて指導する。
二　センセイ　ヨミカタ「オハヤウゴザイマス」「サヤウナラタダイマ」と關聯してゐる、自然の觀察「春の種まき」のなかで、先生への感謝を說きかせる。
三　テンチヤウセツ　ヨミカタ「ヒノマルノハタ」「ヘイタイサン」、カズノホン「紙とクレヨン」、ウタノホン「ヒノマル」と關聯してゐる。
四　トモダチ　カズノホン「おはじき」と關聯する。
五　ゲンキヨク　ヨミカタ「カクレンボ」「キヲツケ」、カズノホン「兵隊ごつこ」、「運動會」と關聯する。
六　タベモノ　エノホン「くだもの」「雨降り」、自然の觀察「春の野」「雨あがり」と關聯する。兒童は既にヨミカタで、食事の際の「イタヾキマス」といふ挨拶の言葉を明確に習つてゐる。本課の指導は護齒デー、蟲齒デー、時の記念日、大掃除、豫防注射等の行事と結んで取扱ふもよい。
七　ナツヤスミ　ヨミカタ「アサガホ」「オハカサウヂ」「花ツミ」「ユフダチ」「ニジ」「川アソビ」「メダカサン」と關聯する。
八　キマリヨク　自然の觀察「記念の木」に道具の後片づけを指導するところがある。なほヨミカタ「デンワアソビオキヤクアソビ」を想ひ出させるがよい。時刻を守るべきことについてはカズノホン「時計」と關聯する。
九　ツヨイコ　この教材はまたヨイコドモ「五月ノセック」に發展する。
十　ウンドウクワイ　カズノホン「カケツコ」と關聯する。
十一　オコメ　ヨミカタ「カマキリヂイサン」自然の觀察「とり入れ」と關聯する。
十二　オトウサン　オカアサン　兒童は既にヨミカタ「オハヤウゴザイマス」「オカアサンオハヤウゴザイマス」「オトウサンオハヤウゴザイマス」「オカアサンイツテマキリマス」「オトウサンイツテマキリマス、オカアサンオハヤウゴザイマス、オトウサンイツテマキリマス、ニイサンオハヤウ、ネエサンオハヤウ」といふ挨拶のことばを習つた。「オヤスミナサイ」も同樣である。復習させるがよい。
十三　オテツダヒ　本教材は自然の觀察「冬の衛生」と關聯する。
十五　シンネン　ヨミカタ「ケンチヤン」、カズノホン「買物」、自然の觀察「落葉かき」と關聯する。
十七　オキヤクサマ　カズノホン「しでの切り方」「お正月」エノホン「かるた」、ウタノホン「お正月」と關聯する。
十八　バンザイ　「キマリヨク」のところで一應指導した坐禮、立ち方を復習させる。
ヨミカタ　一　ラジオ體操　ヨミカタ「兵タイゴツコ」と關聯する。

本課及び次の「校庭の遊戲」は、ヨイコドモ上「ガクカウ」と連絡して取扱ふ。自然の觀察「學校の庭」、ウタノホン上「ガクカウ」と連絡して取扱に考慮する。

六　ヒノマルノハタ　ヨイコドモ上「テンチヤウセツ」と密接に連絡して取扱ふ。ォズノホン一(三頁)、ウタノホン上「ヒノマル」、エノホン一「ハタ」「ハタヲアゲル」と連絡して取扱に考慮する。

七　ヘイタイサン　ヨイコドモ上「テンチヤウセツ」の發展として取扱に考慮する。

八　アヒル　自然の觀察「春の野」において豫めアヒルに就いて觀察させておけば取扱に便利であらう。

九　ハシレハシレ　春秋二季に行はれる運動會の行事及びカズノホン一、(七・八頁)と關聯して取扱に考慮する。

十二　ウシ、ヒバリ　自然の觀察の「春の野」と關聯して、晩春の悠々たる自然を主題教材とした。

十三　ユフヤケ　ウタノホン上「ユフヤケコヤケ」と連絡して取扱ふ。

十五　オハヤウゴザイマス　本課以降第十八課「サヤウナラ」までは、ヨイコドモ上「ガクカウ」「センセイ」「トモダチ」及びカズノホン一(十五、十六頁)と連絡して取扱ふ。

十七　エヲカキマシタ　エノホン一「グンカン」と關聯して取扱に考慮する。

二十一　デンワアソビ　本課以降二十四「キヲツケ」までは、ヨイコドモ上「トモダチ」「ゲンキヨク」と關聯して取扱に考慮する。

二十三　カクレンボ　ウタノホン上「カクレンボ」と連絡して取扱ふ。

二十五　アメガヤミマシタ　自然の觀察「雨あがり」と連絡して取扱に考慮する。

二十七　ホタル　ウタノホン上「ホタルコイ」と連絡して取扱ふ。

二十八　タナバタ　カズノホン一、二十一頁と連絡して取扱に考慮する。

三十二　アサガホ　本課以下「ハナツミ」まではヨイコドモ上「ナツヤスミ」と連絡して取扱ふ。

三十七　アリ　自然の觀察一「麥畠と蟲とり」と連絡して取扱に考慮する。

三十八　川アソビ　ヨイコドモ上「ナツヤスミ」、エノホン一「オサカナ」「水アソビ」、カズノホン一、二十七頁と連絡して取扱に考慮する。

三十九　メダカサン　前課三十八、川アソビの發展として取扱に考慮する。

四十　トビトカメ　ヨミカタ一「イケニフネ」の發展として取扱に考慮する。

四十一　シタキリスズメ　エノホン一「カハイイトリ」と連絡して取扱に考慮する。

四十二　オ月サマ　自然の觀察一「お月さま」「うさぎ」ウタノホン上「オ月サマ」、エノホン一「オツキミ」「オツキミノゴチソウ」と連絡して取扱に考慮する。

四十三　モモタラウ　ヨイコドモ上「ツヨイコ」の發展として取扱に考慮する。

ウタノホン上「モモタラウ」、エノホン一「モモタラウ」と連絡して取扱ふ。

ヨミカタ　二

一　山ノ上　ヨミカタ一「トビトカメ」の發展として取扱ふ。ウタノホン上「ウミ」とも連絡して取扱ふ。

二　アシタハウンドウクワイ　ヨイコドモ上「ウンドウクワイ」、エノホン二「ウンドウクワイ」と數材上の連絡がある。

三　ウサギトカメ　連絡、ヨミカタ二「アシタハウンドウクワイ」の發展として取扱ふ。

四　ラジオノコトバ　連絡、ラジオに就いてはヨミカタ一、「アサガホ」及び同二「アシタハウンドウクワイ」の發展として取扱ふ。

五　西ハタヤケ　連絡、ヨミカタ二「ラジオノコトバ」の「マンシユウニモトドキマス」を受けて、地理的に發展させた教材であることに注意して取扱ふ。

六　カマキリヂイサン　自然の觀察二「とり入れ」、エノホン二「秋ノケシキ」と連絡して取扱ふ。

七　サルトカニ　連絡、カズノホン一「猿蟹合戰(十九、二十頁)と關聯して取扱ふ。

八　オチバ　連絡、自然の觀察二「もみぢ」、エノホン二「ハヲナラベル」、カズノホン二「雜題」(九、十頁)「落葉」(十一頁)と關聯して取扱に考慮する。

九　イモヤキ　連絡、自然の觀察二「落葉かき」と關聯して取扱ふ。

十　コモリウタ　ウタノホン上「コモリウタ」と連絡して取扱ふ。

十一　オイシヤサマ　カズノホン二「買物ゴッコ」(二十頁)ウタノホン上「オ人ギヤウ」と連絡して取扱ふ。

十二　デンシャゴツコ　ウタノホン上「デンシャゴツコ」と連絡して取扱ふ。
十四　冬　自然の觀察二「冬の衛生」「冬の天氣」と連絡して取扱に考慮する。
十五　お正月　ヨイコドモ上「シンネン」カズノホン二「お正月」二十五頁）ウタノホン上「オ正月」と連絡がある。
十六　兵タイゴツコ　ヨミカタ一「ヘイタイサン」「キヲツケ」の發展として取扱に考慮する。ウタノホン上「兵タイゴツコ」と連絡して取扱ふ。
十八　シャシン　ヨイコドモ上「私ノウチ」、エノホン二「オウチノ人タチ」と連絡して取扱に考慮する。
十九　カゲエ　自然の觀察二「日なたと日かげ」と連絡して取扱ふ。
二十　日本のしるし　ヨミカタ一「ヒノマルノハタ」同二「ラジオノコトバ」、ウタノホン上「キミガヨ」及び「ヒノマル」に連絡して取扱ふ。
二十二　ユメ　ヨイコドモ上「私ノウチ」、ヨミカタ二「シャシン」と連絡がある。
二十三　机とこしかけ　ヨミカタ二「ユメ」の發展として取扱ふ。エノホン二「ツクエヨシカケ」と連絡して取扱に考慮する。
二十四　ウグヒス　ヨイコドモ上「ヒトニタヨルナ」カズノホン二「雛祭」（四十六頁）「自然の觀察二「春を待つ庭」、ウタノホン上「ウグヒス」と連絡して取扱に考慮する。
二十五　つくし　カズノホン二「私たちの村」（五十、五十一頁）、自然の觀察二「草つみ」と連絡して取扱ふ。

カズノホン　一

第一章第一節

1　春野

この綸にあるやうな、「自然の觀察」の「春の野」の課の中の數・量・空間に關する事項を、實地に即して指導することからはいる。

2　紙とクレヨン

本項を指導する時期は天長節の直前であり、この頃「圖畫工作」でも「日の丸の旗」を取扱ふのであるが、本項に於ける作業は、「圖畫工作」の作業よりも、初歩に屬するものであるから、本項はそれより前に指導する方がよい。

3　おはじき

第二節　松葉遊び

第四節

2　時計

かやうな數を整理するための排列は、數量の處理の基本的な事項として大切であるから、今後圖表製作や理科の學習などの適切な場合を利用して、折に觸れ、指導して行く必要がある。

「自然の觀察」に於ける「木の葉遊び」の發展として、松葉を使ふ色々の遊びをさせて、松に親しみを持たせ、形に關する初歩の觀念を得させ、觀察工夫の力を練る。

第二章第一節

1　兎

本項に於ては、時の觀念の涵養を中心として、兒童の生活態度の指導、所謂躾にも及ばねばならないのであつて、他教科、行事の指導は勿論、家庭教育とも連絡して、常に時間を守り、規則正しい生活をなす態度を次第に養つて行くことが大切である。この頃より少しく前に「ヨミカタ」に於て、兒童の一日の生活の主な場面について必要な禮儀、言葉遣ひなどの指導がなされてゐる筈であるから、時の觀念と結びつけて、それを一層發展させて行くやうにするがよい。

3　ひよこ

「自然の觀察」の學習などを通して兒童に最も親しい獸として兎を選んだ。

第二節

「自然の觀察」の學習などを通して兒童に最も親しい鳥としてひよこを選んだ。

1　七夕

四月以來「工作」で紙を折ることを度々學んでゐるのでいろ紙を四つに折つて短冊と同じ大きさになることを確める方法に氣づく兒童は少くないであらう。藝能科と連絡してこれ等の紙に丁寧に字や綸を書かせ（兒31）上段の綸のやうに笹竹につけて飾らせるがよい。

第三章第一節

2　魚取り

この綸の情景は「ヨミカタ」一の「川アソビ」とも關聯する。

4　輪抜げ
5　果物
カズノホン　二
第一章
1　卵と梨
4　いも掘り
5　かけつこ
7　雑題
第二章
2　買物
5　しでの切り方
第三章
5　色々の形のかげ
第四章
11　私たちの村
自然の觀察
第一課　學校の庭
第五課　春の野
第六課　春の種まき
第八課　草花とり
第十二課　雨あがり
第十六課　お月さま

兒童用書の綿は、「ヨミカタ」その他で兒童に親しまれてゐる人物達が輪抜げをしてゐる情景であつて、下段はその成績の記錄である。

一つの量を等量二部分に分つ操作も、藝能科工作などで或程度までは指導して來てゐる。

「カズノホン」一の「數の增減」の指導を發展させ、實例について寄せること引くことの必要を自然に兒童が認めるやうに導き、暗算への前提とする。

この數材及び(兒・6)の數材は、この頃の「自然の觀察」二、「ヨミカタ」二、「ヨイコドモ」上の數材と連絡する點が多い。

この數材は、「ヨイコドモ」上の「ウンドウクワイ」など〻關聯する。

一番、二番は「自然の觀察」二の「とり入れ」の課など、關聯して、秋の野山へドングリ拾ひに行つた歸途の情景及び歸つてからの遊びと解すればよい。

三番・四番は、「ヨミカタ」二の第八課「オチバ」の中の情景を題材に選んだのである。これと關聯させて取扱ふのがよい。

量の測定の指導の最初としてはセンチメートル單位による長さの測定を選んだ、それは自然の觀察、圖畫工作などで、長さの單位が實際に必要になりつ〻あるためと、單位及び測定の觀念の指導には、長さからはいるのが都合がよいためである。

この項はやがて第八項の「買物ごつこ」へ發展するのである。

製作過程を說明した最も初步的なものとしては、既に「カズノホン」一・第二十一頁・第二十二頁があつたが、こ〻ではそれを一步進めた形を採つてゐる。

本項は「自然の觀察」二、第二十七課「日なたと日かげ」と一體をなすやうに取扱はねばならぬ。

地圖の觀念の初步を養ひ、「自然の觀察」で指導した方角の觀念を一層明確にすることが出來るであらう。

サクラの下でうたはせる歌としては「ガッカウ」などが適當である。

「ヨイコドモ」の中の「タベモノ」の課と關聯して、食事の前には手を洗ふこと、日常むやみに口に手を入れないことを折に觸れて注意し躾けるがよい。目的地へ行く途中の田畠等に作物の芽が出てゐたらよく見せて、次の「春の種まき」に對する關心を持たせておく。

この課では春の印象をはつきりと植えつけるのであるが後の「草花とり」「麥畠と蠶とり」「ばつたとり」「とり入れ」「もみぢ」その他季節に關係のある課は四季折々の自然の印象を得させるものであることを心得ておかなければならない。

「カズノホン」一の指導はこの課の指導と結びついたところから始まる。この課を取扱ふにもこの點をよく考へなければならない。

一時限の中、この學習に當てた殘りの二十分は算數圖畫綴方などに當てるとよい。

「春の野」の課との關聯は上に述べた。この「草花とり」の課と同樣な趣旨の教材が「草花植ゑ」に扱はれてゐる。

「ヨイコドモ」上の「タベモノ」や「ヨミカタ」の「アメガヤミマシタ」の項との關聯を十分に保つて指導する。

「ヨミカタ」一の「ワタシガアルクオツキサマガアルク」や「お月さま」と一體となつて月に對する關心を深める。

第十七課　うさぎ　　指導にあたつて「ヨミカタ」一の七十頁、「ウサギ」と關聯を保つことに留意する。

自然の觀察　二

第二十課　とり入れ　　「カズノホン」二の九頁の雜題と關聯を保つて指導する。

「ヨイコドモ」上の「オコメ」の課と關聯を保つて指導する。

第二十一課　もみぢ　　「ヨミカタ」の「おちば」の課と關聯して指導する。

第二十二課　笛　　音色については藝能科でも關心を持たせて、聽覺の訓練をしてゐるが、この課でも音を出す色々の玩具などを使つて音色について更に關心を持たせる。かやうにすれば將來音に關する學習をして行く上にも役立つのである。

第二十四課　落葉かき　　「ヨミカタ」二の「イモカキ」の課と關聯して指導する。

第二十五課　冬の衛生　　養護との關聯を十分に保つて指導する。

第二十六課　冬の天氣　　「日なたと日かげ」「春を待つ庭」「方角」の課と十分に關聯して指導する。

圖畫と關聯して雪景色、雪だるま、などの寫生をさせるもよい。「カズノホン」二の四十一頁の雜題と關聯を保つて指導する。

第二十七課　日なたと日かげ　　この課の學習は「カズノホン」二の「色々の形のかげ」及び「ヨミカタ」二の「カゲエ」と十分に關聯して指導する。

第二十八課　春を待つ庭　　「ヨミカタ」二の「ウグヒス」の課と關聯して指導する。

第二十九課　方向　　「カズノホン」二の「私たちの村」と關聯を保つて指導する。

第三十課　草つみ　　「方角」の課と關聯して指導する。

ウタノホン・上　　「ヨミカタ」二の「つくし」の課と關聯して指導する。

三　ユウヤケコヤケ　　「ユウヤケコヤケアシタテンキニナアレ」は「ヨミカタ」一(二十頁)に揭載されてある。

五　カクレンボ　　「ヨミカタ」一(三十三頁)に揭載されてゐるものをそのまゝ採用したのである。

六　ホタルコイ　　「ヨミカタ」一(三十八頁)に揭載されてゐるものを作曲の都合上一部分修正してある。

十三　コモリウタ　　「ヨミカタ」二に揭載されてあるものをそのまゝ採用したのである。

十五　お正月　　「ヨミカタ」二の「十五ォ正月」を原據としこれを作曲上の都合から修正したものである。

十六　デンシャゴツコ　　「ヨミカタ」二の「十二デンシャゴツコ」に出てゐるものであり、又新訂尋常小學校唱歌にも揭載されてあつたものであるが最後の「チンチン」といふ擬聲音は、作曲の都合上之を省略したのである。

十八　兵タイゴツコ　　「ヨミカタ」二の「十六兵タイゴッコ」の終りに出てゐる韻文を一部分修正して採用したのである。

十九　ヒカウキ　　「ヨミカタ」一の二十七頁に出てゐるものをそのまゝ採用したのである。

エノホン　一

・三　タイサウ　　本教材は「ヨイコドモ」の教材とも關聯を保つて指導する。

四　ハタ　　本教材は次の「ハタヲアゲル」と共に天長節の前後に配當し「ウタノホン上」の「ヒノマル」、國民科「ヨイコドモ」「ヨミカタ」の日の丸の旗に關する教材等と相俟つて國旗に對する認識を深め、國旗を尊重し、國民的情操を涵養するために採用したのである。

六　カブト　　折紙の教材は、前の「カミデッポウ」と本教材だけであるが、後に出て來る紙を主とする教材と紙の折り方、切り方貼り方等に於て技法上の關聯を保つものであるから、此の點に留意して指導する。

八　キレイナハナ　　理數科「自然の觀察」の「庭の花」「草花とり」とも關聯を保ち、本教材を選んだのである。

九　ハナヲナラベル　　理數科「自然の觀察」の「草花とり」と同時に、野原に於て行ふ場合等がある。

十　グンカン　　本教材は次の「スキヘイサン」と共に海軍記念日の前後に配當し、興味ある製作を通して我が海軍への關心を持たせるために採用したのである。

十一　スキヘイサン　　人物を主とする描寫教材として前に「タイサウ」本教材の後に「センセイ」があるが之等は互に關聯を保つて、人物描寫の初步的な要領を會得させる。

十二　オモチヤ　本教材は前に課した「キレイナハナ」から發展して來たもので、只前者は色紙をちぎつて貼り、之は鋏で切つて貼る相違があるだけで、教材として狙ひ所は類似してゐる。

十六　木ノハノイロイロ　本教材は理數科「自然の觀察」五月教材「木の葉遊び」其の他とも關聯を有するものであるが「木の葉遊び」からは既に一ケ月半の時を經過してゐるのであるから更にその後の新しい觀察を基にして指導しなければならない。

十七　アメガフル　他教科で雨を扱ふ教材として理數科「自然の觀察」に「雨あがり」があり、國民科「ヨミカタ」にも「雨あがり」があるが之等とも關聯を保つて指導する。

十八　オサカナ　本教材は前に作つた「クダモノ」「木ノハノイロイロ」の二教材と表現上の關聯を有するものである。

十九　ブランコ　前の教材「タイサウ」「アメガフル」等と關聯を保つて人物の書き方に就いて反覆練習させる。

二十二　オニハノダウグ　ちぎつた色紙を貼つて表現する教材として前に「キレイナハナ」があり又切つた色紙を貼つて表現する教材として「オモチヤ」がある。之等と本教材は相關聯して授くべきものである。

二十三　水アソビ　前に出た「タイサウ」「アメガフル」「ブランコ」等と連絡してゐるものである。本教材は國民科「ヨミカタ」の魚とりや理數科「自然の觀察」の水遊び等と關聯して授ける。

二十四　カハイイトリ　本教材は教材の系統上から見る時は、「クダモノ」「木ノハノイロイロ」「オサカナ」等の如く彫塑的のものであり、難易の程度から言つて前の三者の次に來るべきものである。

二十五　オツキミ　本教材は國民科「ヨミカタ」のお月樣、兎等の教材、理數科「自然の觀察」のお月樣、兎の兩教材と連絡を保つて指導する。

二十七　モモタラウ　國民科「ヨミカタ」に於ても丁度この時期に授けることになるのでそれを連絡して此所に入れたのである。

エノホン　二

一　オウチノ人　本教材は後にある、描寫教材「オウチノヒトタチ」へ思想的に關聯をするものである。

四　ウンドウクワイ　運動會の事前のことを扱つた「ヨミカタ」の「アシタハウンドウクワイ」とも關聯して、運動會で見聞し經驗したことを畫かせて、その喜びを再現させるのである。此の種の教材としては前に兒童の遊戲を畫かせた「ブランコ」がある。故に本教材はそれと關聯し、そこで得た描寫經驗を生かすやう指導しなければならない。

五　ウンドウグ　本教材は思想的關聯に於て前教材「ウンドウクワイ」とつながりを有し、構成上からは前々教材「トリキ」と關聯を有するものである。

六　秋ノケシキ　本教材は理數科「自然の觀察」と關聯して指導し、又寫生の態度を養ひ寫生の意味を知らせる上からは、「センセイ」とも關聯を保つて指導する。

八　ケイトウ　草花を表現する教材としては前に色紙をちぎつて思想的表現をさせた「キレイナハナ」がある。また寫生的表現をさせた教材として「センセイ」「オヒハヒノチヤウチン」「秋ノケシキ」等がある。これ等の教材とは、題材の扱ひ方や表現態度等の點で密接な關聯を保つて指導する。

・十　ハヲナラベル　本教材は「ヨミカタ」の「オチバ」「自然の觀察」の「もみぢ」と連絡をとつて指導する。

十一　クダモノカゴ　本教材は後に出て來る本教材と類似した構成法による「犬ト犬ゴヤ」「ツクエコシカケ」等に發展して行き、漸次學年の進むにつれて構成の方法を進め、遂には厚紙・木材・金屬等を材料とする立體構成に迄發展する第一歩として意味を有するものである。

十二　ゴバン目ヌリ　配色については、「サンカクシカクナラベ」「イロガミ入レ」等で初步的な指導をしたのであるが、本教材では、クレヨンを使つて配色を練習させ又甚盤目に塗ることによつて模樣構成の學習を遊戲的にさせるのである。

十四　ニフエイ　人物の情景を畫く人物の描寫が中心となるものであるから「ウンドウクワイ」「ミヅアソビ」其の他人物描寫が主となつた教材と關聯のあること勿論である。

十五　オ正月　本教材は正月をまつ子供の氣持をうたつた「ヨミカタ」・「ウタノホン」等の教材や正月の心得を示した「ヨ

イコドモ」の教材と關聯して正月に對する統合的な扱ひをするのである。

十八　オウチノ人タチ　うちの人を扱つた教材として粘土による立體表現をさせた「オウチノヒト」がある。これと關聯を保つて指導することは勿論であるが、兩者は表現形式に立體平面の差があるばかりでなく、彼はおうちの人を個々の人物として扱つたのであるが、本教材は數人の家族を關係的に扱ひ、家族的雰圍氣を表現させるところに大きな差がある。

十九　オメン　想の誘導、家族的雰圍氣の把握のために「ヨイコドモ」の「私ノウチ」と連絡をする。

二十　マメマキ　本教材は次の「マメマキ」と一體不離の關聯を保つて指導する。

二十三　兵タイサン　本教材は切つた色紙を貼つて表現する點から見て「オモチヤ」等と技法上關聯を有するものであるが單に切つた色紙を臺紙上に貼つて諸種のものを表現するのと、實際にかぶれる面を作るとでは、製作の興味も大變ちがふし、表現上に於てもかぶれるやうにするには、大きさも考へなければならず、工合よくかぶれて眼玉の孔から見えるやうにもならなければならず、其の他種々の工夫を要する點が少くなく、工夫力や表現力を養ふ上から見て、單なる貼紙よりは一歩進んだものである。

本教材は節分追儺の行事を扱ふ點に於ては前教材「オメン」と一體をなす教材であり、家庭に於ける人物を中心とした取扱ひをする點に於ては、前々教材「オウチノ人タチ」と同じ狙ひを有するものである。

本教材は「スキヘイサン」と對應した教材である。これを人物描寫の見地から見る時は、「ウンドウクワイ」『オウチノ人タチ」「マメマキ」等が數人の人を關係的に扱ふに反し、之は少數の人を兒童に可能な範圍内に於て確實に描寫させるものである。

本教材は三月の初めに配當されてゐるから陸軍記念日に關聯して兵士を描かせ、陸軍に對する關心を持たせる。

3　兒童用書ニ登場スル兒童人物ノ名・性質・家庭ノ狀況等ヲナルベク一致セシムルコト

前項の注意と同樣の趣旨から來る教材作成上の事項であつて、各教科・科目に同じ人物が現はれて活動し、兒童の全體的な心理をとらへてゐるのであるが、これと共に更に一つの大きな特色と考へられるのは、各教科書共にその行爲の主體・表現の主體が多く「私」となつてゐることで、この「私」が主體となつて活動し、見聞し、物語つて、所謂主體的表現の形に仕組れてゐる事である。これを手にする兒童は又この「私」と一體となつて、見聞し、談話し、活躍し、生活して行くやうな心理的な編纂がなされてゐるのである。卽ち教科書編纂に當つても、人物を一定にし、環境を同じくして、かかる全體的場面に於いて「國語」も「算數」も凡そ總べての教科の學習を遂げさせようとする考慮を拂つてゐることがうかがひ知られるのであつて、こゝにも亦綜合學習の精神を見ることが出來る。

初等科第一學年の教科書についてこれを見れば、凡そ次に表示する通りである。

ヨイコドモ　上

課	題目	登場人物	表現の主體
八	キマリヨク	ハナコ、ワタクシ、オトウト	ワタクシ
十	ウンドウクワイ	ワタクシタチ	ワタクシタチ
十一	オコメ	ワタクシタチ	ワタクシタチ
十二	オトウサン オカアサン	オトウサン、オカアサン オトウト、ワタクシ	ワタクシ ワタクシ
十三	オテツダヒ	オカアサン、イチラウ	ワタクシ
十四	オルスバン	ワタクシ	ワタクシ
十五	私ノウチ	オトウサン、オカアサン、オヂイサン、オバアサン、妹、私	私
十六	オキヤクサマ	ヨソノヲバサン、オカアサン	私
十九	ヒトニタヨルナ	ネエサン、オカアサン、私	私
二十	セウコクミン	先生、私タチ	私タチ

ヨミカタ　一

十四	オツキサマ	ワタシ
十六	ホンダイサムサン	ホンダイサム、ワタナベマサヲ、スズキハナコ、ハヤシハルエ
十七	エヲカキマシタ	ホンダサン、ワタナベサン
十八	サヤウナラ	スズキサン、ハヤシサン
	タダイマ	センセイ、オカアサン
二十	オツカヒ	イサム、ヲヂサン
二十一	デンワアソビ	キヌコ、ハルエ、ハナコ、ワタクシ
	オキヤクアソビ	タクシ
二十九	ハコニハ	ニイサン、オヂイサン

三十一	オミヤノ石ダン	ワタクシタチ
三十二	アサガホ	オトウサン、ボク
三十三	オハカサウヂ	オカアサン、ネエサン、オヂイサン
三十四	花ツミ	イモウト、ワタクシタチ
三十五	ユフダチ	オカアサン、ワタクシ
三十六	ニジ	オカアサン、ワタクシ
三十七	川アソビ	イサム、マサヲ

ヨミカタ　二

二	アシタハ、ウンドウクワイ	オカアサン、勇
五	西ハタヤケ	勇、ヲヂサン
八	オチバ	キヌコ、花子
九	イモヤキ	オトウサン、オカアサン、ボク、弟、ワタクシ
十一	オイシヤサマ	花子、正男
十二	デンシヤゴツコ	ボク
十三	ケンチヤン	オカアサン、ケンチヤン、キヌ子、ツトム、私
十四	冬	妹、ニイサン、私
十六	兵タイゴツコ	勇、正男、太郎、次郎、正次ユリ子、秋男、花子、一郎

十八	シヤシン	オヂイサン、オバアサン、オトウサン、オカアサン、ネエサン、ニイサン、私
十九	カゲエ	ヲヂサン、私
二十二	ユメ	オトウサン、オヂイサン、オヂイサンノオトウサン、私
二十三	机とこしかけ	先生、私
二十四	ウグヒス	勇、ネエサン
二十六	汽車	にいさん、ぼく

カズノホン　二

第一章	七雑題	キヌコ、花子
第二章	一落葉	花子
	二買物	花子、勇
	三積木	勇、太郎
第三章	八買物ごっこ	花子、勇
	二オ正月	オカアサン、勇、正男、花子キヌ子、ハルエ
	五色々な形のかげ	ボク
	六豆まき	ニイサン、勇、ハルエ
第四章	一たこあげ	勇
	二とほせんぼ	花子、一郎、ネエサン

六	雑題	ヲバサン、花子
九	かくれんぼ	勇、花子、ハルエ
十一	ぶらんこ	弟、私
	私たちの村	私

これを更に初等科第二學年教科書と併せて見る時、その家族の關係は次の如く表はされてゐる。

初等科第一學年	上欄の人物に關係して登場するもの
教科書に表れる人物名	初一 初二
ホンダイサム	ヲヂサン(マンシウ)、オカアサン、ネエサン、弟(正次)、シロ(犬)、ニイサン、ヲヂサン	ヲバサン、オトウサン、ヨシ子(イトコ)、おばあさん、にいさん

二　初等科第一學年教科書の教材系統

綜合授業の觀點から、初等科第一學年の教科書の教材を調査して、教材の性質や各教材の關聯系統の關係を知ることは、綜合授業の教材體系樹立上必要なる當面の問題である。初等科第一學年の全教科書の教材について、これを表示すれば次頁の通りである。因みに、次の表は、文部省が示す、學期割配當乃至は月割配當に從つて並べ、更に教師用書中に取扱時間を示してあるものについては、題目欄の括弧内にこれを記して教材の取扱程度を知る參考に供したのである。

この表について、教材を一覽する時、先づ皇國の道を直接に理解し體得せしむる教材、卽ち國家的儀式行事に關する一連の教材が注意をひくのである。次に七タや、お正月のやうに傳統精神につちかふことによつて皇國の道を修練

	ワタナベ正男	
	スズキ ハナコ	弟(一郎)、ネエサン、オカアサン	オカアサン、にいさん、おとうさん、おぢいさんねえさん
	ハヤシ ハルエ	ニイサン(十二歳)オトウト(七歳)	オトウサン
	太郎	弟(二郎)	ねえさん(みよ子)、弟(三郎)、おぢいさん、妹
	キヌ子	オカアサン、弟(ケンチヤン)	
	ユリ子	弟(秋男)	
	ツトム		

する民族的行事生活に關す一群と、更に學校行事生活に關する一群の教材に大別して見ることが出來る。この教科書教材の所屬別の分類は實に綜合授業の生活題目選擇に當つて如何なる生活面から、如何程の生活題目を選定するかの基準を與へるものといふことが出來る。更に又、この表が示す各月乃至各學期別に見らるる教材系統の連絡關聯の情況は、例へば、天長節に取材するものとして、ヨイコドモに「テンチヤウセツ」、ヨミカタに「ヒノマルノハタ」、綴り方に「テンチヤウセツ」、體操に「日の丸の旗」の遊戯、エノホンに「ハタ」及び「ハタヲアゲル」等があり、これが悉く、天長節に前後して四月に配當されてゐるが如きであつて、これまた、教科書教材を內に包むべき生活題目決定の參考とすることが出來るのである。

第二節　綜合授業の方法的原理

初等科第一學年の教科書の全教材系統を內に含みつゝ、而も綜合的全體的にこれが錬成を十全ならしめんとする國民學校の綜合授業は、その方法的原理を何處に求むべきか。先づ、第一に、兒童生活そのものを擧げなければならぬであらう。

一　兒童生活の原理

心身發達の未分化的段階にある就學兒童をして極めて適切有效に錬成することの出來る授業形態として綜合授業によつたのであるが、この授業は就學せる兒童に最初一年間だけ實施する教育形態である。家庭にて無意圖的學習をなして來た兒童をして學校の計畫的意圖的學習に圓滑に移行せしめるべき一任務を持つてゐる以上、家庭に在りしその日々の、兒童の學習原理が省察され、これを顧慮することによつて、學校教育が開始されなければならぬことは蓋し當然と言はなければならぬ。

然るに、家庭に在りし日の兒童の習得の狀態はどうであつたらうか。彼等は實に、嬉戯として生活し、その生活の具體を通して諸種のことを自然のうちに學び得てゐるのであつた。幼兒期にある兒童の特性が行動的情緒的であるこ

初等科第一學年教材一覽表

國民科

第一學期

月	ヨイコドモ 題目	禮法の要項	ヨミカタ 題目	新出讀替文字
四月	一 ガクカウ 二 センセイ 三 テンチャウセツ	1 奉安所にお辭儀する 2 履物の始末をする 3 廊下は靜かに、遊ばぬ 4 教室では脱帽 5 教室で机に向つた姿勢 1 朝起きた時夜寢る時の行儀 2 長上に對する言葉遣ひ 3 容儀に對する注意 1 國旗掲揚のこと 2 式場では靜かに姿勢正しくする 3 最敬禮の仕方 勅語奉讀の際の禮法	巻一 一 ラジオ體操 二 校庭の遊戯 三 アカイアサヒ 四 ハトコイ 五 コマイヌサン 六 ヒノマルノハタ 七 ヘイタイサン 八 アヒル	ア、カ、イ、サ、ヒ ハ、ト、コ マ、ヌ、ン、ウ ノ、ル、タ、バ、ザ ヘ、ス、メ、チ、テ ガ、ヨ
五月	四 トモダチ	1 友達に逢つた時、別れる時の挨拶 2 友達に助けられた時はよく禮を云ふこと 3 友達の父母兄弟に逢つた時も禮をする	九 ハシレハシレ 十 ココマデオイデ 十一 カミフウセン 十二 ウシ、ヒバリ 十三 ユフヤケ 十四 オツキサマ 十五 オハヤウゴザイマス 十六 ホンダイサムサン 十七 エヲカキマシタ 十八 サヤウナラ、タダイマ	シ、レ、ロ デ、オ、ソ フ、ク、ミ、セ ラ、ナ、モ、ピ、リ ユ、ヤ、ケ、キ、ニ、(ユフ) ワ、ツ ゴ、ダ、ヰ、(ヤウ、イツテ) ホ、ム、ベ、ヲ、ズ、エ パ、エ、グ、ジ
六月	五 ゲンキヨク 六 タベモノ	1 動作を快活に、歩く時の姿勢をよくする 2 常に姿勢正しくする 3 はつきりした言葉を使ふこと 1 飲食は一定の場所で行ふこと 2 往來や乘物の中で無暗に飲食せぬこと 3 湯呑場、水呑場など汚さぬやうに、食器を大切に、水道の栓を開け放しせぬこと 4 食前に手を洗ひ、食後に口のまわりを拭ふこと	十九 ヒカウキ 二十 オツカヒ 二十一 デンワアソビ オキャクアソビ 二十二 シリトリ 二十三 カクレンボ 二十四 キヲツケ 二十五 アメガヤミマシタ 二十六 イケニフネ 二十七 ホタル	ギ、(カウ) チ、(ヘ、ヒ) ビ、ド、ゾ、(サウ、ハ、シャ、タウ) ペ、ネ、ブ、ポ、プ ボ、(ジャ、ショ) 一、二、三、四、五、六(ホ、ガウ) ゼ、木 ヅ、上 小サナ、ゲ、(チャウ)
七月	七 ナツヤスミ	1 父母長上からの命令に快く「ハイ」と返事して、すぐ果すこと 2 使ひに出た時は、途中で道草しない、歸つたらすぐ「タダイマ」「タダイマカヘリマシタ」と挨拶すること	二十八 タナバタ 二十九 ハコニハ 三十 ココハドコノホソミチダ 三十一 オミヤノ石ダン 三十二 アサガホ 三十三 オハカノサウヂ 三十四 花ツミ 三十五 ユフダチ 三十六 ニジ 三十七 アリ	川、山、本、(セウ) 石、七、八、九、十、手 大キナ 草、水、花 松、(キャウ) 空、雨 日、(カフ) 小ミチ、(チョ)

綴り方指導要項例

○簡單な話合
(イ)挨拶や應答がはつきり言へるやうに
(ロ)見たこと、したこと、考へたこと、聞いたことなどの話合
(ハ)おもしろい話、をかしい話、珍しい話

○生活の言語發表
(イ)野外遊歩、見學などに其の場で問答したり見聞したりしたことに就いての發表
(ロ)提示した實物や繪畫兒童の描いた繪などについて發表
(ハ)遊び、學習、飼育、工作、栽培の經過の發表

○發表をとり上げる
(イ)兒童の發表した面白い個性味ある短話を書き止めておいて發表
(ロ)兒童の獨り言や、誰かに言つたことや、說明したことなどを話してやる

○繪による發表
(イ)日常生活の事柄の繪による發表
(ロ)連續した繪話の作製 繪日記、紙芝居
(ハ)短いことばを書き入れ繪入り文、繪ときとする

○發聲及び表記の基礎練習
(イ)話合、言語發表の兒童の言葉をとり上げて發聲の基礎練習
(ロ)興味ある短文の視寫、聽寫

第二學期

月	ヨイコドモ 題目	禮法の要項	ヨミカタ 題目	新出讀替文字
九月	八 キマリヨク 九 ツヨイコ	1 坐つた時の姿勢及び坐禮 2 友達のうちへ遊びに行く時は食事時、早朝、夕方などをさけること 3 あまり長遊びをしない 4 必ず父母に告げて行く	三十八 川アソビ 三十九 メダカサン 四十 トビトカメ 四十一 シタキリスズメ 四十二 オ月サマ	下、出テ、入レヨウ、目ダマ、見エマス(ヂャウ、ハウ、ニヨ) 日本、(ヒヨ) 森、オ月サマ、(イフ)
十月	十 ウンドウクワイ 十一 オコメ	1 來賓に對する禮法 2 食事前には「イタダキマス」食後には「ゴチソウサマ」と言ふこと	四十三 モモタラウ 四十四 カタカナ圖表 巻二 一 山ノ上 二 アシタハウンドウクワイ 三 ウサギトカメ 四 ラジオノコトバ 五 西ハ夕ヤケ	來マシタ、中、男、子、勇マシク、少シ、大、門、戸、刀、人 (ラウ、シャウ) 村、海、青イ、方 天キ、外、枝、店、田シニ 急ゲ、來ナイ 正シイ、日本中 西、夕ヤケ、赤イ、東
十一月	十二 オトウサン、オカアサン 十三 オテツダヒ	1 父母、長上には言語動作をていねいに 2 病人には特にやさしく 1 父母、長上に呼ばれた時はすぐに「ハイ」と返事をすること 2 使に行く時、歸つた時は、すぐに挨拶すること	六 カマキリヂイサン 七 サルトカニ 八 オチバ 九 イモヤキ 十 コモリウタ	秋 柿、早ク、長イ、栗、前、灰 林、行キ、音 弟、火、消エ 里、あ、の、こ、え、て、へ、つ、 た
十二月	十四 オルスバン 十五 シンネン	1 知つてゐる人にはすべて賀詞を述べること 2 新年の式は四大節の他の式と順序が同じであること 國歌奉唱の時や國歌の演奏をきく時は眞心こめて、天皇陛下の萬歲を祈り奉るべきこと	十一 オイシャサマ 十二 デンシャゴッコ 十三 ケンチャン 十四 冬 十五 お正月	病氣、笑ハナイデ、人ギャウ 正男、急ニ、ぎ、や、う、さ、ん、ひ、まし オ客、學校、で、お、す、り、は、く、ご、き、ち 私、呼ビ、馬、ろ、と、び、が、ゐ、け、い 冬、池、妹、氷、雪、竹、炭、口、光ツテ、來ル、二人、に、な、る、だ、を 持つて、お舟、お正月、か、ら、じ、も
一月	十六 私ノウチ 十七 オキャクサマ	1 食事の禮法 2 起床、就寢の際の挨拶 1 來客に對して挨拶すること 2 近所の人に出逢つた時も同樣 3 來客の時は玄關に出迎へて、後、家人に取次ぐこと 4 茶の進め方 5 菓子などの運び方も同樣にする	十六 兵タイゴッコ 十七 ネズミノヨメイリ 十八 シャシン 十九 カゲエ	兵タイゴッコ、太郎、次郎、工兵、ぽ、よ、ゆ、わ、ふ、せ、め 生レ、思ヒ、雲、風、吹キ、ね、ず、み、れ、ば、む 送り、立ち、ぢ、ぐ げ、ゑ、ぬ

綴り方指導要項例

○夏休の繪日記
(イ)學級に展覽し、相互に見合ふ
(ロ)取材の仕方の指導

○行動の叙述
(イ)自分のしたことをお話するやうに書く
(ロ)うちの人や身のまわりの自然のことにもふれて自由に書く

○發表をとり上げる
(イ)第一學期に準ずる
(ロ)とり上げたものを適當な方法でよく讀ませ、あらはし方、取材のし方の指導

○短文の視寫、聽寫
(イ)書き方と連絡、促音、濁音、長音、拗音句點、字配りに注意する
(ロ)自發的に書寫するやうに仕向ける

○郵便ごつこ
(イ)役割をきめての郵便ごつこ
(ロ)生活の實際を通信し合ふ

○紙芝居の製作
(イ)繪と文を使つた連續した表現
(ロ)想像、自分の行動、自然をうつさせる

○冬休の綴り方
(イ)戰地の兵隊さんへの年賀狀
(ロ)繪日記の書き方

○冬休の繪日記
(イ)第二學期に準ずる
(ロ)題材のとらへ方、あらはし方の指導

○遊びを書かせる
(イ)正月の遊び、かくれんぼ、などより自分の行動をくわしく書く
(ロ)對話を入れること、對話に「」をつけること、句點を正しくつけること

○うちの人……

第一學期	（五）月		3 友達の父母兄弟に逢つた時も禮をする	十三 ユフヤケ 十四 オツキサマ 十五 オハヤウゴザイマス 十六 ホンダイサムサン 十七 エヲカキマシタ 十八 サヤウナラ、タダイマ	ユ、ヤ、ケ、キ、ニ、（ユフ） ワ、ツ、ゴ、ダ、キ、（ヤウ、イッテ） ホ、ム、ベ、ヲ、ズ、エ パ、エ、グ、ジ	(ロ)提示した實物や繪畫兒童の描いた繪などについて發表 (ハ)遊び、學習、飼育、工作、栽培の經過の發表
第一學期	六月	五 ゲンキヨク 六 タベモノ	1 動作を快活に、歩く時の姿勢をよくする 2 常に姿勢正しくする 3 はつきりした言葉を使ふこと 1 飲食は一定の場所で行ふこと 2 往來や乘物の中で無暗に飲食せぬこと 3 湯呑場、水呑場など汚さぬように、水道の栓を開け放しせぬこと 4 食前に手を洗ひ、食後に口のまわりを拭ふこと	十九 ヒカウキ 二十 オツカヒ 二十一 デンワアソビ オキャクアソビ 二十二 シリトリ 二十三 カクレンボ 二十四 キヲツケ 二十五 アメガヤミマシタ 二十六 イケニフネ 二十七 ホタル	ギ、（カウ） チ、（ヘ、ヒ） ビ、ド、ゾ、（サウ、ハ、シャ、タウ） ベ、ネ、ブ、ポ、プ ボ、（ジャ、ショ） 一、二、三、四、五、六（ホ、ガウ） ゼ、木 ヅ、上 小サナ、ゲ、（チャウ）	○發表をとり上げる (イ)兒童の發表した面白い個性味ある短話を書き止めておいて發表 (ロ)兒童の獨り言や、誰かに言つたことや、說明したことなどを話してやる ○繪による發表 (イ)日常生活の事柄の繪による發表 (ロ)連續した繪話の作製 繪日記、紙芝居 (ハ)短いことばを書き入れ繪入り文、繪ときとする
第一學期	七月	七 ナツヤスミ	1 父母長上からの命令に快く「ハイ」と返事して、すぐ果すこと 2 使ひに出た時は、途中で道草しない 歸つたらすぐ「タダイマ」「タダイマカヘリマシタ」と挨拶すること	二十八 タナバタ 二十九 ハコニハ 三十 ココハドコノホソミチヂャ 三十一 オミヤノ石ダン 三十二 アサガホ 三十三 オハカノサウヂ 三十四 花ツミ 三十五 ユフダチ 三十六 ニジ 三十七 アリ	川、山、本（セウ） 石、七、八、九、十、手 大キナ 草、水、花 松、（キャウ） 空、雨 日、（カフ） 小ミチ、（チョ）	○發聲及び表記の基礎練習 (イ)話合、言語發表の兒童の言葉をとり上げて發聲の基礎練習 (ロ)興味ある短文の視寫、聽寫
第二學期	九月	八 キマリヨク 九 ツヨイコ	1 坐つた時の姿勢及び坐禮 2 友達のうちへ遊びに行く時は食事時、早朝、夕方などをさける 3 あまり長遊びをしない 4 必ず父母に告げて行く	三十八 川アソビ 三十九 メダカサン 四十 トビトカメ 四十一 シタキリスズメ 四十二 オ月サマ	下、出テ、入レ、ヨウ、目ダマ、見エマス（ヂャウ、ハウ、ニヨ） 日本、（ヒヨ） 森、オ月サマ、（イフ）	○夏休の繪日記 (イ)學級にて展覽し、相互に見合ふ (ロ)取材の仕方の指導 ○行動の叙述 (イ)自分のしたことをお話するやうに書く (ロ)うちの人や身のまわりの自然のことにもふれて自由に書く
第二學期	十月	十 ウンドウクワイ 十一 オコメ	1 來賓に對する禮法 2 食事前には「イタダキマス」と食後には「ゴチソウサマ」と言ふこと	四十三 モモタラウ 四十四 カタカナ圖表 巻二 一 山ノ上 二 アシタハウンドウクワイ 三 ウサギトカメ 四 ラジオノコトバ 五 西ハタヤケ	來マシタ、中、男、子、勇マシク、少シ、大、門、戸、刀、人 （ラウ、シャウ） 村、海、青イ、方、天キ、外、枝、店、田シ、ニ 急ゲ、來ナイ、正シイ、日本中 西、タヤケ、赤イ、東	○發表をとり上げる (イ)第一學期に準ずる (ロ)とり上げたものを適當な方法でよく讀ませ、あらはし方、取材のし方の指導 ○短文の視寫、聽寫 (イ)書き方と連絡、促音、濁音、長音、拗音句點、字配りに注意する (ロ)自發的に書寫するやうに仕向ける
第二學期	十一月	十二 オトウサン、オカアサン 十三 オテツダヒ	1 父母、長上には言語動作をていねいに 2 病人には特にやさしく 1 父母、長上に呼ばれた時はすぐに「ハイ」と返事をすること 2 使に行く時、歸つた時は、すぐ挨拶すること	六 カマキリヂイサン 七 サルトカニ 八 オチバ 九 イモヤキ 十 コモリウタ	秋、柿、早ク、長イ、栗、前、灰 林、行キ、音 弟、火、消エ 里、あ、の、こ、え、て、へ、つ、た	○郵便ごつこ (イ)役割をきめての郵便ごつこ (ロ)生活の實際を通信し合ふ
第二學期	十二月	十四 オルスバン 十五 シンネン	1 知つてゐる人にはすべて賀詞を述べること 2 新年の式は四大節の他の式と順序が同じであること、國歌奉唱の時や國歌の演奏をきく時は眞心こめて、天皇陛下の萬歳を祈り奉るべきこと	十一 オイシャサマ 十二 デンシャゴッコ 十三 ケンチャン 十四 冬 十五 お正月	病氣、笑ハナイデ、人ギャウ 正男、急ニ、ぎ、や、ら、さ、ん、ひ、まし オ客、學校、で、お、す、り、は、く、ご、き、ち 私、呼ビ、馬、ろ、と、び、が、ゐ、け、い 冬、池、妹、氷、雪、竹、炭、口、 光ッテ、來ル、二人、に、な、る、だ、を 持つて、お舟、お正月、か、ら、じ、も	○紙芝居の製作 (イ)繪と文を使つた連續した表現 (ロ)想像、自分の行動、自然をうつさせる ○冬休の綴り方 (イ)戰地の兵隊さんへの年賀状 (ロ)繪日記の書き方
第三學期	一月	十六 私ノウチ 十七 オキャクサマ	1 食事の禮法 2 起床、就寝の際の挨拶 1 來客に對して挨拶すること 2 近所の人に出逢つた時も同様 3 來客の時は玄關に出迎へて後、家人に取次ぐこと 4 茶の進め方 5 菓子などの運び方も同様にする	十六 兵タイゴッコ 十七 ネズミノヨメイリ 十八 シャシン 十九 カゲエ	兵タイゴッコ、太郎、次郎、工兵、ぼ、よ、ゆ、わ、ふ、せ、め 生レ、思ヒ、雲、風、吹キ、ね、ず、み、れ、ば、む 送り、立ち、ぢ、ぐ げ、ゑ、ぬ	○冬休の繪日記 (イ)第二學期に準ずる (ロ)題材のとらへ方、あらはし方の指導 ○遊び (イ)正月の遊び、かくれんぼ、などより自分の行動をくわしく書く (ロ)對話を入れること、對話に「」をつけること、句點を正しくつけること ○うちの人 (イ)親しみの心で詳しく家の人のことを書く (ロ)様子のよく表はれてゐるところの賞揚
第三學期	二月	十八 バンザイ 十九 ヒトニタヨルナ	1 國旗の取扱ひを大切にすること 2 國旗は私事に掲揚しないこと 3 天皇陛下の萬歳奉唱の時は適當な人の發聲に依つて三唱する 4 萬歳奉唱の時は姿勢を正して、脱帽し兩手を高く擧げて、勇ましい聲で唱和する	二十 日本のしるし 二十一 花サカヂヂイ 二十二 ユメ 二十三 机とこしかけ	朝日、日の丸、君が代、ば 畠、土、話、米、咲き、オ通り、ほ 考へ、今、一人、べ、ど、 机、先生、長い間、二年生、新しい、先生	○手紙の文 (イ)兵隊さんからの手紙のよみあひ (ロ)兵隊さんや病氣の友達への文を書かせ手紙の指導 ○詩 (イ)感動した事柄を短語で (ロ)感じたまゝを文に表現する (ハ)よい程度の作品鑑賞
第三學期	三月	二十 セウコクミン	1 褒状、其の他を受ける禮法 2 春季皇靈祭に國旗を掲揚すること	二十四 ウグヒス 二十五 つくし 二十六 汽車	七時、庭、春、ツノ時 土手、ぼ、そ、ぞ 汽車、走つて、くゎもつ列車 牛車	○作品の朗讀 (イ)自分の作品をお話のやうによむ (ロ)人の文を喜んできく ○自分でなほすことの練習 (イ)自分の文を何度も讀み直す (ロ)書き足りない處へ補ふ ○一年間の綴り方 まとめさせて讀み返させ生活の反省

材一覽表

科 カタ 綴り方指導要項例	綴り方參考文題	理數科 カズノホン 題目時間	自然の觀察 題目時間	體錬科 當校授業細目（新教材）	藝能科 ウタノホン 題目	基礎訓練鑑賞教材	テホン 題目	エノホン 題目時間
○簡單な話合 (イ)挨拶や應答がはつきり言へるやうに (ロ)見たこと、したこと、考へたこと、聞いたことなどの話合 (ハ)おもしろい話、をかしい話、珍しい話	オウチノコト ガクカウノコト ツウガクノコト テンチヤウセツ	カズノホン（一） 第一章 數へ方 春の野（一） 紙とクレヨン（一） おはじき（一）	1 學校の庭（一） 2 記念の木（一） 3 庭の花（一） 4 庭の動物（一） 5 春の野（一日）	正常歩 足踏 集合（二列縦隊） 整列競爭 ウオーキングステップ ランニングステップ スキッピングステップ 日の丸の旗	○一 ガクカウ ○二 ヒノマル ×キミガヨ	物音の識別 五線の指導 「君が代行進曲」	習字用具の名稱と取扱方	エノホン一 1 イロ（一） 2 カミデツパウ（一） 3 タイサウ（一） 4 ハタ（一） 5 ハタヲアゲル（一）
○生活の言語發表 (イ)野外遊歩、見學などに其の場で問答したり見聞したりしたことに就いての發表 (ロ)提示した實物や繪畫兒童の描いた繪などについて發表 (ハ)遊び、學習、飼育、工作、栽培の經過の發表	エンソク ウンドウクワイ オセック ハナト コトリ	おはじき（一） 兵隊ごつこ（一） 運動會（一） 數字の手本（一） 石けり遊び（三） 松葉の遊び（二）	6 春の種まき（一） 7 木の葉遊び（一） 8 草花とり（一日） 9 草花植ゑ（一）	足側（前）出 臂廻旋（前） 脚側振 速歩行進 正常走 臂側擧 脚屈伸 胸後反體側轉 片足跳 綱引 鳩	三 ユフヤケコヤケ 四 エンソク	樂器の音の高低の識別 ホ、ト、ロ、ニ、の位置 「森の鍛冶屋」	初歩教材 「ヨコの練習」 「テン」と「タテ」の練習	6 カブト（一） 7 コヒノボリ（一） 8 キレイナハナ（一） 9 ハナヲナラベル（一） 10 グンカン（一） 11 スキヘイサン（一）
○發表をとり上げる (イ)兒童の發表した面白い個性味ある短話を書き止めておいて發表 (ロ)兒童の獨り言や、誰かに言つたことや、說明したことなどを話してやる ○繪による發表 (イ)日常生活の事柄の繪による發表 (ロ)連續した繪話の作製繪日記、紙芝居 (ハ)短いことばを書き入れ繪入り文、繪ときとする	オテツダヒ アソビ アメ ヒカウキ エホンノハナシ	豆（三） 初夏の水邊（二） 時計（二） 第二章 數の增減 兔（一） 兔ごつこ（一） ひよこ（一） 學校歸り（一）	10 池や小川の動物（三） 11 麥畠と蟲とり（一日と一） 12 雨あがり（一）	ラジオ體操第一 整頓（前方） 右左向後向 受渡競爭 徒歩競爭 手布取 源平旗擧 かたつむり	五 カクレンボ 六 ホタルコイ	「森の水車」 「ハホト」「ハヘイ」の記憶 ヘイハの位置 視唱の基礎訓練 「時計屋の店」	「ナナメ」の練習 「タテ」「ヨコ」「オレ」と「マル」の練習	12 オモチヤ（一） 13 サンカクシカクナラベ（一） 14 クダモノ（一） 15 ハシレジドウシヤ（一） 16 木ノハノイロ（一） 17 アメガフル（一）
○發辭及び表記の基礎練習 (イ)話合、言語發表の兒童の言葉をとり上げて發聲の基礎練習 (ロ)興味ある短文の視寫、聽寫	タナバタ ガクゲイクワイノコト オボンソトデアソンダコト オマキリシタコト コノゴロノヤサイ	猿蟹合戰（二） 七夕（二） 風車（二） 飛行機（一） 戰車（一） つばめ（一） 色板並べ（二）	13 しやぼん玉遊び（二）	脚前振 伸臂懸垂立 前歩平均 立巾跳 ラジオ體操第二 跳越（跨越） 猫と鼠 カラカヒ鬼	○七 ウミ	「ロニト」の記憶 ニ、ハ、ロの位置 五線譜の音名讀	總練習	18 オサカナ（一） 19 ブランコ（一） 20 オフネ（一） 21 センセイ（一） 22 オニハノダウグ（一）
○夏休の繪日記 (イ)學級にて展覽し、相互に見合ふ (ロ)取材の仕方の指導 ○行動の叙述 (イ)自分のしたことをお話するやうに書く (ロ)うちの人や身のまわりの自然のことにもふれて自由に書く	ナツヤスミノオハナシ アラシノ日 ムシ オ月見 ガクカウエン	第三章 數の構成 朝顔とトンボ（一） 魚取り（一） 箱團扇紙風船（二） 輪拔げ（三） 果物（一） コスモスの花（三） なす（一）	14 朝顔（一） 15 ばつた取り（一日） 16 お月さま（一） 17 うさぎ（一）	臂前伸 懸垂立（移行） 側歩 體前屈 集合（横隊） 片足跳（移動） 兵隊さん	○八 オウマ ○九 オ月サマ	和音の書取 二分音符、四分音符の指導	一 二 ハト	23 水アソビ（一） 24 カハイイトリ（一） 25 オツキミ（一） 26 オツキミノゴチサウ（一） 27 モモタラウ（一）
○發表をとり上げる (イ)第一學期に準ずる (ロ)とり上げたものを適當な方法でよく讀ませ、取材のし方、あらはし方の指導	エンソク 山ノボリ ウンドウクワイ オマツリ タンボノヤウス キイタハナシ ヨンダ本	カズノホン（二） 第一章 十まで數範圍に於ける加減 卵、梨（一） お手玉おはじき（三） いもほりかけつこ（三） 計算練習（三）	18 野菜と果物（一） 19 秋の種まき（一） 20 とり入れ（一日）	足各方出 臂廻旋 掌反胸後反 擧股歩（走） 整列（横隊） 兩脚跳 ジヤンケン遊	十 モモタラウ 十一 タネマキ	分散和音唱 分散和音の視唱練習 八分音符の指導 「郭公ワルツ」	ヒノマル キミガヨ	エノホン二 1 オウチノ人（一） 2 オヒハヒノチヤウチン（一） 3 トリヰ（一） 4 ウンドウクワイ（一） 5 ウンドウグ（一） 6 秋ノケシキ（一）
○短文の視寫、聽寫 (イ)書き方と連絡、促音、濁音、長音、拗音句點、字配りに注意する (ロ)自發的に書寫するやうに仕向ける ○郵便ごつこ (イ)役割をきめての郵便ごつこ (ロ)生活の實際を通信し合ふ	メイヂセツ コノゴロノクダモノ ヘイタイサンニ エ日キ エバナシ	雜題（二） 第二章 百までの數 落葉（四） 買物（三） 差を求めること（四） 物指（一）	21 もみぢ（一日と一） 22 笛（一）	脚各方擧振 臂各方擧振 懸垂振 體側屈 手ツナギ鬼 觸球 象	○十二 ハトポッポ 十三 コモリウタ	單音抽出唱 律動をつけた分散和音唱 「小鳥屋の店」 「子守歌」	フジサン オミヤ トリヰ	7 ドウブツ（一） 8 ケイトウ（一） 9 イロガミ入レ（一） 10 ハヲナラベル（一） 11 クダモノカゴ（一）
○紙芝居の製作 (イ)繪と文を使つた連續した表現 (ロ)想像、自分の行動、自然をうつさせる ○冬休の綴り方 (イ)戰地の兵隊さんへの年賀狀 (ロ)繪日記の書き方	冬ノアサ カヒモノ シモヤケ モチツキ	はがき 豆細工（二） 紙の鎖（二） 買物ごつこ（三） しでの切り方（二）	23 鳥の羽（一） 24 落葉かき（一） 25 冬の衛生（一）	大股歩（走） 跳越（踏越） 片手鬼 巴鬼	十四 オ人ギヤウ 十五 オ正月	歌詞をつけた分散和音唱	ツヨイカラダ クニヲマモレ	12 ゴバン目ヌリ（一） 13 カルタ（一） 14 ニフエイ（一） 15 オ正月（一）
○冬休の繪日記 (イ)第二學期に準ずる (ロ)題材のとらへ方、あらはし方の指導 ○遊びを書かせる (イ)正月の遊び、かくれんぼなどより自分の行動をくわしく書く (ロ)對話を入れること、對話に「」をつけること、	グヮンジツノアサ エ日キ オ正月ノアソビ	第三章 百までの數の簡單な加減 ひめくり七曜表（三） お正月（一） 計算練習（三）	26 冬の天氣（四） 27 日なたと日かげ（一）	臂上伸 後歩 駈歩 避球	十六 デンシヤゴツコ 十七 カラス	ハホトの和音合唱 附點音符の律動 「國際急行列車」	ムチエ ウロネ 上下大	16 犬ト犬ゴヤ（一） 17 キリヌキモヤウ（一）

○生活の話發表
(イ)野外遊歩、見學などに其の場で問答したり見聞したりしたことに就いての發表
(ロ)提示した實物や繪畫兒童の描いた繪などについて發表
(ハ)遊び、學習、飼育、工作、栽培の經過の發表

○發表をとり上げる
(イ)兒童の發表した面白い個性味ある短話を書き止めておいて發表
(ロ)兒童の獨り言や、誰かに言つたことや、説明したことなどを話してやる

○繪による發表
(イ)日常生活の事柄の繪による發表
(ロ)連續した繪話の作製 繪日記、紙芝居
(ハ)短いことばを書き入れ繪入り文、繪ときとする

○發聲及び表記の基礎練習
(イ)話合、言語發表の兒童の言葉をとり上げて發聲の基礎練習
(ロ)興味ある短文の視寫、聽寫

エンソク ウンドウクヮイ オセック ハナトコトリ	おはじき(一) 兵隊ごつこ(二) 運動會(二) 數字の手本(二) 石けり遊び(三) 松葉の遊び(二)	6 春の種まき(二) 7 木の葉遊び(二) 8 草花とり(一日) 9 草花植ゑ(一)	足側(前)出 臂廻旋(前) 脚側振 速歩行進 正常走 臂側擧 脚屈伸 胸後反 體側轉 片足跳 綱引 鳩
オテツダヒ アソビ アメ ヒカウキ エホンノハナシ	豆(三) 初夏の水邊(二) 時計(二) 第二章 數の増減 兎(一) 兎ごつこ(一) ひよこ(一) 學校歸り(一)	10 池や小川の動物(三) 11 麥畠と蟲とり(一日と一) 12 雨あがり(二)	ラジオ體操第一 整頓(前方) 右左向後向 受渡競爭 徒歩競爭 手布取 源平旗擧 かたつむり
タナバタ ガクゲイクヮイノコト オボン ソトデアソンダコト オマヰリシタコト コノゴロノヤサイ	猿蟹合戰(二) 七夕(二) 風車(二) 飛行機(一) 戰車(一) つばめ(一) 色板竝べ(二)	13 しやぼん玉遊び(二)	脚前振 伸臂懸垂立 前歩平均 立巾跳 ラジオ體操第二 跳越(跨越) 猫と鼠 カラカヒ鬼

三 ユフヤケコヤケ	樂器の音の高低の識別 ホ、ト、ロ、ニ、の位置	初歩教材 「ヨコの練習」
四 エンソク	「森の鍛冶屋」 「森の水車」	「テン」と「タテ」の練習
五 カクレンボ	「ハホト」「ハヘイ」の記憶 ヘイハの位置	「ナナメ」の練習
六 ホタルコイ	視唱の基礎訓練 「時計屋の店」	「タテ」「ヨコ」「オレ」と「マル」の練習
○七 ウミ	「ロニト」の記憶 ニ、ハ、ロの位置 五線譜の音名讀	總練習

6 カブト(一)
7 コヒノボリ(一)
8 キレイナハナ(一)
9 ハナヲナラベル(一)
10 ゲンカン(一)
11 スキヘイサン(一)
12 オモチヤ(一)
13 サンカクシカクナラベ(一)
14 クダモノ(一)
15 ハシレジドウシヤ(一)
16 木ノハノイロイロ(二)
17 アメガフル(一)
18 オサカナ(一)
19 ブランコ(一)
20 オフネ(一)
21 センセイ(一)
22 オニハノダウグ(一)

○夏休の繪日記
(イ)學級にて展覽し、相互に見合ふ
(ロ)取材の仕方の指導

○行動の叙述
(イ)自分のしたことをお話するやうに書く
(ロ)うちの人や身のまわりの自然のことにもふれて自由に書く

○發表をとり上げる
(イ)第一學期に準ずる
(ロ)とり上げたものを適當な方法でよく讀ませ、取材のし方、あらはし方の指導

○短文の視寫、聽寫
(イ)書き方と連絡、促音、濁音、長音、拗音句點、字配りに注意する
(ロ)自發的に書寫するやうに仕向ける

○郵便ごつこ
(イ)役割をきめての郵便ごつこ
(ロ)生活の實際を通信し合ふ

○紙芝居の製作
(イ)繪と文を使つた連續した表現
(ロ)想像、自分の行動、自然をうつさせる

○冬休の綴り方
(イ)戰地の兵隊さんへの年賀狀
(ロ)繪日記の書き方

ナツヤスミノオハナシ アラシノ日 ムシ オ月見 ガクカウエン	第三章 數の構成 朝顔とトンボ(一) 魚取り(一) 箱團扇紙風船(二) 輪拔げ(三) 果物(一) コスモスの花(三) なす(一)	14 朝顔(二) 15 ばつた取り(一日) 16 お月さま(一) 17 うさぎ(一)	臂前伸 懸垂立(移行) 側歩 體前屈 體前屈 集合(横隊) 片足跳(移動) 兵隊さん
エンソク 山ノボリ ウンドウクヮイ オマツリ タンポポノヤウス キイタハナシ ヨンダ本	カズノホン(二) 第一章 十までの數範圍に於ける加減 卵、梨(二) お手玉 おはじき(三) いもほり かけつこ(三) 計算練習(三)	18 野菜と果物(二) 19 秋の種まき(一) 20 とり入れ(一日)	足各方出 臂廻旋 掌反胸後反 擧股歩(走) 整列(横隊) 兩脚跳 ジャンケン遊
メイヂセツ コノゴロノクダモノ ヘイタイサンニ エ日キ エバナシ	雜題(二) 第二章 百までの數 落葉(四) 買物(三) 差を求めること(四) 物指(一)	21 もみぢ(一日と一) 22 笛(一)	脚各方擧振 臂各方擧振 懸垂振 體側屈 手ツナギ鬼 觸球 象
冬ノアサ カヒモノ シモヤケ モチツキ	はがき 豆細工(二) 紙の鎖(二) 買物ごつこ(三) しでの切り方(二)	23 鳥の羽(一) 24 落葉かき(二) 25 冬の衛生(一)	大股歩(走) 跳越(踏越) 片手鬼 巴鬼

○八 オウマ	和音の書取	一 二
○九 オ月サマ	二分音符、四分音符の指導	ハト
十 モモタラウ	分散和音唱 分散和音の視唱練習 八分音符の指導	ヒノマル
十一 タネマキ	「郭公ワルツ」	キミガヨ
○十二 ハトポッポ	單音抽出唱 律動をつけた分散和音唱 「小鳥屋の店」	フジサン
十三 コモリウタ	「子守歌」	オミヤ トリヰ
十四 オ人ギヤウ	歌詞をつけた分散和音唱	ツヨイ カラダ
十五 オ正月		クニヲ マモレ

23 水アソビ(一)
24 カハイイトリ(一)
25 オツキミ(一)
26 オツキミノゴチサウ(一)
27 モモタラウ(二)

エノホン
1 オウチノ人(二)
2 オヒハヒノチヤウチン(一)
3 トリヰ(一)
4 ウンドウクヮイ(一)
5 ウンドウグ(一)
6 秋ノケシキ(一)
7 ドウブツ(一)
8 ケイトウ(一)
9 イロガミ入レ(一)
10 ハヲナラベル(一)
11 クダモノカゴ(二)
12 ゴバン目ヌリ(一)
13 カルタ(二)
14 ニフエイ(一)
15 オ正月(一)

○冬休の繪日記
(イ)第二學期に準ずる
(ロ)題材のとらへ方、あらはし方の指導

○遊びを書かせる
(イ)正月の遊び、かくれんぼなどより自分の行動をくわしく書く
(ロ)對話を入れること、對話に「」をつけること、句點を正しくつけること、

○うちの人
(イ)親しみの心で詳しく家の人のことを書く
(ロ)様子のよく表はれてゐるところの賞揚

○手紙の文
(イ)兵隊さんからの手紙のよみあひ
(ロ)兵隊さんや病氣の友達への文を書かせ手紙の指導

○詩
(イ)感動した事柄を短語で
(ロ)感じたまゝを文に表現する
(ハ)よい程度の作品鑑賞

○作品の朗讀
(イ)自分の作品をお話のやうによむ
(ロ)人の文を喜んできく

○自分でなほすことの練習
(イ)自分の文を何度も讀み直す
(ロ)書き足りない處へ補ふ

○一年間の綴り方をまとめさせて讀み返させ生活の反省

グヮンジツノアサ エ日キ オ正月ノアソビ シャシン キモノ	第三章 百までの數の簡單な加減 ひめくり七曜表(三) お正月(二) 計算練習(三) 色々の形のかげ(二)	26 冬の天氣(四) 27 日なたと日かげ(一)	臂上伸 後歩 駈歩 避球
マメマキ キゲンセツノ日 ユメ 日ナタボッコ 學ゲイクヮイ	豆まき(三) 第四章 二位數と基數との加減 たこあげ(二) とほせんぼ(二) 村の家(一) 水仙(一) 計算練習(二) 雜題(四) 計算練習(二)	28 春を待つ庭(一)	攀登(肋木) 兩脚跳(臂立跳)
オヒナサマ オカアサン ウグヒス 二年生ニナル	雛祭(二) かくれんぼ ぶらんこ(一) 計算練習(二) 私たちの村(三)	29 方角(二) 30 草つみ(一日)	(既習教材の修練)

十六 デンシャゴッコ	ハホトの和音合唱 附點音符の律動	ムチエ ウロネ
十七 カラス	「國際急行列車」	上下大 小日月
○十八 兵タイゴッコ	ハヘイの和音合唱 單音の音高記憶の方法 「おもちゃの兵隊さん」	ノボル アサ日 子ネコ
○十九 ヒカウキ		丸イ目
二十 ウグヒス	ロニトの和音合唱 (既習教材の修練)	川水石 山里村

16 犬ト犬ゴヤ(二)
17 キリヌキモヤウ(一)
18 オウチノ人タチ(一)
19 オメン(二)
20 マメマキ(一)
21 ツクヱコシカケ(二)
22 オ人ギヤウ(一)
23 兵タイサン(一)
24 ヒカウキ(一)
25 ヒカウキノモヤウ(一)
26 赤イリンゴ(一)

ウタノホン 細目欄の○印は必修教材 ×印は歌詞のみ掲載

とは既に述べた所である。洵に兒童は情緒の動く所必ず行動に出る。而して、この幼兒期の兒童はこの自己本然の特質、行動性を表し、これを通して素朴的な思考や知覺をなし、又これを通して次の行動に轉じてゆくのである。試みに、家庭に於ける幼兒を觀察するならば、安らかに眠る睡眠以外の時間は、これ悉く彼等の活動の時間であることに氣附くであらう。玩具、人形、書物、草木、土砂、石塊等その對象を選ぶことなく、これをよき相手として、例へ空氣も凍る冷たき冬の朝夕でも、彼等は己の手足を赤らめながら活動して止むことを知らないのである。

正に、家庭に於ける兒童は幼兒期兒童である。この期の兒童は實に、活動力旺盛で、彼等の全生命を傾けて未分化的生活を寸暇もなくなしつゞけてゐるのである。即ち彼等は、自己自身を行動的情緒的生活に眞實なる具體的自己として顯現し、その間に自己の發達と成長を自然に遂げてゐるのである。

然らば、かかる家庭生活の中から、入學して來た兒童の教育は何に依つてなさるべきであらうか。乃ち、この期の兒童の特質に從つて、分析以前の生活事實に即して學習せしむるを以て至當としなければならぬ。といふのは、この期兒童の未分化的特色を打ち破つたり、又その有する能動性、自發性、表現性等の特質を否定しては如何なる教育力を以つてしても兒童の錬磨育成の効を積むことは困難であらうと考へらるる故である。そこで綜合授業は兒童の生活を方法的原理とするのであるが、凡そ兒童の生活は、日常茶飯事の戯や遊びを主體とする家庭と、團體的規律の比較的嚴正な學校生活と、附近の友達と相聲む遊び中心の交友的社會生活とをその領域によつて分析することが出來る。綜合授業はかゝる兒童生活を方法的原理として、題目の選定をなし、授業の方式を樹立しなければならぬ。

生活は事實である。正に幼兒の生活は彼等が行動的に形成する活動であつて、それは彼等が全生命を傾けて營む具體的行動の事實に外ならぬ。大人の立場から、この生活事實を分析する時に幾多の分科的體系を生ずるのであるが、それは即ち具體の姿の抽象面に過ぎない。この抽象面に生ずる論理的體系を未分化期に於ける兒童教育の方法的原理としても、この期の兒童生命に深くくひ入つて、その錬成を期することは極めて困難であらう。即ち綜合授業がその方法的原理を「兒童生活」とする所以はかかる抽象をさけて、專ら彼等の生命を形成する事實そのもの、具體そのもの

の上に立つて、この未分化段階の兒童を全一的に錬成せんとするがために外ならぬ。

さて、「生活」を原理とするといふ時、皇國の道の傳統から游離した、單なる個人的生活や、兒童の自由なる生活活動の如きものとして、その生活をとらへるのではないかとの杞憂にとらへられるであらう。而し、生活をかかる自由な、抽象的、個我的活動として考へるのは大いなる誤謬といはなければならぬ。何となれば「生活」は鄕土に深く根を下ろした生活だからである。ここに綜合授業の第二の方法的原理として、「鄕土」を擧げる次第である。

二　鄕土の原理

生活といつても、生活する現實の場所から離れた架空的な生活の存在しよう筈がない。山横たはり河流れ、草木又繁茂し人の住む鄕土において生活は營まれるのである。綜合教授の原理としての、かかる鄕土はそもそも如何なる意味を有するのであらうか。

鄕土は兒童の生活する場であつて、そこには親しみ深かい自然物と自然現象と、したわしい人々とその營みとに滿ちあふれてゐるのである。それ等の一切を擧げて鄕土は成長の途上にある未分化期兒童を暖く育成し、又兒童等は極めてささやかな仕方に於てではあるが漸次これを化育せんとする。兒童と鄕土はこのやうな相互育成的存在に外ならぬ。ひるがへつて思へば、わが鄕土は神の生み給うところであり、敬愛する祖先墳墓の地であり、父祖鄕人の化育の土地である。かかる意味深き鄕土の含む自然的歴史的還境の中に在つて、しかも、これに對し行動的情緒的活動を營む兒童は、全く無意識の間に既にその鄕土の持つ傳統的精神に薫化され、かゝる傳統的精神において錬成されることはいふまでもない。そこには單に個人的な、傳統社會から離脱した自由な生活の認められる筈がないのである。

兒童は斯様な鄕土によつてわが國の麗はしい傳統の精神を深く身につけることが出來るのであるが、さてこの鄕土を普通考へられるやうに普遍に對立する單なる特殊の如き意味に考へてよいであらうか。果して然らば鄕土は部落根性の如き偏狹なる精神を育成するより外仕方ない存在とならねばならぬ。かへり見れば、鄕土は單に他と異つた特別なる地域といふのではない。一鄕土は一特別なる地域には相違ないが、それにも拘らず、國家的活動の最も具體的に顯現する場所なのである。國家は卽ち國家の活動、國家の生命をこの鄕土において具體的に實現することが出來るのである。靜かに思へば、鄕土の包む一切が皇國の道の具現に外ならぬのである。兒童は國家の總體的活動を大きく全體として認識し得べくもないが、鄕土に於ける日常平素の生活に於て、國家活動の具體相、皇國の道の顯現に常に接し、常にこれに包まれてゐるのである。洵に、日常起居動作の茶飯事から、花摘、蟲取等の自然生活、さては、出征兵士の見送り、英靈の出迎へ、時局談、物資愛護節約、防空、衞生等々一つとして皇國の道の顯現でないものはない。

兒童はかかる事柄の展開する鄕土的立場において、何等かの形でこれに參與し生活し、その鄕土性を通して、兒童の能力に應じた國民的自覺がなされるのである。故にこの鄕土を綜合授業の原理とし、兒童生活の原理と合せ一體化し、兒童の鄕土生活の上に綜合授業の題目選定決定やら、授業の方法やらが考案されなければならぬ。

この故に教則案說明要領にも「思ふに、兒童の環境に於ける小規模の生活は、大規模に於ける國家的生活の縮圖であり、兒童は就學以前に於て既に一切の國民文化を無意識的ながら、漠然ながらも、隱約の中に體驗し、之を直觀的感情的全體的に把握しつゝある。」として、鄕土の持つ教育的意義の重且大なる所以を論じ、實に國家生活の縮圖と述べてゐるのである。尙又、國民學校の教育全般に涉つて、常に鄕土を重視し、夫々その土地の情況に應じた適切なる教育を施すべき趣旨は各所に示されてゐるが、國民學校令施行規則第一條には、「環境を顧慮して適切なる教育を施すべき」注意が見受けられ、又ヨイコドモ上敎師用書にはその敎科書の取扱に關して、「兒童の生活は居住する鄕土によつてその情況を異にし、また心身の發達に關しても多少の相違を示すものである。これ等の事項に鑑みて、敎師は敎科書の各課について指導する際には、兒童の日常生活に適切ならしめ、その實際に卽して行ふやうに注意しなければならぬ。」と述べ、更に「補充敎材は鄕土化する必要のある外はあまり多く用ひないがよい。」と取扱上について鄕土に關する關心の深さを示し、その取扱に十分なる注意を要求してゐるのも亦實に鄕土が國家活動の具現の場所であり、鄕土に存在する一つ一つの一切が皇國の道の現れだからである。

われわれは、肇國以來、肇國精神の綿々と續き、國家活動の具現する鄕土、われわれと實に地緣血緣の關係に在る

郷土と、そして兒童の生活事實とを綜合授業の方法的原理としたのである。今やわれわれは、この兒童の郷土生活を方法的原理として、綜合授業の組織體系の計畫へと進まなければならぬ。

第三節　綜合授業の教材體系

凡そ事の成否は一に懸つてその計畫の如何にある。緻密なる計畫のもとに事を進行する時、初めて堅實なる發展を遂げ成功の域に到達することが出來るのである。教育の成果も又その一切を擧げて、この計畫性に俟たなければならないのであるが、殊に教授の方法的體系をその根本より打ち立てねばならぬ綜合授業においてこの感を一入深くするものである。生活題目の選擇といひ、その排列といひ、更に又、この綜合教材の中から特に修練すべき面の考察決定といひ悉くこの計畫性に俟たなければならぬ。又この綜合授業の教材の客觀體系を實際授業に展開する具體的立案に於ける方法論及び實際方法の樹立にしても亦この計畫性の重要性が痛感されるのであつて、正に、綜合授業は、綿密なる計畫に基づいて教材體系を確立し、具案的計畫をめぐらして實際方法を展開するのでなければならぬ。若しこの計畫性の缺除乃至は貧困において、綜合授業が營まれるならば、恐らくは、無體系の教材に隨つて無系統にして斷片的な教授に終始する所謂機會教授の如きものに陷るの外はないであらう。實に、計畫性は綜合授業成否の鍵であるといつても過言ではあるまい。

一　生活題目の選擇

綜合授業は、固定化した分科的教材や、概念化した學問的體系の部分部分を學習せしむることではなく、なしろ、その母體であり、源泉である兒童の「郷土生活」そのものの中に在つて、それ自身から直接に學習體得せしむるものでなければならぬことを明瞭にして來た。その故に、「兒童生活」と「郷土」を綜合授業の方法的原理とし、郷土に於ける彼等の生活に卽して、未だそこから游離せざる狀態、卽ち生活感興そのものの中において、事を處理し、工夫し、觀察し、記錄し、或は保存し、思惟し、計畫してゆけるやうに立案すべきことを要請したのである。

然るに、このやうな生き生きしい生活現象は、豫想すべからざるものとして、その場その場の思ひつきのままに機會教授をするならば、當然の結果として、一定期間内に一定の錬成目標に到達することは困難な問題となるであらう。ここに郷土に於ける兒童生活中から生活題目を選擇決定し、これを排列し、具案的に系統的に營み得るやう計畫しなければならぬ理由があるのである。

さてそこで、生活題目の決定は教育の目的意識に基づいて、綜合授業の方法的原理である、兒童の生活と郷土性に立脚した立場から決定されなければならぬが、ひるがへつて思ふに兒童の生活は、郷土に於ける自然物・自然現象・文化物・文化現象を生活の素材として間斷なく營まれるのであり、その素材である郷土の事物現象は悉く皇國の道の具現態として、道そのものでなければならぬと考へられる時、環境は卽ち一切教材となるのでなければならぬ。而して、尙、それにも拘らず、生活題目の選擇を要請する所以のものは、よりよく教育目的を滿足し、よりよく錬成目標に到達することの出來るものでなければならぬからである。而も、一定期間に一定量の錬成内容を身につけさせなければならぬのであるが、こゝにも亦教材選定の理由を見ることが出來る。かくしてわれわれは、一切の生活環境卽ち客體的な素材の中から初等科一年生の錬成に最もよく適した生活題目を選ぶべき段取りに進まなければならぬ。

兒童生活及び郷土の原理に立つ綜合授業の生活題目選擇の基準は教育の目的と期間とにおくべきであるが、これを具體的に教育内容として規定してゐる所のものは初等科第一學年用教科書である。さて、この教科書の指導すべき内容とその取扱期間とを一覽表に作製したものが前節の「教材系統表」であつた。この初等科第一學年の教育目標を具現し、その意味において目的を現實的に規定してゐる所のこの教材を分析分類し、これを基準として、兒童の生活原理と郷土性の原理に基づいた生活題目の選定を試みたのである。

第一に國家的儀式行事の生活、第二に民族的行事生活、第三に學校行事生活、第四に郷土的自然の生活、第五に遊戯的生活の如く分類し、凡そ教科書に採用されてゐる教材の頻數的立場を顧慮して次のやうな生活題目を選擇したのである。

1　國家的儀式行事の生活

天長節　明治節　新年　紀元節　支那事變記念日　陸軍記念日　海軍記念日　大詔奉戴日　日めくり

2　民族的行事生活

妻科神社　善光寺　端午の節句　七夕祭　祇園祭　お彼岸　お月見　お正月　節分　雛祭

3　學校行事生活

私たちの學校　遠足　校醫の先生　私たちの身體　夏休　夏休後の展覽會　お話會　運動會　音樂會　ストーブ　小國民

4　鄉土的自然の生活

春の野　城山　おたまじやくし　花畠　窪寺觀音　湯福川原　丹波島川原　裾花川　朝顏　秋の畠　阿彌陀堂　飛行場　落葉　お天氣　雪と氷　日なたと日かげ　春

5　遊戲的生活

粘土遊び　箱庭作り　買物ごつこ　物指　兵隊ごつこ　お客樣　强い子

さて以上の樣な生活題目をその生活の主なる意味對象から分類して撰定したのであるが、もとより、著しい生活の場や、その生活の意味の上から一應分析したものに過ぎない。從つて、この生活題目の根低においては何れも皆、連絡の緊密性を維持してゐて、生活事實の生きた實相から見る時、必ずしも、輕々しい分析は當らないのである。それにも拘らず、敢へてかゝる分類に立つて選定した所以のものは、目的に妥當した題目の選定を試み、教科書の具體的教材と照應せんがための便宜に外ならなかつたのである。

さて生活題目選擇決定の際に、特に留意した點を擧げれば、教科書の全教材が、すべて何れかの生活題目に包含されるやうに考へたことである。從つて、教材に依つては、取扱順序を教科書と異にし、又取扱時期も前後せる場合もあるが、これ等は必ずしも一時にその指導の徹底を期することなく、やがて再びこれを扱ふ機會において、反復修練

を重ねるやうに考慮を拂つたのである。

二　綜合授業の組織體系

綜合授業の指導の單元として以上の生活題目を確定したのであるが、更にこの生活題目の設定は又、次のやうな意味を荷ふものと考へられなければならぬ。卽ち、兒童をつゝむ、自然態、文化態、總じて兒童の周圍に存在し、生成する鄉土及び生活の諸現象は洵に多岐多樣にして、單純にこれを受容することの出來るものではないが、それにも拘らず、この故に、これ等の生活環境を敎育的に整理し、兒童をして、かゝる整然たる環境內に活動せしむることによつて受容習得の効を大ならしむる必要に迫られるのであるが、「生活題目」の選定はこの生活環境の敎育的整理としての意味を、明らかに荷ふものでなければならぬ。

今や、以上に依つて選擇した個々の生活題目を排列して、綜合授業の組織體系を樹立しなければならぬ。現在の生活は、過去の生活がそれ自身の中から學ばしめた力を契機に營まれてゐる新しき創造の生活に外ならぬ。ここに成立する現在の兒童の力は、過去の力を含みながら、やがて未來の生活に發展する可能性を胚胎し、美しくも整理された環境の刺戟に惠まるる時、必ずや彼等は情緒的行動的生活創造を展開する。兒童の展開する現生活段階は、それ自身現在の力への到着を意味し、更に次の生活への素因をなし、やがて生活の創造へと發展する。故に、生活自體、學習自體が既に、到着と素因と發展とを持たねばならぬことを何人も認めなければならぬ。われわれの生活題目の排列系統も亦兒童生活自體の發展系統をそれ自身に示すものでなければならぬ。かくして、始めて兒童の成長を發展的に誘導し、指導の圓滑を自ら與へ得るものといふことが出來る。而して、かかる「生活題目」の發展聯關については、後に示す表に明らかなる如く、その題目の含む指導事項に於て顯著である。

さて、綜合授業組織體系の樹立について、特に考慮した點を列擧すれば凡そ次の通りである。

1　「生活題目」が已に、兒童の鄉土生活を原理として設定されたものである故に、兒童生活と分離することは不可能である。この故に、「生活題目」の排列は專ら兒童の生活曆に從つて、凡そ入學式より終業式に到る次序を以てしたの

である。

2　國家的儀式行事、民族的行事、學校行事等を題目とするものについては、その行はれる期日の前後に於て指導出來るやうに排列した。當地特獨の期日をとるものは當地の慣習に從つたのは言ふまでもない。例へば五月五日の端午の節句は、長野では六月五日に行ふ故に、その頃に排當した如きがそれである。

3　實際取扱上の問題を顧慮して、一題目を一定期間連續して指導することの出來ない場合は、二題目乃至數題目が並行して扱はれるやうに排列した。

以上の趣旨によつて出來上つた「生活題目指導系統表」は次頁に表示する通りである。

三　綜合授業計畫に關する諸問題

1　生活題目の選擇決定とその排列體系とを確立して、兒童生活と鄕土とを原理とする教材の系統を組織したのであるが、この計畫に於て、恐らくは、常に問題となるだらうことがある。それは施行規則第二十七條第五項に「一部又ハ全部ノ教材ニツキ」と示されてゐる點に關する問題である。

當校に於ては全部の教科についての綜合授業を試みたのであるが、上記の法規に則つて、一部的な綜合授業の形態も考慮せられるのであるが、かかる形態をとるものとしては如何なるものが考へ得らるゝであらうか。第一に、中心科目主義說がある。これは一科目乃至二三科目を中心にして、他の教科は悉くこれに綜合して、指導を進める仕方に外ならぬ。例へば國語と算數を何時でも指導することによつて、その間他の理數科の仕事も藝能的な仕事も乃至は、修身地理國史等の修錬もなして行き、綜合出來ないものは分科の形をとらうといふ如きものである。第二に、特殊な教材に限つて綜合授業形態をとらうとするものがある。例へば行事教材のみは綜合授業案による等の如きがそれである。從つてこの場合は、綜合授業案として選出された教材　外は、分科的指導をなしていき、その間、度々綜合授業が顏を出すといふ形をとる筈である。

これ等は何れも、一部の教材についての綜合授業と言ひ得るものであるが、かゝる部分的な實踐形態を採用しなか

月	六	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	期間	単元
一	一日	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	時数	生活題目
二	二日	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	時数	生活題目

月	六	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	期間	単元
一	一日	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	時数	生活題目
二	二日	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	時数	生活題目

月	七	九	十一	十二	一	二	三	四	五	六	期間	単元
一	一日	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	時数	生活題目
二	二日	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	時数	生活題目

月	七	九	十一	十二	一	二	三	四	五	六	期間	単元
一	一日	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	時数	生活題目
二	二日	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	時数	生活題目

月	七	九	十一	十二	一	二	三	四	五	六	期間	単元
一	一日	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	時数	生活題目
二	二日	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	時数	生活題目

月	七	九	十一	十二	一	二	三	四	五	六	期間	単元
一	一日	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	時数	生活題目
二	二日	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	時数	生活題目

月	七	九	十一	十二	一	二	三	四	五	六	期間	単元
一	一日	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	時数	生活題目
二	二日	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	時数	生活題目

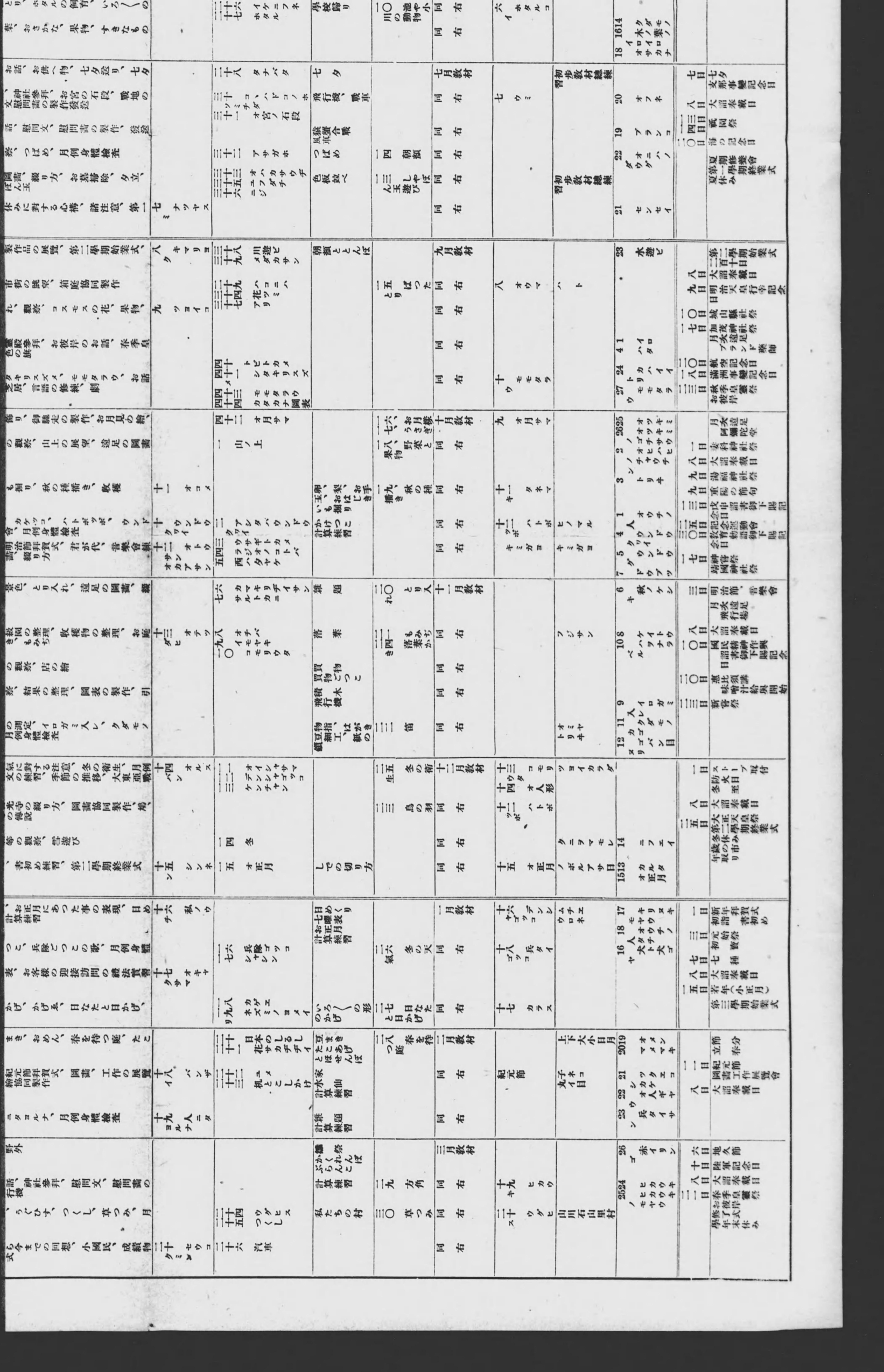
月	七	九	十一	十二	一	二	三	四	五	六	期間	単元
一	一日	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	時数	生活題目
二	二日	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	時数	生活題目

月	七	九	十一	十二	一	二	三	四	五	六	期間	単元
一	一日	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	時数	生活題目
二	二日	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	時数	生活題目

	月	一七 裾花川	一五	裾花川畔へ川遊びに行き、初夏の情景を味ふ	裾花川遊び、蟲とり、ホタルの飼育、いろ〳〵蟲
	月	一八 粘土遊ビ	六	粘土遊びをしながらいろ〳〵の物を作らせ、粘土に親しませ、思想の發表をさせると共に、手指の鍊磨をなす。	粘土遊び、木の葉、おさかな、果物、すきなも作り
期	七月	一九 七夕祭	一〇	七夕祭を行つて國民的情操に培ひ、工夫創造の精神を涵養する	七夕祭、七夕のお話、お供へ物、七夕送り、七の繪と綴り方
	七月	二〇 支那事變記念日	一八	支那事變説話をなして聖戰の意義を體得させ、神社に參拜して戰捷祈願をなし、時局に對する認識を深め宏壯雄大の心を養ふ	支那事變のお話、神社參拜、お宮の石段、戰地兵隊さん、慰問文慰問畫の製作發送
	七月	二一 大詔奉戴日	一二	大詔奉戴日に因んで時局に對する關心を持たせ、慰問畫 慰問文を作成して送る	大詔奉戴日のお話、慰問文、慰問畫の製作、發
	七月	二二 朝顔	一四	朝顔を栽培して自然の關心、植物愛育の念を深め且觀察表現の能を養ふ	朝顔の栽培、觀察、つばめ、月例身體檢査
	七月	二三 祇園祭	一八	祇園祭の頃を中心として夏期の行事、情景に注意させ、崇祖の精神に培ひ、表現の能力を養ふ	祇園祭のお話、圖畫、綴り方、お墓掃除、夕立、虹の觀察、しやぼん玉
	七月	二四 夏休ミ	二〇	茂菅溫泉に往復して心身を鍛鍊し、更に强健なる身體を鍊成する期間としての夏休みに對する心構を與へる	夏期修養會、夏休みに對する心構、諸注意、第學期終業式
第二學期	九月	二五 學級展覽會	一一	夏休み中に兒童の經驗し製作したものを集めて展覽し、生活を反省させ、學期始めの新な緊張を喚び起し、勤勉な心構を持たせる	夏休み中の蒐集製作品の展覽、第二學期始業式、水遊びの描寫
	九月	二六 箱庭作り	一日と三〇	簡易な郷土模型の製作を中心として學習し、遠足と關聯して初歩的な郷土觀察を行ふ	砂場遊び、長野市街の眺望、箱庭協同製作
	九月	二七 秋ノ畠(其ノ一)	一三	學級園の經營、觀察を中心として學習し、更に不屈不撓、我慢強く終りまでなし遂げる氣風を實踐的に生かさしめる樣指導する	花畠作り、手入れ、觀察、コスモスの花、果物月例身體檢査
	九月	二八 オ彼岸	三	お彼岸に善光寺に參詣し、崇祖の念を養ひ、戰勝を祈願し、全國的信仰を有する善光寺を知らしめる	善光寺參拜、忠靈殿參拜、お彼岸のお話、春季靈祭のお話、五色の旗
	九月	二九 オ話會	二九	「トビトカメ」「シタキリスズメ」「モモタラウ」等の童話を充分味讀することより進んで劇的展開をなし、國民精神を昂揚する	トビトカメ、シタキリスズメ、モモタラウ、お會、桃太郎の紙芝居、言語の修練、劇
	十月	三〇 オ月見	一二	名月の頃、お月見の飾りをなして月に關する説話をなし、自然への感情趣味を啓培する	お月見のお話、飾り、御馳走の製作、お月見のウサギの觀察
	十月	三一 阿彌陀堂	一日と五	阿彌陀堂の遠足にて山上の展望を味ひ、强健な體力を養ひ、途中の田園の景觀に接し、これ等の情景にあるものを表現すること等によつて、觀察力を養ひ、闊達な感情を養成する	月次遠足、田畑の觀察、山上の展望、遠足の圖綴り方
	十月	三二 秋ノ畠(其ノ二)	一三	秋の田園の情景に接して、自然の恩惠に感じさせ五穀を大切にすべき事を悟らせ、生物愛育の念を深める	花畠の整理、いも掘り、秋の種播き、收穫
	十月	三三 運動會	三〇	樂しい運動會を通して心身を練磨し、團體訓練の指導をなす	ウンドウクワイ、カケッコ、ハトポッポ、ウンウグ、記念運動會、月例身體檢査
	十月	三四 明治節音樂會	一四	明治節を中心に、儀式學校行事に對する心得を諭し、皇恩の宏大なるを思はしめ、その感激のうちに音樂會を行はせる	明治節のお話、明治節拜賀式、君が代、音樂會習、音樂會の圖畫、綴り方
	十一月	三五 飛行場	一日と一二	本年度最後の月次遠足を中心として郊外の秋の田畠、自然を充分に味はしめ、自然に對する親しみの心と感謝の念を深め、體力の練磨、團體行動の修練をなす	月次遠足、秋の景色、とり入れ、遠足の圖畫、綴り方、團體訓練
	十一月	三六 落葉	一日と二四	落葉拾ひを中心として之によつて晩秋の自然を印象づけ、觀察力を養ひ、家庭生活の喜びをも味はしむ	山野の落葉、學級園の整理、收穫物の整理、おの落葉、落葉かき、もみぢ
	十一月	三七 買物	一一	買物ごつこを中心として、主として經濟生活を指導し、數理思想を啓培する	買物ごつこ、店の觀察、店の繪
	十一月	三八 オ天氣	一三	第一學期以來の天候の記錄を纏めて觀察し、氣候觀察の初歩を指導する	お天氣の連續觀察、結果の整理、圖表の製作、算
	十一月	三九 物指	一三	物指を數へてその使用法に馴れしめ精密なる觀察眼を養ふ	物指の使用、物の測定、イロガミ入レ、クダモカゴ等の製作、月例身體檢査
	十二月	四〇 ストーブ	二一	暖房具使用の時期に因んで冬季の衛生、火氣に對する注意を與へ、闊達剛健なる氣風を失はないやうにする	暖房具裝置、火氣に對する注意、冬の衛生、月身體檢査、生活文の練習、季節の推移、大東亞爭のお話
	十二月	四一 善光寺	一九	善光寺に參詣してその壯嚴なる情景、宏壯なる規模に接し、圖畫、綴方等に表現することに依つて一層尊崇の念を深め歴史的感情に培ふ	善光寺參詣、善光寺の綴り方、圖畫協同製作、鳥の羽、善光寺の傳説
	十二月	四二 雪と氷	一二	無限の魅力を與へる雪、氷の出現を印象づけ、初冬の事物、自然環境について學ばせる	初冬、雪、氷、霜等の觀察、雪遊び
	十二月	四三 お正月	二八	樂しい正月を迎へる喜びと共に第二學期の終りを意識せしめ清新な心構へを以て新年を迎へ、學業に勵む樣に心がけさせる	お正月について、書初め練習、第二學期終業式
第三學期	一月	四四 新年	二〇	正月の兒童生活に因んで、その喜び、樂しさのうちに家の尊さ、有難さを感じさせ、その間に曆の觀念、思想表現等の修練をなす	第三學期始業式、お正月にあつた事の表現、日くり、七曜表、計算練習
	一月	四五 兵隊ごっこ	二二	冬の自然の中における兵隊ごっこの遊びを中心として勇壯活潑の氣風を養ひ、國防精神を涵養する	雪遊び、兵隊ごっこ、兵隊ごっこの歌、月例身檢査
	一月	四六 お客樣	五	比較的、多くの來客に接し、訪問の機會も亦多い年末年始の後を受けてお客樣に關する禮法の實踐を指導する	お客樣の經驗發表、お客樣の迎接訪問の禮法實
	一月	四七 日なたと日かげ	一九	光と影との關係に關心を持たせ、觀察眼を鍊り、工夫創造の精神を養ひ且理解力と表現力を鍊る	いろ〳〵の形のかげ、かげゑ、日なたと日かげお話
	二月	四八 節分	二九	樂しい節分の行事の前後において、その生活の指導をなし、傳統的な精神にふれしむ	節分のお話、豆まき、おめん、春を待つ庭、たあげ、
	二月	四九 紀元節展覽會	二七	紀元節に因んで國體の尊さを知らしめ奉公の誠を致すべき事を教へ、兒童の生活を過去に結びつけて歴史的感情に培ひ、更に圖畫工作の展覽會と結んで時局に對する認識を深める	紀元節のお話、紀元節拜賀式、圖畫、工作の展會大東亞戰爭の繪協同製作
	二月	五〇 强い子	一四	物事を自ら處理し、創意工夫し、我慢強く、將來國家のお役に立つ人となる樣に心掛けさせる	兵タイサン、人ニタヨルナ、月例身體檢査
	三月	五一 雛祭	七	雛祭の行事を通して我が國傳統の精神にふれしめる	雛祭、雛祭頃の野外
	三月	五二 陸軍記念日	一五	陸軍記念日の行事を中心として國防思想を涵養し時局に對する認識を深める	陸軍記念日のお話、神社參拜、慰問文、慰問畫製作、發送、飛行機
	三月	五三 春	一日と一九	野山に出で、暖い春の訪れに接し、その喜びを味ふと共に、第一學年の終りに近い事を意識せしめ自ら考察し、學ぶ心掛けを持たしめる	初春の野外觀察、うぐひす、つくし、草つみ、例身體檢査
	三月	五四 小國民	一一	第一學年の終りに當つて入學以來の一ケ年間を回想し小國民としての本分を自覺せしめ、第二學年に進む心構へを持たしめる	學校へ上つてから今までの回想、小國民、成等の整理、修了式

題目指導系統表

要項	連絡教科 國民科 ヨイコドモ	國民科 ヨミカタ	理數科 カズノホン	理數科 自然の觀察	體鍊科 體操	藝能科 ウタノホン	藝能科 テホン	藝能科 エノホン	儀式行事 日	儀式行事
ガクカウの歌、學校の庭、砂 ジオ體操、大詔奉戴日、學校 校庭の遊戲、記念の木、折 園、紙鐵砲遊び、發音練習、 鳩、駒犬の觀察、公園 に關する注意、春の野山、納 足の繪、砂遊び 日の丸の旗、拜賀式の禮法、 隊さん	一 ガクカウ 二 センセイ 三 テンチヤウセツ	一 ラジオ體操 二 校庭の遊戲 三 アカイアサヒ 四 ハトコイ 五 コマイヌサン 六 ヒノマルノハタ 七 ヘイタイサン	春の野 春の野 紙とクレヨン	一 學校の庭 二 記念の木 三 庭の花 四 庭の動物 五 春の野	四月教材 同右 同右 同右 同右	一 ガクカウ 二 ヒノマル キミガヨ	習字用具の名稱と取扱ひ方 習字用具の名稱と取扱ひ方	1 イロ 2 カミデッパウ 3 タイサウ 4 ハタ 5 ハタヲアゲル	一日 三日 八日 二九日	入學式 神武天皇祭 上巳の節句(雛祭) 大詔奉戴日 月次遠足 展望道路廻り 靖國神社祭 天長節 身體檢査
ぢやくしの採集飼育、觀察 生、看護婦の先生、姿勢、運 、發芽狀態の觀察、學校附近 の山野、草花とり、花ならべ、 車、遠足の繪とお話、砂場遊 の觀察、石けり遊び、松葉遊 、軍艦、飛行機、水兵の繪、 小運動會、言語訓練	四 トモダチ	八 アヒル 九 ハシレハシレ 十 ココマデオイデ 十一 カミフウセン 十二 ウシヒバリ 十三 ユフヤケ 十四 オツキサマ 十五 オハヤウゴザイマス 十六 ホンダイサムサン 十七 エヲカキマシタ 十八 サヤウナラ タダイマ 十九 ヒカウキ	おはじき 兵隊ごつこ 運動會 數字の手本 石けり遊び 松葉遊び 豆	六 春の種まき 七 木の葉遊び 九 草花植え 八 草花とり	五月教材 同右 同右 同右 同右 同右	三 ユフヤケコヤケ 四 エンソク	初步教材「ヨコ」の練習 「テン」と「タテ」の練習	8 キレイナハナ 9 ハナヲナラベル 10 グンカン 11 スキヘイサン	八日 二二日 二七日	大詔奉戴日 月次遠足 窪寺觀音 青少年學徒ニ賜リタル勅語御下賜記念日 海軍記念日 小運動會
運動會、カブト作り、遊戲競 觀察、製作、數字指導、お客 小川の動物、かくれんぼ、鬼 能力測定、お天氣の觀察、入 〳〵の果物 、遠足の話し方、圖畫、綴り 、ホタルの飼育、いろ〳〵の おさかな、果物、すきなもの	五 ゲンキヨク 六 タベモノ	二十 オツカヒ 二十一 デンワアソビ オキヤクアソビ 二十二 シリトリ 二十三 カクレンボ 二十四 キヲツケ 二十五 アメガヤミマシタ 二十六 イケニフネ 二十七 ホタル	初夏の水邊 時計 兎 鬼ごつこ ひよこ 學校歸り	一〇 池や小川の動物 一二 雨あがり 一一 麥畑と蟲とり 一〇 池や小川の動物	六月教材 同右 同右 同右 同右 同右	五 カクレンボ 六 ホタルコイ	「ナナメ」の練習 「タテ」「ヨコ」と「オレ」の「マル」の練習	6 カブト 7 コヒノボリ 12 オモチヤ 13 サンカクシカクナラベ 17 雨ガフル 15 ハシレジドウシヤ 14 クダモノ 16 木ノ葉 18 イロイロオサカナ	五日 八日 一〇日 一一日	端午の節句 大詔奉戴日 時の記念日 入梅 夏至 懇話會 月次遠足 丹波島川原
、お供へ物、七夕送り、七夕 社參拜、お宮の石段、戰地の 問書の製作發送 慰問文、慰問畫の製作、發送 つばめ、月例身體檢査 、綴り方、お墓掃除、夕立、 玉 に對する心構、諸注意、第一	七 ナツヤスミ	二十八 タナバタ 三十 ココ、ハドコノホソミチダ 三十一 オ宮ノ石段 三十二 アサガホ 三十三 オハカサウヂ 三十五 ユフダチ 三十六 ニジ	七夕 飛行機、戰車 猿蟹合戰 風車 つばめ 色板並べ	一四 朝顔 一三 しやぼん玉遊び	七月教材 同右 同右 同右 同右 同右	七 ウミ	初步教材總練習 初步教材總練習	20 オフネ 19 ブランコ 22 オニハノダウグ 21 センセイ	七日 八日 一三日 一四日 二〇日	七夕 支那事變記念日 大詔奉戴日 祇園祭 海の記念日 夏期修養會 第一學期終業式 夏休み
品の展覽、第二學期始業式、 の眺望、箱庭協同製作 觀察、コスモスの花、果物、 參拜、お彼岸のお話、春季皇 旗 リスズメ、モモタラウ、お話 、言語の修練、劇	八 キマリヨク 九 ツヨイコ	三十八 川遊ビ 三十九 メダカサン 二十九 ハコニハ 三十四 花ツミ 三十七 アリ 四十 トビトカメ 四十一 シタキリスズメ 四十三 モモタラウ 四十四 カタカナ圖表	朝顔ととんぼ	一五 ばつたとり	九月教材 同右 同右 同右 同右	八 オウマ 十 モモタラウ	ハト	23 水遊ビ 1 イロ 4 ハタ 24 カハイイトリ 27 モモタラウ	八日 九日 一〇日 一七日 二〇日 一八日 二三日	第二學期始業式 二百十日 大詔奉戴日 明治天皇行幸記念日 城山縣社祭 加茂神社祭 月次遠足 ブランド藥師 航空記念日 滿洲事變記念日 秋季皇靈祭 お彼岸
、御馳走の製作、お月見の繪、 祭、山上の展望、遠足の圖畫 り、秋の種播き、收穫 ケッコ、ハトポッポ、ウンド 月例身體檢査 節拜賀式、君が代、音樂會練	十 ウンドウクワイ 十一 オコメ 十二 オトウ	四十二 オ月サマ 一 山ノ上 二 アシタハウンドウクワイ 三 ウサギトカメ 四 ラジオノコトバ	卵、梨、お手玉、おはじき いも掘り かけつこ 計算練習	一六、お月樣 一七、うさぎ 一八、野菜と果物 一九、秋の種播き	十月教材 同右 同右 同右 同右	九 オ月サマ 十一 タネマキ 十二 ハトポッポ キミガヨ	ヒノマル キミガヨ	25 オツキミ 26 オツキミノゴチサウ 2 オヒハヒノチヤウチン 3 トリキ 1 オウチノ人 4 ウンドウクワイ 5 ウンドウ	一日 八日 九日 九日 一三日 二五日 三〇日	月次遠足 阿彌陀堂 妻科神社祭 大詔奉戴日 湯福神社祭 重陽の節句 戊申詔書御下賜記念日 記念運動會 教育勅語御下賜記念日



つたのは、綜合授業の國民學校教育上、その占むる位置とその任務の大なるを思ひ、それを十分に全からしめたかつたがためである。

2　教科書の精神に立ち、その教材内容を十分顧慮することが重要である。綜合授業の依るべき教科書が示されてゐない今日、初等科第一學年に對する唯一箇年の綜合授業の實踐に臨むに當つて、先づ第一に教材の基準を教科書に求むる外はない。卽ち、現在初等科第一學年に配當されてゐる一切の教科・科目の編制を悉く解體し、教科書の持つ要素の體系を一旦ほぐして、これをその生れ出た原本の姿である兒童の生活環境としての鄉土と兒童生活に還元し、それ等の要素の比較的多く含まれた生活題目を作り、これによつて授業の縱の組織を確立したのである。

3　尙、序を以て、學級の編制について述べるならば、理論としては、兒童數の問題、兒童の素質の問題等が論ぜられねばならぬのであるが、當校に於ては、綜合的な授業が入學當初一學期位は何處の學校に於ても行はるべきであるとされてゐる實狀と國民學校の綜合授業の特質に鑑みて、一般學級と全く同樣な組成に於て試みたのである。卽ち、一般學級と全く同樣な組成に於て試みたのである。卽ち、兒童の素質、家庭環境等より見て他學級と何等差別をしない兒童四十名を定員とし、擔任教師も訓導一名がこれに當つたのである。唯教科擔任訓導は一切この組の指導に當らず、總ての指導が擔任訓導の一人によつて進められたのである。

第四節　綜合授業の指導計畫

第二節に於て述べたやうに、「鄉土」と「兒童の生活」とを方法的な原理として、これに基づいて、第三節に於ては、生活題目の選定と排列とをなしこゝに綜合授業の客觀的な組織體系を樹立することが出來たのである。今やわれわれは、この客觀的な體系を指導の問題に移し、主體的に把握して、漸次授業面に導かねばならぬ時に迫まられた。

一　綜合授業指導計畫表

綜合授業の指導單元である、「生活題目」を實際授業に移すためには尙なかなかの準備と手順を要するのである。

即ち指導すべき「生活題目」について、どんな目的を持つて、如何なる事項を、如何にして、何處で指導するか等の問題を豫め明確にしておかなければならぬ。そこで當校では、「綜合授業指導計畫表」を印刷に附し、各題目毎にかゝる研究をなし、これに記入して行くのである。今、次にかゝぐる該表の備へる研究事項について略説すれば次の通りである。

1　題　目

指導する「生活題目」を記入する。

2　要　旨

指導する「生活題目」の取扱の目的であるが、廣範圍な生活題目を通じて、錬成されるもの丶單一ならざるは言ふまでもない。故に主として、錬成せんとする目標について明らかにし、それをこゝに記述するのである。

3　指導要項

「生活題目」が含む生活要素は多々あるであらうが、その中に於て、特に要旨を身につけさせる目的から必要なる生活事項即ち指導すべき生活の要項を決定して、悉く記載するのである。これが、實際授業に於ては、兒童の生活する事柄であり、毎時間の學習する事項は生活の展開に即して錬成されるのである。

4　取扱場所

本欄は指導要項の取扱場所を明らかにしておく所である。例へば、校庭とか、教室とか、花畑とか、町とか、△△川原とかいふやうに具體的に記載するのである。

5　豫定時間

一指導事項の取扱時間を指示しておくのである。かくて、生活が、指導が、計畫的具案的に展開されるのである。

6　準備事項

「生活題目」の含む、指導すべき「指導要項」について、豫め準備すべきもの、事柄について、遺漏なく準備しておくことを示す欄に外ならぬ。準備品、豫備調査、實地踏査等一切の準備が明らかにされる筈である。

7　連絡教科科目

初等科第一學年の教科目中、本「生活題目」の「指導要項」に連絡あるものを掲げるのであり、こゝに教師としては教科書教材を深く考慮する綿密なる用意を示すわけである。

8　同上題目及び主要事項

こゝには、上欄の連絡教科目中にある教材の題目名を記し、更にその教材と「生活題目」乃至は、指導要項との連絡上の主要なる事項に限つて、これを記載し、本題目取扱上の重要なる參考とするのである。國民學校の綜合授業の性質上この點に關する周到なる用意は最も肝要である。

綜合授業　指導計畫表

題目						
要旨						
指導要項	取扱場所	豫定時間	準備	連絡教科目	同上題目及主要事項	

かくて、「生活題目」を兒童は自己の生活として、全一的に生活しながら、その全體的な生活感興のうちに、その抽象面である生活の形成要素を習得する。教師としてはかかる抽象面に指導の要項を把住し、更にそれを取扱ふ場所、時間、準備について明確にし、教科書教材との關聯を明瞭にして、指導内容を確定し、主體的な研究を遂げたのであるが、更にこれを一週間の各週日に配當しなければならない。ここに、この研究を今一段、授業の實踐に近づけて、この指導事項を週日に配當しなければならぬ。

二　各週授業豫定表

各週の授業豫定表は、左記の通りであつて、その形式は普通の所謂時間表と大差ないものであるが、毎週異つたものを立案せねばならぬ所に特色がある。表には先づ、何月第何週を記入し、曜日の上欄に月日を記入するのである。而して、「生活題目」の「指導要項」の豫定時間に從つて、その「指導要項」を、週日の日々の各時に配當して、各週毎の授業豫定表を作成し、日々の授業を進めてゆくのである。記入の仕方は、「生活題目」の番號と、その「生活題目」が有つ「指導要項」を示すために、その「指導要項」の番號を記入しておくのである。例へば、月曜の第一時に、第四十八題目の節分の第二の指導要項「豆の數」について指導する時には、月曜第一時の欄に四八ノ二と記載して、その意味を表はすやうにして、繁雜を避けた次第である。備考欄には、その週の行事、その他本生活題目指導と深い關係にある事項を書くことにした。

第　月　週授業豫定表

月日曜／時	1	2	3	4	備考
月					
火					
水					
木					
金					
土					

三　授業案の作成

以上の操作は前の週迄の間に研究樹立すべき綜合授業の具體的計畫案である。次にはこの諸計畫に基づいて、更に毎時の授業案を作成して、教室に臨まなければならぬことは一般の教科指導と同樣である。

以上大略「生活題目」の系統表から、一日の授業に展開する迄に教師のなすべき研究の手順を述べて、綜合授業の計畫について明らかにして來たわれわれは、次にかゝる計畫に基づく授業の實際について報告することにしよう。

而して、この週授業豫定表の作成は前の週の土曜日に於いて完了し、一切の用意をととのへておくやうにしたのである。

尙、ここに一つ問題となることは、綜合授業の性質上、取扱場所を野外とする場合が相當に多いのであるが、雨天に際會した場合、その野外授業を室内に變更出來るやうに、豫め常に計畫しておくことが必要である。

第三章　綜合授業の實際

家庭における全一的生活の中に、自ら全體的綜合學習を營んでゐた兒童を、國民學校初等科第一學年に迎へてその錬成を遂げるために、彼等の發達段階と特殊的環境とに最も適合してゐる教授形態、綜合授業の研究を試み、われわれはここに綜合授業の客觀的體系の樹立を試みて來た。そして、兒童生活の原理と鄕土の原理をその方法的原理として、生活題目を選擇決定し、而もその生活題目の中に初等科第一學年の教科書全教材の主要事項を抱括せしめて、ここにその排列　統を完了し、綜合授業の教材の客觀的體系を確立した。更にこの體系の構成要素である生活題目の一つ一つを教壇上の實踐に展開するために、その指導計畫表を作　し、更にこれを週授業豫定表に配當して、漸次方法論的に把握して來たのである。さて、われわれはここに確立した綜合授業の客觀的體系を前章に述べた方法論に基づいて主體的に展開したのであるが、今や生活題目指導の實踐の報告へ進まなければならぬ。而して、五十四題目全體に亘る指導の實踐を報告して大方の參考に供すべきであるが、今はその繁雜を避けて、取扱の時期及び題目の性質の上から特色のある數個の生活題目について、その指導の實際を述べて、當校綜合授業の一般を了解するの資としたいのである。

卽ち、ここに指導の實際を報告せんとする教材は以下七つの生活題目についてである。

○私タチノ學校
○天長節
○丹波島川原
○七夕
○お天氣
○善光寺
○お客樣

○私タチノ學校

一　綜合授業指導計畫表

綜合授業　第一指導計畫表

題目	一　私タチノ學校	要旨	新入學の當初において學校生活の喜びと樂しみを十分に味はせながら學校生活の第一歩を力強く踏み出させる。
指導要項	取扱場所	豫定時間	準備
(一)入學式	講堂、教室	2	長野市地圖 名簿
(二)學校案内	學校	4	バケツ
水飲所 便所 下駄箱 傘棚	同 同 同 同		
(三)ガクカウの歌	教室	1	
(四)學校の庭	校庭	1.5	鷄の餌
(五)砂場遊び	校庭	0.5	
(六)學用品	教室	2	イロ紙 繪用紙
(七)ラジオ體操	運動場、教室	1.5	オルガン
(八)大詔奉戴日	講堂、教室	1	
(九)學校の先生	教室	1.5	
(十)教室の勉强	教室	1	
(十一)校庭の遊戲	運動場、教室	2	石灰
(十二)記念の木	校庭	2	根掘り、バケツ、ヤマザクラ

豫定時間	連絡教科目	同上題目及び主要事項
2	修身	「ガクカウ」よろこんで毎日登校するやうに導く。
4	修身	「ガクカウ」 新入學の喜びのうちに學校生活についての適當な心構へを呼びおこし、適切な態度をとらしめる。 便所・下駄箱・傘棚の清潔整頓
	音樂	「ガクカウ」 新入學の喜びを歌はせ、學校生活のたのしさを感得させる
	自然の觀察	「學校の庭」 學校の草木、飼つてゐる動物を觀察させて自然に學ぶ第一歩を踏み出させる。
	習字	「イロ」十一色の色名、色相を知らせ色彩感覺を練りクレヨンについて指導する 「習字用具の名稱及びその取り扱ひ方」
	國語・體操	「ラジオ體操」 入學の喜び、春のたのしさ、ラジオ體操の話し合ひ、一二三四、五六七八の發音 イ母音の發音指導
	修身	「センセイ」 先生に親しみ、教に從順になる心構を作る。
	修身	「ガクカウ」 教室への出入、教室の姿勢を教へる。
	國語・體操	「校庭の遊戲」 遊戲の話し合ひ、「オモシロイナ」「ウレシイナ」「エライナ」の發音指導 「正常歩」
	自然の觀察	「記念の木」 入學記念の木を植ゑさせ學校に親しみ樹木を愛しむ氣風を養ふ。

奉安殿に向つての禮法

(十二) 折紙（飛行機）	教室	1 新聞紙
	圖畫・工作	「カミデッパウ」遊戯的な製作を通して手指の初歩的な練磨をなし製作への興味を喚起する。

二 週授業豫定表

(3)

四月第一週授業豫定表

日	月	火	水	木	金	土
曜／時			1	2	3	4
1			一ノ入學式(一)	一ノ學校案(二)内		一ノ學校案(二)内
2			一ノ入學式(一)	一ノ學校案(二)内		一ノ學校案(二)内
3						
備考			入學式	始業式	神武天皇祭	

四月第二週授業豫定表

日	月	火	水	木	金	土
曜／時	6	7	8	9	10	11
1	一ノ(三)ガクカウの歌	一ノ(七)ラジオ體操	一ノ(八)大詔奉戴日	一ノ(六)學用品	一ノ(十)教室の勉強	一ノ(十一)校庭の遊戯
2	一ノ(四)學校の庭 一ノ(五)砂場遊び	一ノ(七)ラジオ體操 一ノ(四)學校の庭	一ノ(九)學校の先生	一ノ(六)學用品	一ノ(十一)校庭の遊戯	一ノ(十二)折紙
3						
備考			大詔奉戴日			

四月第三週教授豫定表

日	月	火	水	木	金	土
曜／時	12					
1	一ノ(十二)記念の木					
2	一ノ(十二)記念の木					
3						
備考						

三 指導の狀況

（一） 入學式（四月一日水）

入學式に參加して、國民學校入學の喜びを深め、毎日喜んで登校するやうに導くのが主眼である。

入學式

國民學校一年生として、鞄・帽子・徽章などの道具を身につけて、學校の門をくぐる日を、親も子もどんなに待つたことであらう。

「これから國民學校の生徒だよ。」と父母に言はれる度に、國民學校の生徒となるのだといふ自覺が彼等の生活の光となつて、家庭における言動まで自然注意する樣になり、新しく自分の前に開けてくる學校生活への希望と喜びに、小さな胸ををどらせて今日の日を待ちに待つてゐたことであらう。子供のこの希望・喜びをそのまゝに受けて、學校生活の基礎的な修練をなし、力強い第一歩を踏み出させるやうに導かねばならない。しかしこの新しい生活への希望と同時に又環境の變化に對する相當の緊張と不安があることであらう。さうした不安を除去し、「私タチノ學校」として親しみ、喜んで登校し、課業に生々と浸れるやうに導かねばならない。

かうした氣持で、机・下駄箱・傘棚に兒童の姓名を書いた紙を貼つたり、その他用意萬端整へて今日の入學式の日を待構へてゐたのである。

父兄兒童を迎へる 入學の喜びに溢れた兒童を連れて子供達の父兄は校門をくゞり入口に來る。入口に兒童の姓名が組別に掲示されてゐて、自分の子供はどの級であるかを知る。初一擔任者は自分の級の受付に待つてゐて、先づ二月の入學兒童父兄懇話會の際に渡した入學前の諸調査の用紙を提出してもらひ名簿と共に用意してある長野市の地圖に住所を記入してもらふ。擔任は地圖に示された住所と父兄の言語動作に先づ始めて見る子供の環境について最初の印象を受けるのである。

擔任者は、喜びを面に浮べて、元氣に滿ちた樣子でくる子供、これから自分達の生活の場となる校舍の中をさも珍らしさうに、きよろ〳〵眺めてくる子供、恥しさうに母親の袖にまとはりついて來る子供、それ〴〵の子供を名簿と

見較べて姓名と面とを結びつけながら迎へたのである。受付が済むと、他の先生が順次控室へと案内し、會式前三十分の頃より子供を講堂に導き學級別に着席せしめ、父兄はその後方に座を占めて、定刻九時より入學式が擧行されたのである。

入學式次第

1　一同起立　2　敬　禮　3　君が代奉唱　4　宮城遙拜
5　護國の英靈に對する感謝出征將兵の武運長久祈願默禱　6　學校長挨拶　7　擔任紹介　8　敬　禮

教室へ　式が終ると、二列に並ばせて教室へ導く。途中下駄箱へ下駄を入れて教室に至る。教室では、先づ自分の帽子掛に帽子をかけ、自分の名前の貼られた席に子供が自分で着くやうにする。出來ない者はその父兄と共に手傳つて着席させ、全部し終つたところで「よく出來ました。」とほめてやる。席に着いた子供達は話一つせず默つておとなしく座つてゐる。親の手を離れて誰も知つた者のない中に獨りで坐つて、あたりを見廻してゐる子供達に、にこやかに「みなさん、おめでたう。今日からみなさんは附屬國民學校一年生です。」と祝ひの言葉をいふ。長野師範附屬國民學校は立派なたのしい學校であることを話し、一齊に學校の名を繰返して言はせる。次ぎに組の名前・擔任の名前を教へて、これも一齊に言はせ、學校の先生をおとうさんやおかあさんのやうに思つてこれから勉強をしたり、遊んだりしませうと話し、最後に今日からみなさんは親切なよいお友達が澤山出來ました。こ　からみなさんの名前を呼ぶから元氣よく「ハイ」と返事をして下さいと言つて指名點呼をする。「活潑な聲」「元氣な聲」「張りのある聲」「突拍子もない叫び聲」「やさしい聲」「弱々しい聲」この中に混つて、やうやく聞きとられるばかりの「かすかな聲」。私はその一つ一つの聲に顏を向けながら、この返事を通しただけでも、こゝに集る四十名の兒童が夫々の個性を持つてゐて全く一樣でないことを思つた。そして、又、思ふ、この夫々の個性を持つ兒童をして皇國民たらしむべき明日からの教育經營を。

次ぎに、父兄に向かつて次の話をする。

「今日迄非常な御苦心を以て御家庭に於て養育された、國の寶ともいふべき大切な御子樣方をお預りすることになりました。私は上御一人の御役にたつべき國民を鍊成するために及ばずながら懸命に努力するつもりであります。それについても御家庭の協力を望んで止みません。入學當初は殊に家庭との連絡が緊要であり、教育の効果は學校家庭協力の上に成るものであるから是非御協力をお願ひいたします。」と語り、最後に子供達に「明日からは一人で學校へ元氣よく來ませう。」と約束し、父兄に「子供について特に何かお聞きして置いた方がよいことのある方はお殘り願ひ度い。」と話して、解散する。

個別的に父兄より依頼のあつた子供は次の通りである。

○疲れ易く、疲れた時は、ものが二重に見え、眼が一所へ集つて樣子がをかしくなるといふ子供。
○耳が遠くて、折々人の言ふことを聞き損ずるといふ子供。
○足が內側へ曲つてゐるから體操の際など注意してもらひたいといふ子供。
○小さい時から虛弱で今も病氣し易い子供。
○入學前に重い病氣をして今も注意してゐるといふ子供。
○便所の近いもの。

身體的故障の多いのに驚いた。學校には健康相談日があり、兒童の心身養護について、校醫の先生が特に家庭と連絡をなさつて下さるので、今後のことについてはその場合に一緒に方法を考へて行きたいと思ふことを話した。尙、

○親戚近隣の人にものを言はない故學校でものが言へるかどうか心配だといふ子供。
○非常に氣むらで我儘で困つてゐるといふ子供。

などの話があり、運動靴や長靴の配給があつたら心配して頂きたい。その他轉居の話などして父兄は歸へられた。

第一日（四月二日木）

兒童が學校生活に入つて、先づ必要な便所・水飲場・下駄箱等に案內して、その使ひ方を教へ學校生活に馴れしめ

るのが本日の主眼である。

(二) 學校案内

兒童が新しい學校生活に入つてすぐにも必要なのは、便所・水飲場・傘棚・下駄箱等である。今日は先づさうしたところに案内して、「私タチノ學校」に於て安心して生活し得るやうにすると共に、そこにおける正しい躾をなさうとするのである。

一人で、學校へ始めて來た子供達は、定められた自分の席に着いてじつとしてゐた。たゞ一人男の子が立つて指で腰掛を數へてゐる。自分達の組は幾人か知らうとしてゐるらしい。

「いくつあつたね。」と尋ねると

「四十人。」と答へる。

「ほう、さうですか。澤山ですね。」といひながら、私は「腰掛の數を知つて人數を數へ得たのに驚き、「組のお友達はみんなで幾人でせうね。」と全部に問ひかける。

しかし、腰掛の數によつて人數を知る、やや飛躍的な推理を全體に求めることは無理であらう。多くの子供はこの問に對して無反應であつた。

「私達の組のお友達は四十人もゐます。これから、みなさんの名前をよびますから元氣よく返事をして下さい。」と點呼する。

男子五人が大きく力強い返事をした。返事が大變立派に出來たことをほめてやる。男子の中に一人、女子に三人、大勢の前で返事するのがどんなに恥しいのか、口を僅かに動かしたのみで、聲の聞きとれぬ程の者があつた。先づ自分の思ふことを安心して言ひ得るやうにしてやらなければならない。この子供達にさうさせるためには非常な忍耐と時間を要することゝ思つた。

講堂に於て始業式があつて上級生への紹介が濟んだ。そのあと、先づ水飲場へ案内する。

水飲場　水飲場の前へ子供を二列に並べて、自由に水道で用を足させる。どの子供も水道の栓は扱ひなれてゐるのか栓のひねり方に困る者はないが、必要に應じた適當な量の水を使ふことと、使用後栓をしつかり止めて置くことの出來ない者が非常に多い。手を洗つたり、口を濯ぐ時の水の出し方、使用後水が少しも漏らないやうに栓をしつかりしめることなどやつて見せ、又二三名にやらせてみて、次ぎに便所へ案内した。

便所　落着いて便所で用を足すことは子供には非常に困難らしい。便所は出來るだけ早く用を足す樣に心得てゐる。かうした子供達の樣子を見てゐて、先づしつかり足場を定めて、落着いて用を足し、お便所は汚してはならないことを話す。男子の大便所や女子の大小便所使用の折はノックをすること、中で答へのない時、靜かに戸をあけて入り、用を足して後戸を開け放して置かぬやうにすることを實際に行はせて見る。戸の叩き方も十人十いろで指導を要するものである。先に水道を使用した時に餘分な水をバケツへ受けて置いたのでそれで手を洗ひ、きれいに手を拭ふことを指導して下駄箱へ行つた。

下駄箱　自分の手で、自分の下駄を整頓することを躾けられてゐる子供は殆んどない。先づ大勢の者が一時に一ケ所の下駄箱に行くので混雜する。順番にした方が早いことを話して後一人々々に下駄を同じ向きに整頓させる。下駄や靴を教へられたやうに同じ向きに置けぬ者もゐる。「やあ〳〵まちがつてる」とはやしてゐる子供が眼についた。「みんな仲のよい友達であるから、間違へてゐたら親切に教へてやりませう。」と話し、下駄箱の自分達の學級名と、自分の下駄は上から何段目で右から幾番目かといふやうなことを數へさせ、自分の氏名を讀ませる。こんな所でも「よみかた」や算數の指導が出來るのである。

傘棚についても、大體同樣に指導をなし、雨の日に更に具體的な躾をすることにして本日の課業を終へた。

下駄箱に自分の靴や下駄を定められたやうに整頓して入れることは容易なやうであるが、これを身につけることは決して一度や二度の注意で行はれるものではない。下駄箱について一學期に指導を行つた回數は、四回で下駄の出し入れについて最も多く注意を受けた子供は、八回である。

第二日（四月四日土）

今日は運動場に遊ばせて、新しい環境に馴れしめ、奉安所を拜せしめて、自分達は常に　陛下の御前で學ぶのであることを自覺せしむるのである。

昨日は神武天皇祭である。一日の休日も長く休んだやうな感じがする。朝早く登校する。子供も大半は來てゐる。子供達はじつと自分の席について動かないでゐる。默つてゐる。「少しぐづかな」と心配にもなる。この子供達に元氣を出させること、伸び〳〵と活動させてやることが大切と思ふ。先づ今日は、校庭に連れ出してやらう。次ぎに我が校教育の中心である奉安所と教室の中心ともいふべき宮城の御寫眞を拜して　陛下の御前で、よき皇國民となるため日々學ぶのであることを子供ながら理會出來得るやう躾をすることが大切である。先づ指名に對して「ハイ」の返事をするやうに指導しながら、「ハイ」の返事にあらはれてくる子供の活氣が教室に漲るやうにと導く。而し仲々子供の調子は出て來ない。先生と子供、子供と子供との交流は先づ言葉を通じてなされる。自由に話し合へるやうにすることが第一の仕事である。

最初の言葉　教室を連れ出す。下駄箱で暫く列がくづれると、一人が、

「先生、おしつこ。」と先生の眼を見上げる。これがこの子の先生に語りかけた最初の言葉だと思つてゐると、續いて、

「おしつこまつて來ていい。」

「先生、おしつこして來る。」

「先生、お便所へ行つて來ていい。」

と、それ〴〵の子供の調子を言葉に表はして便所へ行つて來て良いかと言葉をかけて來る。

「みなさん、大勢お便所へ行きたいやうですから、一緒にお便所の方へ廻つて行きませう。一昨日お話したやうに、上手にお便所を使ひませう。」と言つて便所へ廻り、一通り便所が濟んだところで、子供によかつたところと惡かつたところを言はせて、再び使用について指導して校庭に出る。

運動場　まだ子供達の胸がとけて、言葉がすら〳〵出ないのか、列は靜かに續いて來る。歩いてゐる中にだん〳〵元氣が出て、凍つた氷がとけ始めるやうに列中から歌が起る。

「雀の學校の先生は……。」と歌ふ。子供達の心をなほほぐすやうにと廣い運動場を曲りくねつて歩く、曲つた拍子に前の者と後の者と顏が合ふ。顏を見合はせてはにこ〳〵と笑ふ。

「げじ〳〵山越えて、げじ〳〵山越えて。」と節をつけて歌ひ出す。一種のリズムをもつ聲がだん〳〵大きくなる。

廣い運動場、（多くの子供は今迄にこんなに廣い運動場でこんな多人數で遊んだことはないだらう。）で鬼ごつこをする。「さあ、鬼ごつこしよう。」と集める。鬼になつた子は一番始めに先生を目あてに追つてくる。一緒に遊ぶことによつて急に親しくなる。とう〳〵鬼になつた先生の後から、

「やあ　やあ。」と手を叩く男の子もゐる。子供達は急に氣が樂になつたやうである。而し、十人程がこの遊びに加はらないで、砂いぢりをしたり、默つて見てゐる。その中に一人男の子がしく〳〵泣いてゐる。くつろぎかけた氣分も又凝りかけるやうな氣がした。いろいろ聞いてもだまつてたゞ泣いてゐる。今日はじつと動かないでゐると寒さを感ずるやうな日である。空には悠々と鳶が輪を畫いてゐる。「とんび〳〵、みを舞つて見せろ。」と子供達がうたふ。

奉安所　手を洗はせ、服裝を正して、奉安所に導く。奉安所の前に整列して最敬禮をする。「學校で一番大切なところです。知つてゐますか。」

「奉安所。」と二三元氣よく答へる。

「天皇陛下がおいでになる。」と又いふ。

「さうです。天皇陛下、皇后陛下のお寫眞がおをさめしてあるのです。私達は毎日天皇陛下、皇后陛下の御前で勉強出來るのです。しつかりやつてよい子になりませう。」と話して、しばらく奉安所を拜してゐると、

「あの黃色いものなに。」と不意に聞いた子供がある。すると直ぐ「菊。」と他の子供がいふ。正面に菊花の御紋章がある。

尊く輝いてゐる。また讀いて、「菊の御紋」と言ふ子がある。

「さうです。菊の御紋です。みなさんのおうちにも紋があるでせう。菊は尊い皇室の御紋です。」と御紋章の話をし、登校下校の際奉安所に對し奉つての禮法を教へ、あたりをけがしてはならないことを話して、教室へ歸る。

教　室　教室では宮城のお寫眞を拜しながら、

一　學校は兒童が立派な國民に成るために設けられた所である。（ヨイコドモ上教師用四頁）

一　私達は常に兩陛下の御前で學ぶのであること。

一　宮城のお寫眞に對し奉つて、常に愼み深く、容儀を正して學習に當らねばならないこと。

を話し、教室内に於ける學習態度として次のことを話したり、範を示して行はせた。

一　朝、始業の時と課業を終へて下校の時、宮城のお寫眞に對し奉つて最敬禮をすること、その最敬禮の仕方（ヨイコドモ上教師用一五頁）

一　教室出入の際正しくお寫眞に向つて禮をすること、その禮の仕方（ヨイコドモ上教師用二二頁）

一　教室内の擧動は愼み深くして、飛んだり騒いだりしてはならないこと。

一　授業中雜談したり、みだりに自分の席を離れたりなどしない。（ヨイコドモ上教師用八頁）

一　常に正しい姿勢で學習に當ること。

1　腰掛けた時の姿勢（ヨイコドモ上教師用七頁）

2　立つてゐる時の姿勢（ヨイコドモ上教師用八頁）

第二日（四月六日月）

ガクカウの歌をうたひ、砂場に遊び、學校の庭の花の下に遊ばせて、學校生活に對する喜びを深め、自然に親しましめるのが今日の主眼である。

（三）「ガクカウ」の歌

今日は寒さを強く感ずる。子供は相變らずおとなしく席についてゐる。昨日は隨分激しい風が吹いた。硝子窓の隙間からほこりが舞ひ込んで、机の上はほこりでざら〳〵してゐる。「机のふたを指でこすつてごらん。」指で何か書きながら「ほこり、」と子供がいふ。「そのほこりはどうしたのでせう。」「はいつて來た。昨日、風吹いた。」「昨日とても風吹いたね。みなさんのおうちではどうでした。」「あのね、昨日、木が折れた。」「昨日、火事、あつた。」子供の話は斷片的である。しかし一人が言ふと他の子供がみんな聞いてゐる。

子供の机を拭いてやる。ほこりを拭きとつたあとを子供達は指でこすつてゐる。

「昨日のやうに風が吹いても、學校へ一人でこられますか。」

「僕來る。」「僕も。」みんな元氣よく手をあげる。

「ほう、それはえらい。皆さんは國民學校一年生ですね。」

國民學校一年生の唱歌の曲をオルガンでひくと知つてゐる者もあつて歌ひ出す。三回程歌ふ中に全體、調子に乘つて歌ふ。

（四）學　校　の　庭

自然の觀察に校庭へ連れて出る。皆寒さうにちゞかんで歩く。國民學校の歌を歌ふと、ついて歌ひ出した。東校舎に沿つた櫻は校舎の側だけ開き始めてゐる。それを見るために木の下へ行く、子供達は開き遲れてゐる櫻の蕾を見上げようともしない。

校庭の木の芽などを見ながら、石垣や危險なところでは、かうしたところに立ち寄らないやうに注意して（ヨイコドモ上教師用六頁）講堂南側の小さな櫻の木のそばに來る。

「さきんとこ、紅いわ」と蕾の先端がほころびそめて、やゝ紅味があつたのを指して一人がいふ。

「ほう、先のとこ紅いね。」と皆に指さす。

講堂の西側の櫻は八分は開いてゐる。櫻の木を巻いて輪を作つた。

「きれいだなあー。」と一人、大聲で叫んだ。

「きれいだなあー。」と先生も同じやうな調子で大聲を出すと、直ぐ子供達も

「きれいだなあー。」「きれいだなあ。」と叫ぶ。櫻を見上げ、口をそろへて、

「きれいだなあー。」と呼ばす。雲をはづれた太陽が明かるく花に映じて美しい。キレーのエの長母音をはつきり出させ、ナアー、で口を大く開いてアーとのばさせるやうに幾度か呼んだ。聲を出してゐると子供達は元氣になる。櫻の前でつぼんだ開いたをして遊ぶ。櫻が滿開となつたら、又木の下で遊ぶことを約束して砂場へ來る。

(五) 砂場遊び

「さあ砂場で遊そびなさい」といふ。砂に手をつけようともしない子供がある。

「さあ、やらう。」と先生が先に立つて始める。砂を高く積むもの、砂を掬るもの、子供達の手は上と下への二方向へ動いてゐる。みんな一人で思ひ思ひのことをしてゐる。

こちらで土をほつて、掘り取つた土でふちのやうなものを作つてゐる。

「Aさん何を作るね。」

「風呂だ。」といふ。とKが向かふから來て見てゐて、

「何だ、こんなもの。」と言つて、又向かふへ行く。この二人の男の子は入學以來特に目立つて來た子供だ。

子供と一緒に砂を盛り上げてゐると、

「先生、あの山作らう。」とLが旭山を指す。とLは一向似てもつかない旭山を作り上げた。その中に

「木を植ゑよう。」と言つて棒や草をやたらに立てゝゐる。滑り臺で遊んでゐた子供達も集つて來てトンネルを作る。

「もうちきだ、うんと掘れ。」

「ほうれ、出來たトンネル。」と見てゐる。近づいて、

「トンネル、うまく出來たね。」とほめてやると、Nが來て、

「こんなトンネル、明るくて駄目だ。」「こんなトンネルあるか。」「おめえ、汽車に乘つたこと、ないな。」「鐵橋、曲つてるか。」と口を出してゐる。別な方では、

「一つ、こゝトンネル作るかな。」と一生懸命作つてゐる。

山を作つてゐる方では、

「花を採つて來るかな。」と花びらを集めてまく。山が一杯花で埋まる。

「いいですな。」と自分でほめてゐる。隣では山の上から白い砂をかけながら、

「お砂糖、まきませうかな。」といふ。今度は「木を持つてきておくれ。」と二人で協同しながら、山へ枯枝の植林を始めた。

こつちでは男の子が一人硝子と木を持つてきて、

「裝甲自動車。」と獨言言ひながら作つてゐる。

硝子を入れ、「樣子を見るところだ。」といひ木の大砲も作つてゐる。みんなたのしさうである。しかし砂場あそびにあきて、滑り臺や土手で遊んでゐる者もある。同じことを全部のものがそろつては出來ないらしい。

教科書と下校の指導　水道で手を洗ひ、教室へ入る。席に入ると、「先生、勉強しよう。」と女の子が突然言ふ。勉強は教科書を讀むことだと思つてゐる。それにしても子供はかうした學習意欲をもつて入學して來たのである。

「さあやりませう。御本を見ませうか。」と言ふと、如何にも嬉れしさうな顏をする者、パチ〳〵と手を叩く者がある。

「それではお道具を鞄からみんな出して机の上へ置きなさい。」

子供達の學用品は一切學校で用意して、適當なものを選擇して渡すことになつてゐるので、子供の鞄には今教科書だけ入つてゐる。出した教科書の數を調べてゐる者がある。そこで全部に幾冊か數へさす。六冊の者が大部分であ

る。數へられない者もゐて、隣の子供と一緒に調べてやる。

「僕五冊しかない。」と不安さうに言ふ者もゐる。

「それでは御本が揃つてゐるか見ませう。」

「ヨイコドモ。」といふと、「ヨイコドモ」と口々に言ひながら取り出す。見つからない子供は隣で見てやつてゐる。

「ヨイコドモ出ましたか。」「えゝ。」

次にヨミカタ、コトバノオケイコと順々に出して行く。エノホンと、ウタノホンどちらかの無い者が數名ゐる。テホンは殆んど手に入らないやうだが、上からゆづり受けて持つてゐる者が數名ある。テホンはまだ買はなくてよいことを話し、足りない教科書のある者にはそのことを書いた紙片を家庭へ持つて行くように渡す。子供には教科書がそろつてゐると安心させて

「ヨイコドモを見ませう。」と先づ表紙を見る。

「山羊」といひ、「鹿」などといふ者もあつたが、仲の良い山羊が三匹お話をしてゐる、といふことになつた。

もう表紙をめくつて、次を見てゐる、

「何がありますか」といふと

「ヒカウキ。」「軍艦。」「ラッカサン。」「タンク。」「花。」などと次から次へと出て、子供は如何にもうれしさうである。指でさしながら口々に名を呼んでゐる。更に一枚繰ると美しい二重橋のお寫眞がある。

「二重橋。」

「宮城。」といふ

「どなたがおいで遊ばすところですか」と尋ねると、

「天皇陛下。」と答へる。

表紙で見た山羊も、喜んで見たタンクや自動車も、國土にあるものことごとくが、大君に仕へまつつてゐるのであ

ることが、今に子供にわかるであらう。尊い二重橋のあるこの御本は特別にも粗末に扱つてはならないことを話し、頂いて、ヨイコドモをしまはせる。この皇室に仕へまつる至誠に滿ちたる子供を立派に育てあげなければならぬと思つた。机の中へ教科書を整頓させ、朝來たとき鞄からお道具を机にうつして、鞄は腰かけにかけること、帽子その他持物をそれ〴〵の位置に整頓することを實習させる。

次に下校について

1　教科書を鞄に丁寧に入れ、鞄の尾錠をかけること。

2　宮城のお寫眞に一同整列して最敬禮。「センセイサヤウナラ。」のあいさつをして、鞄を正しく背負ふこと。

3　門ではきちんと姿勢を正してから、奉安所に拜禮をし、友達をさそひ合はせて、急いでお家へ歸ること。

を指導しながら子供を校門に送る。

今日から基礎調査として、讀字力の調査をはじめる。十人程殘つた子供は、先に歸つて行く友達を窓硝子に顏をくつつけて見送つてゐた。

第四日(四月七日火)

今日は學校の重要な行事である朝會を見學した後、その話し合ひよりヨミカタ一ラジオ體操を指導し、又學校飼育の鷄、學校園などを觀察させ、自然に學び學校生活に親しましめる。

始業迄の指導　今日は朝早く登校して、子供の登校の時刻を調べると一緒に、始業までの指導をするのである。校門で奉安所に對する禮を忘れた者は三名だけであるが、禮の仕方は區々である。登校時刻は次ぎの通りである。

一時間前に來た者二名、三十分前から十五分前が一番多く、一番おそいものは五分前であつた。

朝會、ラジオ體操を見學して教室へ入る。朝起きた時から學校へ來るまでの生活について話し合ひながら次の指導をする。

一　朝は一人で元氣よく起きること。

一　家を出かける時、おとうさん、おかあさんに「行つてまゐります。」と御挨拶をすること。
これを話してゐると急に、
「おばあちやまにも」と言ふ子供がゐた。
「さうです。おばあさんにもおぢいさんにもするのですね。」と言つて次へ進む。
一　學校の授業に遲れないやうに（ヨイコドモ上教四頁）いそいで來ること。ヨイコドモ上二頁の挿繪を見せ、嬉しさうに元氣で通つてゐることを話す。
一　校門で奉安所に拜禮をすること。
一　先生にお早うございますのあいさつを元氣よくすること。
一　下駄・靴・帽子・教科書・鞄をきまりよく整頓すること。
これだけ話して、校門まで連れて出て、奉安所に對する拜禮から、下駄箱・帽子かけ・鞄といふやうに順序に行はせてみる。

（七）ラジオ體操

再び席について、朝會は學校の大切な行事であることを話し、ヨミカタ「ラジオ體操」の挿繪・掛圖を見ながら、繪は櫻の下で全校の兒童がラジオ體操をしてゐること、今朝、學校のラジオ體操を見たこと、今に櫻も滿開になり校庭も美しくなること、國民學校一年生だから、みなさんも近い内にラジオ體操を一緒にさせて頂けること、ラジオ體操が出來るかどうかなど順に問答してくると、
「一二三四……」の號令を小さい聲でかけてゐる。そこで大きな聲で一二三四の號令を齒切れよくリズムに乘つて繰返させた。子供達は先生の眞似をして手をふりながら叫ぶ。イーチ・ニイー・サーン・シーとのばしたりなどしてイ母音の發音を十分出させたのである。
「體操、やらう」といふので體操場で、オルガンに合はせてラジオ體操をやる。示範がなくては出來ぬ者が多い。オルガンをやめて、一緒に一二三四と調子をつけてやる。反對の動作を平氣で續けたり、時々やめては僅かに眞似してやつてゐる者が多い。終りに男女別に呼稱つけてやる。

（四）學校の庭

雞小屋　次に西校舍に連れて行き、明日、大詔奉戴日の式の行はれる講堂へ導き、醫務室・理數科實驗室など見せて、雞小屋へ出ると、子供達は吸ひよせられる樣に金網に近寄る。今日は少し寒いかなと心配してゐたが、僅かに雲が浮かんで暖い。五羽の雞がしきりに地面をつゝいて餌を漁つてゐる。菜の葉を持つて來て入れると、喜んで駈集り、ちよん〳〵つゝく。子供達は面白さうに見てゐる。
「おもしろいな」と一人が言ふ。
「おもしろいなー」と皆が言ふ。オ母音の指導がこんな所でも出來る。
子供の觀察はなか〳〵面白い。あつちからこつちからいろ〳〵なことを言ふ。
「頭、ちいつちやくて（小さくて）」といふ者、赤いとさかをさして「赤い帽子被つてる」といふ者があると思ふと、
「うんこまつた（糞をする）よ。」
「うんこまつた。うんこまつた。」
「うゝー、きつたない。」糞のそばを嘴で雞が何かつゝいてゐる。
「右んとこ、頭やればうんこある。」と心配さうに呼びかける。
「うん、うんこふんじやつた。」雞は糞を蹈みつけて向かふへ行く。
背中の毛が拔けて赤く禿げてゐる雞がゐる。
「可愛さうだねー。」とつぶやいてゐる。
「雞は幾羽ゐますか。」と聞くと、
「五つ。」「六人。」（雞を六人と言ふ。）「三つ。」これは自分の前のだけ數へてゐる子供である。五羽の雞をみんなで

數へる。

「一番いゝ鳥、あの白い鳥だな。」と言つてゐる者がゐる。その中に

「卵ある」と奥の卵を見つけて、

「卵、あるでしよ。ほら。」と數へてゐる隣で「ひよこになるんだよ」と説明してゐる。

こんな所でも自然の觀察や算數の指導が出來る。雞の觀察はこれだけにして、二列に整列して、道に出る。

道に沿つて外人の家があり、門がしまつてゐる。

「アメリカ人の家だぞ。」

「日本勝つた、日本勝つた、アメリカ負けた。」と聞えて來る。子供はアメリカや支那にどのくらゐ認識をもつてゐるのかなと思つた。戰爭のことについては明日の大詔奉戴日の式のあとで聞かうと考へてゐる。

第五日(四月八日水)

今日は大詔奉戴記念式に參加して、大詔奉戴日の感激を深め、なほ式に參列された先生方について話合ひ、進んで先生を敬ひ、先生に親しみ、從順に教へを受けるべきことを知らしめる。

(八) 大詔奉戴日

今日は大詔奉戴日である。講堂で式をするのであるが、講堂の整列は仲々困難である。二列を一列にするのに骨が折れる。「男、女、男、女になりなさい。」と言つて、一人一人整列させる。

式の時の注意は、前にして置いても、直ぐ隣は違つた組である。先生と離れて、大きい生徒の中にゐる。知らない中に前の間隔をつめてしまつたり、横を向いたり、振り返つたりしてゐる。

しかし、やがて、かうした學校行事の嚴肅な雰圍氣の中に薫陶されて、本當の意味で式に加はれる日が今に來るであらう。

式が終つて校庭に出る。何時も小さい順であるのが、今度は大きい方から整列する。自分の前の人が違つたので整列がうまく出來ない。逆に小さい方から整列し直す。それでも未だ自分の位置が憶えられない者も幾人かゐる。

校庭へ出て、子供に、講堂に附屬國民學校の先生方と生徒が全部集つて、今日立派な式をしたことを話す。「みなさんも大きい生徒に負けないやうにしませう。」と言つて、終りまで行儀よく出來た子供をほめてやる。子供達は歩きながら、今先生からお聞きした話の中の「附屬國民學校」を大きく叫び出した。自分の學校名を誇らしげに調子よく繰返して行く。

學校園、櫻　學校園を見る。學校全部の花壇として、全學年統一をもつた計劃の下に經營されてゐる花壇である。初等科一年は高等科一年と一緒に一つの區劃を擔當してゐる。花壇はいろ〳〵な形で構成され、花の種類の配列にも工夫がある。子供はさうした花の種類には未だ注意しない。

「この花きれい。」「この花好き。」と言つて見て廻る。

本校の寄宿前の大きな櫻が八分開いて滿開に近い。「きれいだなあ。」「うつくしいなあ。」

が口を衝いて出る。イ・エ・ウの母音を大きく叫ばせながら指導する。櫻の下でトンネル遊び・汽車ごつこなどする。樂しく遊んで教室へ入る。調子に乘つて、押へきれぬ程子供の氣分が浮いて來た。

大詔奉戴日について　教室で大詔奉戴日について次のやうな問答を交はして時局認識を深めたのである。

「今日は何の式がありましたか。」

「大詔奉戴日。」

「大詔奉戴日は、どういふ日ですか。」

「戰爭、始つた日。」

「さうです。十二月八日天皇陛下から宣戰の大詔を戴いたのです。毎月八日はその記念日です。何處と戰つてゐるのですか。」

「アメリカとイギリス。」

「支那とも戰つてゐる。」と言ふ子供もゐる。アメリカ、イギリスを教室の後の壁に貼つてある大東亜戰爭の地圖で見る。アメリカやイギリス、支那などを指し示せる子供もゐる。ルーズベルトやチヤーチルの名も知つてゐる者もゐる。日本を見て

「ちんまいなあ(小さいなあ)」といふ。

アメリカやイギリスの大きな領土を見て、

「だまかして取つたんだ。」と言ひ

「支那、あんなに大きい。」などといふ。そこで、日本中の者が力を合はせて戰はねばならんこと、日本の兵隊さんはとても強くて勇しいことを話す。すると、突然

「煙草屋で戰爭に行つてゐる。」とKがいふ。

十二月八日の勇ましい攻撃の話をしてやる。

ハワイ攻撃の話を子供達は眼を輝かして聞いてゐた。

(九) 學校の先生

今朝、大詔を奉讀された主事先生から始めて、講堂に見えられた先生の話をする。そしてヨイコドモ教師用十二頁の說話を扱ふ。

授業が終つて、讀字力の調査をする。Yが鞄を背負つたまゝ〳〵泣いてゐる。どうしたか尋ねると帽子がないらしい。Mの帽子が一つ殘つてゐる。間違へたのだらう。「友達が間違へたのだから、明日は出て來るから心配するな。」と言つても泣きじやくつてゐるので、家まで連れて行く。病身らしい母親に譯を話すとしきりに禮をいふ。子供は泣いて家へ入つて行つた。

第六日(四月九日木)

今日は兒童の學用品その他の所持品を調べ、學用品を大切にすべきことを教へ、その扱ひ方を指導する。尙クレヨンに關聯してイロの指導をなし、色名、色相を知らしめて色彩感覺をねる。

今迄じつとしてゐた子供も今日は大分動き出した。後の黒板に繪を書くもの、自分の姓名を書く者、輪投げをして遊んでゐる者などある。

教室には、子供達の字を讀む機會を作るやうに、柱にも壁にも鉢植ゑの花にも、片假名で名前を書いて貼つてある。今朝は子供達の中にはそれを讀んでゐる者も見受けられた。その中にMが來る。

「Mさん、昨日Yさんの帽子を間違へてかぶつて、行つたらう。」といふと、默つて橫をむいてゐたが、その中に先生の體へ甘へるやうに卷きついて來た。

「昨日、Yさん泣いてゐたぞ。帽子持つて來たかね。」Mはそれには答へないで、先生の股へ頭をつけてぐん〳〵押してきた。

「持つて來たのか。」と更に聞くと、「お水。」と言つて向かふへ行つた。Mは甘へて家では手におへないさうだ。帽子は帽子かけにちやんとかゝつてゐた。

(六) 學用品

今日は新しく學用品を子供に配つてやる。子供達は一つ一つの學用品を非常に喜んで貰ふ。この喜びで學用品を何時までも大切に自分の道具として使ひならすやうに指導しなければならない。

カキカタ練習帳、カズノオケイコ、ヨミカタ帳、クレヨン、一つを配る毎に手を叩く。學用品、教科書、その他持物に記名がしてあるか調べる。

次に教科書と學用品を机の中に整頓する仕方を指導する。次の物は親類や兄弟のやうなもの、だからと言つて一緒にさせる。

一、教科書ではヨイコドモ、コトバノオケイコ、學用品ではヨミカタ帳、カキカタ練習帳を重ね、二、教科書ではカズノホン。エノホン、ウタノホン、テホン、學用品ではカズノオケイコ、クレヨンを一つに重ねさせる、三、習字用

具、各別々に整頓させておく。

本の上に筆入を置き、筆入の中には、二Bの鉛筆二本、赤鉛筆一本、ケシゴム一、ハサミ一、何れも記名させて入れさせることにした。

學用品に記名すること、机の中へ教へたやうに整頓することをその後引き續いて指導したが、これも徹底するには非常に時間を要することである。

一學期中に十回以上指導を受けた子供が五人もあつた。次に色彩指導用掛圖を子供は眼を輝やかして、非常に注意を集中して見入つた。

「飛行機！　飛行機！」

「飛行機、飛行機、ララララララ」の歌をうたひ出す。

「飛行機がどうしてゐるところですか。」

「ビラ、撒いてる。」「折紙にいゝや。」とビラを見てゐる。

「どんな色のビラ撒いたね。」

「アカ、キイ、クロ、ミドリ、ネヅミ、ムラサキ、モモイロ、クサイロ、アヲ、ダイダイ。」

と口々にあげて來る。そこで色名を一つ一つ指して一齊に言はせて、間違ひを指導する。綠をアヲと言ひ、黃をキイと言ふ者が多い。色名を板書して、色をさゝせたり、色を指して色名を言はせたりする。

次に、袋入の標準色と色紙を較べさせる。

「どちらの赤がきれいですか。」

「こつちの方。」と標準色をあげる。

「この方が赤らしいですね。」と言つて、その他の色も較べさせて標準色を知らせる。

次にエノホンの色名を書いた上に色ならべをさせる。出來ない者が四人あり、特別指導する。並べたまゝにして置いてクレヨンの色と較べ、又色名を調べさせる。畫用紙を小さく切つて置いたのへ、クレヨンの持ち方と塗り方を教へて十一色を塗りならべさせる。クレヨンの本數と塗つた色の數を數へさせる。

畫用紙を渡しながら數へ方の指導をする。子供達はもうすつかり大喜びである。

「チヤツ　チヤツ　チヤツ　チヤツ　チヤツ。」と手を打つてははやしてゐる。

もう一回クレヨンの色と數を調べ、持ち方塗り方を指導しながら、自由に繪を描かせる。子供の作品の中には、太陽を書いた者が、約四十%、飛行機を書いた者が三十四%、家を書いた者が約三十%であつた。

まだ自分の名前を書けぬ者、ヒをコなどのやうに字を反對に書く者などがある。

終つて運動場へ出て色紙拾ひ競爭をさせる。方法はとんで行つて、言はれた色をえらび取つて持つて歸るのである。言はれた色紙を間遠ひなく拾つて來たか、みんなに示して、早い順に等を定めるのである。かうして藝能科や體錬科の指導も自然の中になされるのである。

名のり　學用品その他、記名の指導をしたあと、名のりをさせた。自分の姓名を大勢の前ではつきり言ひ得る者は少ない。四人の者が割合に落着いて立派に名のつたが、他は早口に言ふ者が多い。聲が小さかつたり、訛つたりする者もある。例へばシをチ、ヒをシ、ロをドなどの誤が多かつた。机にじつとしてゐて言はない者も一人ゐた。どの子供にも早く人に自分の姓名は明瞭に力強く言ひ得るやうにさせてやりたい。

第七日（四月十日金）

今日は上級生の學習の有樣を見學し、校庭に於ける遊戲の指導をなし、學校に於ける課業・休時間の初步訓練を子供達は大分學校になれて來た。今日は廊下に出て來て遊んでゐる。

なし、それと關聯してヨミカタ一校庭の遊戲を扱ひ、話し方、發音について指導する。

「先生、おはやう。」と元氣であいさつをする。

「おはやうございます。」の指導をする。

(十) 教室の勉強

二年生三年生の上級生、教室學習の樣子を見せてもらふ。近頃さはついて來た子供も引きしまつた教室の雰圍氣に、靜かに見入つて廻る。

教室へ歸つて、次のやうな點が立派であつたことを言つて、

○腰掛けて、本を讀む時、字を書く時、お話を聞く時の姿勢。○立つて答へる時の姿勢。○お答へする時の返事や言葉づかひ。○擧手の樣子などについて話す。

みんな課業を休んだりしないで熱心に勉強してゐる。私達もみならつてしつかりやらう、と注意を促す。

(十一) 校庭の遊戲

子供と校庭に出る。草原に腰を下す。なづなをとつてきてE子が「ほらなるよ。」と振つて見せる。耳のそばで振つたなづなの音を聞いて「オモシロイナ。」と喜んでゐる。女の子はクローバーの花を取つて、長くつないで首かざりを作る。「こんなに取つたよ。」と花たばを持つて來る。「先生、持つて。」と持たせられる。幾本か數へてゐると、子供も數へる。つないだクローバーの花の本數も數へる。長く作つては「エライナー。」と叫ぶ。數へ方、數の增減を自然の中に扱つたのである。

「今度はみんな一緒に遊ばう。」といふと、

「ウレシイナー。」と大喜び。自然に發する子供の言葉をそのまゝ「オモシロイナ」「ウレシイナ」「エライナ」と發音させて指導する。幾度もする中に子供はオ・ウ・エの母音の口つきを面白がつてまねする。訛や不明瞭なのはその場で批正して發音指導をする。

一列に輪を作る。影法師が一緒に歩く。

「おばけだ、おばけだ。」と喜ぶ。白い石灰の上を「ガクカウ」の歌をうたつてまはる。

「元氣で體操一二三、國民學校一年生」

とても元氣である。次ぎに手を打つ、二拍子を知るやうに强弱をつける。「一・二一　一・二一」と口で言ひながら歩いたりする。一番むづかしいのは間隔をとることである。子供は前へつめてしまふ。止ることが出來た時に

「えらい〳〵。」とほめてやると、子供達は手を叩く。

猫と鼠をして終はる。

教室へ入つて「ヨミカタ一、校庭の遊戲」を今の話し合ひから入つて扱ふ。

今日は數の調査に數名を殘す。

第八日(四月十一日土)

今日はヨミカタ一校庭の遊戲を扱ひ、話し方發音の指導をなし、兒童の好む滑空機を作り遊ばしめて手指の初步的訓練をなし、製作への興味を養ふ。

(十一) 校庭の遊戲

コトバノオケイコを開く、先づ飛行機のところでは、

「何してゐますか。」「飛行機。」「この人達は何してゐますか。」「萬歲してゐる。」「みんな飛行機がうまく。飛ぶので萬歲してゐる。」「どんな顏してゐますか。」「にこ〳〵してゐます。」

「どうしてにこ〳〵してゐますか。」

「うれしいから。」など話合ひをして「ウレシイナ」の發音を指導する。

人形　人形では子供達は「まゝごと遊びだ」と言ひ、「花子さんが入學のお祝に叔母さんから人形をもらつて嬉しいなあと言つて人形見せ合つてゐる。」などの話が出て「ウレシイナ」「エライナ」の發音指導をする。犬は軍用犬だと言ひ「とても高いところを跳び越える。」こと、「小さな犬がおてゝかしてゐる。」ことなど話合つて、「エライナ」の發音指導をする。

運動場へ連れて出る。渡廊下の屋根の雪がとけて、とよからジョウ〳〵流れ落ちてゐる。地面から陽炎が立つてゐる。濃い太陽は背中に暖い。みんなで眺めながら自然の觀察をする。

「長い　おしつこだ。」と急に日が言つたので笑つて、「をかしいなあ。」といふ。

(十三)　折　紙

教室へ入つて　小さく切つた新聞紙を一枚づゝ與へて

「今日は何でも好きなものを作りなさい。」と言ふ。こんなに迄うれしいのかと思はれる程喜ぶ。新聞紙を使ふのを「代用品だ。」などと言つてる者もある。始めての折紙の作品は、

飛行機―一二人　財布一〇人　箱―五人　舟（舟にならぬものもある）―三人　冑―二人　紙鐵砲―一人　オルガン―二人　奴さん―一人　何を作つたかわからぬ者十三人、何にも作れない者―二人であつた。

飛行機を作つたのは男子である。

「シコーキだ」「ヒコーキだ」と盛にとばせてゐる。

「つばめ飛行機だよ。」　とか

「ほら　おつぽのない飛行機だ。」とか如何にも嬉しさうである。紙鐵砲は「パタパタ。」音を立

「先生　これ何か知つてる。大きいオルガンだね。」オルガンは女の子が作る。財布も女の子で「これ、財布作つた

よ。」「わちも出來たよ。」「うちへ持つて行くの。」など言つてゐる。紙鐵砲に手を動かしてゐる。

舟を作つた子供は、「舟、舟。」と言ひながら波に揺れるやうに手を動かしてゐる。

て「關機銃だ。」「二連發だ。」など得意である。何だか譯のわからぬものを作つて、「おもしろいもの、出來た。」と

にこ〳〵してゐる者がある。

飛行機をすい〳〵飛ばすのを羨ましがつて、紙飛行機の作り方を教へてほしいといふ。

今日は模型飛行機や、ハワイ空襲の繪を見せて話をする。子供達の飛行機を作りたい氣持は益々強くなる。

そこで新聞紙でエノホンの圖を見て作ることにする。みんな一生懸命で作る。お手傳ひをうけたがどうやらみんな

作り、日の丸のマークも塗つて、軍艦マーチをやりながら校庭に出る。

飛行機を持つて圓を作り、みんなで手をそろへて舞ふ樣子をする。體をくねらせて大喜びである。それから風が少

しあつたが、夢中になつて飛ばす。紙の飛行機が入り亂れて飛び、子供の聲が響き合つた

第九日(四月十三日月)

入學して登校既に九日、學校生活になれ、入學の喜びの消えないうちに入學記念の木を植ゑさせ兒童の心を學校にしつかり結びつけ、私たちの學校といふ氣持を強くし、土に親しみ、木を慈しみ育てる氣風を養ふのが本日の主眼である。

記念の木　入學の喜びそのまゝに記念の木を植ゑさせる。その喜びを土に生かすことによつて、兒童の心を學校と結びつけ、私たちの庭、私たちの學校といふ氣持を強くし、土に親しみ、木を愛育する氣風を養ふのである。

(自然の觀察一七頁)梅の木・桑の木を植ゑる。石をとり、土を碎き、水をかけ、四人組で樂しく仕事をする。子供達の手で記念の木が植ゑられた。これからこの木と雨風を共にして育てるのである。

入學してより約二週間、子供は學校生活になれ、友達とも手をつなぎ、運動場へも出つて遊ぶやうになつた。學校生活の基礎的な躾をしながらも、子供が安心してものを言ひ、自由に行へるやうにすることが將來へ伸びる第一歩の仕事と思つて力を入れて來た。入學の喜びをそのまゝ受けると共に、それをそのまゝのばし、新しい生活への不安を除去して、私達の學校に子供達の足をしつかり踏ませ、根をはらせて今後の成長を期待するのである。

「私タチノ學校」を扱つて、少し子供が調子にのりすぎるやうな點が見えてきた。而し子供のありつたけを一應はすつかり出しきらすことが必要である。それが今後の指導の手がゝりともなると思ふのである。

附　當校では明年度入學すべき兒童を二月初旬に招集して、身體檢査をなし、又新入學に關する懇話會をして新入學について萬遺漏なきを期してゐるのである。その際渡した調査用紙は次の通りである。

入學兒童調査票

一

(1) 兒童氏名 ／ 男女を通じての出生順位 ／ 現住所 ／ 出生地

保護者氏名 ／ 兒童との續柄 ／ 職業(なるべく詳細に) ／ 兒童出生後の轉居回數 ／ 電話(一方をお消し下さい)

町 番地 番戸 ／ 府 縣 ／ 市 郡 町 村 ／ 回 ／ 自宅 呼出 番

(2) 兒童生育地(轉居地名を全部記入し、地名の下に何歳から何歳迄と御記入下さい。)

(3) 幼稚園(保育園)名(園名の下に何歳から何歳迄何年何ケ月と御記入下さい。)

(4) 日曜學校、教會、子供會名(行く日も御記入下さい。)

二 家庭及び環境

(1) 家族

	名前	生年	最終修卒學校名	職業	備考
父					
母					
祖父方 祖父					
祖母方 祖母					
父方 祖父					
母方 祖母					
母方 祖父					
祖母方 祖母					
兄弟姉妹					
その他の同居者					

○左記諸項を御注意の上もれなく御記入下さい。

(イ)職業は詳細に記入のこと

(ロ)別居の場合は「備考」欄に住所を記入のこと

(ハ)在學の場合は學校名を「職業」欄に記入のこと

(ニ)亡父母の場合は死亡の原因、病名及びその年月を「備考」欄に記入のこと

(ホ)繼父母の場合は「備考」欄に「繼父母」と記し、その婚姻の年月を記入のこと

(ヘ)父と母とに血緣關係のある場合は「備考」欄に記入のこと(例、従兄弟姉妹)

(ト)保護者が緣故者の場合は緣故者の家庭については右の表に準じて別表に作成、記入のこと

(チ)養子緣組又はそれに類する場合は、養家の家庭については右の表に記し、兒童生家の家庭については左記の表を別紙に作り記入のこと

(リ)祖父母が兒童生後に死亡したる場合は死亡の原因、病名及びその年月を「備考」に記入のこと

(ヌ)兄姉の中他家に嫁したる者については兒童入學前後にかゝはらず各欄に記し「備考」欄に婚姻と記し更にその年月を記入のこと

(ル)兒童入學後入嫁せるものありたる場合は兒童との關係を「備考」欄に記し、その年月を記入のこと

(ヲ)その他の同居者中、特に雇傭人の場合は雇傭したる年月を「備考」欄に記入のこと

(ワ)家族の健康狀態については「備考」欄に簡單に記入のこと(例　健康、不健康)

(2) 先祖棚(佛壇)がありますか。(有・無)。

家庭の宗教は何宗派ですか。(　　道。　　宗。　　教。)

(3) 購讀しをられる新聞名を御記入下さい。(　　)

(4) 購讀しをらるゝ雜誌名を御記入下さい。(　　)

(5) 區長、隣組長、方面委員、婦人會役員等父母の名譽職を御記入下さい。

(6) 主として兒童の世話をなされる方の御名前。(　　)

(7) お宅に飼つて居られる犬・猫・その他を御記入下さい。(　　)

(8) お宅の庭にある果樹その他の庭木の主なるものを御記入下さい。

以下の項目については該當事項の上に○印をつけて下さい。

(9) お宅にあるもの……ラヂオ。蓄音機。映寫機。ピアノ。オルガン。

(10) ○躾について……放任。嚴格。あまやかす。

○兒童の養育者に對する態度……從順。言ふことをきかぬ。我がまゝ。あまえる。口答をする。

(11) 居住地狀態について……住宅街。商店街(表通・裏通)。電車汽車線路附近。(映畫館、カフエー、料理屋、田園、公園、學校、神社、寺院、教會、)附近。喧燥地。遊び場所(有・無)。

附近の日當り(良し・悪し)。紙芝居がよくかゝる。

三　兒童の家庭生活　(左記該當事項にはその上部に○印を、空欄には該當事項を御記入下さい。)

(1) 衣食住……着物を破り易い。着物を汚し易い。厚着。薄着。着物に關心をもつ。着物に無關心。人のもつてゐるものをほしがる。食事のとき行儀が悪い。ゆつくりたべる。あはてゝたべる。大食。小食。むらぐひ。

偏食の有無。（好きなもの……
嫌ひなもの……）

間食（規則的、「午前　時頃、午後　時頃」　不規則的）　自分で物を片づける。他人に物を片づけて貰ふ。よく整頓する。物の取扱が亂暴。

(2) 手傳ひ……毎日やる。きまつた手傳（掃除、お使ひ　）何にもやらない。自發的にやる。言はれてやる。素直にやる。手間どる。根氣よくやる。根氣がない。正確にやる。粗雜にやる。

(3) 學習……お勘定を教へていただきましたか。（　）幾つ位まで出來ますか。（　）文字を教へていただきましたか。（　）どんな字を知つてゐますか。

數へたがる。文字を知りたがる。色々きたがる。何にもきかない。讀書を好む。讀書を好まぬ。澤山本を讀む。新聞を讀む。

今迄に買つて貰つた主なる單行本の名。

現在買つて貰つてゐる定期刊行物。

(4) 金錢生活……小遣をねだる。小遣をきまつて貰ふ。小遣を貰はぬ。無斷で持出す。買物の經驗が多い。買物の經驗がない。買食をする。

(5) 交友……友達が多い。友達が少ない。孤獨的。社交的。親友なし。同年輩の友達。年下の友達。異性の友達。友達にすかれる。友達に嫌はれる。永續的。遠方の友が多い。友達はきまつてゐない。

(6) 遊び……亂暴な遊び方。活潑な遊び方。ぐづ〳〵してゐる。大人らしい遊び方。幼稚な遊び方。孤獨的。大勢で遊ぶ。統率的。從屬的。

(7) 主にどんな遊びをしてゐますか。（　）

どんな現具をほしがりますか。（　）

映畫……映畫を見に行きたがる。映畫を見に行きたがらない。

(8) その他兒童の性質（長所、短所、性癖等）につき御氣付の點を御記入下さい。

四　兒童の發育狀況。（左記該當事項には○印を、空欄には該當事項を御記入下さい。）

(1) 胎生期間は普通でしたか。（　）

(2) お産…早産（　ケ月）。安産。難産。鉗子。開腹。假死。

(3) 産れた時…身長（　）。體重（　）。普通。

(4) 榮養…母乳。　混合。　人工。　乳母。　里子。

(5) 離乳…（　歳　ケ月頃）　小さい方。　大きい方。

(6) 發育…生齒（　歳　ケ月頃）　這行（　歳　ケ月頃）　言語（　歳　ケ月頃）　チブテリヤ（　歳）。猩紅熱（　歳）。肺炎（　歳）。

(7) 病歷……麻疹（　歳）。　百日咳（　歳）。

消化不良(　歳)。腦膜炎(　歳)。小兒麻痺(　歳)。眼の病氣(　歳)。耳垂れ(　歳)。
その他(　　)
○かゝた病氣は未だ殘つてゐませんか。(　　)
○常におかされ易い病氣は何んですか。(　　)

(8) 眼、耳、發育、手足等に異常がありましたら御記入下さい。

(9) 保育者…實父母、祖父母(　歳から　歳迄)。繼母(　歳から)里子(　歳から　歳まで)。
養母(　歳から　歳迄)。　女中(　歳から　歳迄)。

(10) その他

睡眠…熟睡。　時々夢をみる。　うなされる。　ねぼける。
夜尿…有、無　(何歳頃迄ありましたか。)
便通…一日　回(朝、晝、夕)
齒磨…朝なす。　夜なす。　朝夕なす。
食慾…良。　不良。

五　學校への御希望をなんでも御記入下さい

○天長節

一　綜合授業指導計畫表

綜合授業第五指導計畫表

題目	五　天長節	要旨	天皇陛下の御事を敎へて、天長の佳節を祝ひ、日の丸の國旗、兵隊さん等をも敎材として國民的情操に培ふ。	
指導要項		取扱場所	豫定時間	準備
(一)奉安所		校庭 1		
(二)天皇陛下		教室 1		
(三)日の丸の旗		教室 6		クレヨン、畫用紙、型紙、糊、篠竹
(四)拜賀式の禮法		講堂 1	運動場 2	オルガン 日の丸の旗

連絡教科科目	同上題目及主要事項
修身	「テンチャウセツ」 天長節の佳節に因んで、天皇陛下の御事を敎へ、忠君の念を養はしめる。
國語	「ヒノマルノハタ」 天長節の早朝、日の丸の旗を見て感激的に萬歳を叫んだ敎材で發音を正し、讀み方を指導して國民的感激を深める。
音樂	「ヒノマル」 國旗の美しさと勇ましさとを歌はせ、之を讃仰する心を喚起して、國民的情操を昂揚する。
圖畫・工作	「ハタ」 紙で日の丸の旗を作らせて、手指の初歩から練磨をなし、國民的情操を養ひ製作への興味を喚起する。
算數	「紙とクレヨン」 單位名を添へた數へ方の指導を中心とする。
音樂	「ヒノマル」 ヒノマルの遊戲
修身	「日の丸」 「テンチャウセツ」 天長節に於ける禮法指導。

	教室			音樂	「君ケ代」 壯嚴な國歌君ケ代を聽唱法による指導をなし、國民的情操を深める。
拜賀式 (五)觀兵式と兵隊さん	講堂 教室	3	觀兵式の繪	修身 國語	「テンチヤウセツ」 觀兵式、陛下御親ら幾萬の兵を御覽遊ばす。 「ヘイタイサン」 觀兵式に關聯して、兵隊の行進を遊戲的に表現した教材でこれを讀むことによつて國語力を高める。
(六)天長節の畫	教室	1	畫用紙		「ハタヲアゲル」 日の丸の旗を掲げた情景を畫かせて思想的表現の練習をなさしめ國民的情操を養ふ。

二　週授業豫定表　四　遠足　六、おたまじやくし　七、校醫の先生

第四週		四月第五週綜合授業豫定表					
		1	2	3	4	備考	
24	金	五ノ(一) 奉安所	五ノ(二) 天皇陛下	五ノ(三) 日の丸の旗			
25	土	靖國神社臨時大祭					
27	月	五ノ(三) 日の丸の旗	五ノ(三) 日の丸の旗	五ノ(三) 日の丸の旗			
28	火	五ノ(三) 日の丸の旗	五ノ(三) 日の丸の旗	五ノ(四) 禮法			
29	水	天長節拜賀式					
30	木	五ノ(六) 天長節の畫	五ノ(六) 同上	五ノ(五) 觀兵式と兵隊さん			
五月 1	金	五ノ(六) 天長節の畫	五ノ(七) 運動	五ノ(四) 觀兵式と兵隊さん			
2	土	六ノ(一)	六ノ(二)	七ノ(一)	六ノ(三)		

三　指導の過程

指導の經過の報告に先行して、本生活題目取扱の趣旨を述べることが、指導の過程を概觀するに當つて好都合なことであらう。

この生活題目は、國家的儀式に取材したものであるから、國體觀念を確立し、國民精神に培ふ直接性を有するものとして、極めて重大なる意義を有する教材といはなければならぬ。

兒童は、有難い　天皇陛下の御生まれ遊ばされた日を祝ひ奉る天長節を待ちあこがるる心で一杯であらう。正に、この日は兒童にとつて始めて、大勢の先生方を始め上級生の仲間入して盛大なお祝の式に參列することが出來るのだからである。本題目の指導は終始一貫して、わが大君の生れ給ひし今日のよき日を壽ぎ奉る心情に基づいて行はれなければならない。即ち、四月二十九日の佳節を待ち奉る心情、更にこの盛典を喜び奉る今日の喜ばしき心持、更に天長節をなつかしく思ひ出す心情の中に凡そ一切の生活學習が營まれるのでなければならないのである。

かくして、天長節を通して、兒童は　天皇陛下の御誕辰を壽ぎ奉り、聖壽萬歲をお祈り申し上げ、天皇陛下に忠誠もつて事ふるの情を養はなければならぬことは、綜合授業指導計畫表の要旨に既に述べた通りである。

尙又、兒童は入學後いくばくも經ぬ兒童である。漸次、學校生活に馴れさせ、團體生活の出來るやうに指導して來てゐるところである。天長節を迎へ全校一體の嚴肅な擧式の中に參加して、壯嚴なる雰圍氣に感じて、御眞影を拜する所に既に皇國の道の修練はなされてゐるのであるが、更に團體生活になじませ、國民的禮法をわきまへて式場に臨ましめる躾の指導の重大なる意味を忘れてはならないのである。

このやうにして、生活題目「天長節」は、入學後順を追つて躾けて來た團體生活の指導を深めながら、この生活題目が含む諸種の指導要項について學習し、而もそれが天長の佳節を喜び祝ふ一聯の心情の發露として營ましめ、もつて、至尊至高の天皇陛下に事へまつる忠誠の情を養ふところに本生活題目の趣旨がある。かゝる、趣旨に基づいて、指導した、生活題目「天長節」の指導の過程について略述すれば凡そ次の通りである。

(一)　奉安所

第一時　二列縱隊整列。縱隊步行の訓練等團體訓練をなしながら、樹々の芽がふき始めた校庭を一巡して奉安所に行く。

整列、整頓、姿勢を正し、奉安所を拜す。天長節の間近なことを話し、その日は奉安所から、御寫眞を講堂にお遷し申し上げてそこで式の擧げられることをお話しする。

(二) 天皇陛下

第二時「ヨイコドモ上」の「三テンチヤウセツ」について謹話する。

1 四月二十九日は天長節で私達の學校でも立派な式をあげること。
2 みんなもその式に仲間入して天皇陛下のお寫眞を拜むことの出來ること。
3 天皇陛下は我が大日本帝國をお治めになる最も尊い御方であらせられること。
4 私たちはみな天皇陛下の臣民であること。
5 私たち臣民は常に天皇陛下の深い御惠みを受けてゐること。
6 私達の祖先も時の天皇樣の臣民であつて深い御惠みを受けてゐたこと。
7 天長節は天皇陛下のお生れになつた日であること。
8 天長節に當り天皇陛下の御代萬歲を祈り奉るべきこと。
9 天長節には朝早く起きて、皆さんが、日の丸の旗を門口に揭げること。
10 私達の組でも一人で一本づつ、日の丸の旗を作つてこれをかかげてお祝ひ申し上げること。

(三) 日の丸の旗

第三時

1 もう幾日で天長節になるだらうか。
2 日の丸の旗を作る用意をすること。
3 「カズノホン」紙とクレヨンの取扱ひ、をして、日の丸の旗を畫かく。

第四時

1 天皇陛下の御生まれ遊ばされた天長節を喜び祝ふ心情にみち溢れつゝ兒童の手指の初步的な指導をほどこしながら、前時につゞいて日の丸の旗を切り取らせる。
2 やや廣い面積の地紙に糊をつけて、貼ること。
3 目分量で糊代の幅を定め、切り取つた日の丸の紙を地紙から糊代を差引いた部分の中央に貼ること。
4 地紙の糊代に糊をつけて、竿の上端に卷きつけて貼ること。
5 以上工作的技術の指導を通して、忠君の念を養ひ、國旗に對する認識を深かめ、且國旗を敬愛尊重するの心情を啓培しその取扱について指導する。
6 糊を乾かせるために教室の周圍に立てゝ保管する。

第五時

1 カミカタ一、ヒノマルノハタの取扱。
2 「ウタノホン上」「ヒノマルノハタ」を指導し、教室の周圍に立てられた自製の日の丸の旗の中にあつて、ヨミカタ學習をし、更に「アヲゾラタカク」と歌唱して、國民的感情を長養する。

第六時

1 天長節の式には、「キミガヨ」を歌ふこと。
2 「キミガヨ」は、式の時に歌ふ歌で、天皇陛下の御代萬歲をお祈り申上げる歌である。つつしんで歌はなくてはいけないこと。
3 私たちは、もう直ぐに來る天長節の式にならんで、この「キミガヨ」を歌ふべきこと、今日はその「キミガヨ」をよく歌へるやうにすること。
4 「キミガヨ」の歌唱指導。
5 聽覺訓練
6 「ヒノマルノハタ」(ウタノホン上)の指導

7 「ヒノマルノハタ」の遊戯指導。

第七時

1 「ヨミカタ一」 ヒノマルノハタの取扱。
2 「ウタノホン上」 ヒノマルノハタの指導。
3 「キミガヨ」 の歌唱指導。
4 天長節には、「キミガヨ」 を姿勢よく、落ちついて、上手に歌つて、天皇陛下のお生まれになつたおめでたい日をお祝ひ申し上げること。

㈣ 拜賀式の禮法

第八時 第九時

1 いよいよ、明日天長節である。しつかり、「キミガヨ」を練習して、立派に歌へるやうにしておくこと。
2 「キミガヨ」 の歌唱指導。
3 「キミガヨ」 はよくうたへるやうになつたから、こんどは天皇陛下の御寫眞の前で、直接拜むことが出來るのだから、そんな嬉しいことはない、お行儀よくしなければならぬ。それで、お行儀をしつかりならつて、立派に式の出來るやうにしておくこと。待ちこがれてゐた、明日の式の順序を話し、その折々の禮法を指導する。
4 式場では靜かにして、姿勢をくづしたり、雜談したりしないこと。
5 天皇陛下のお寫眞のお入れ申してある所の戸をお開き申し上げる時は、頭をたれてつゝしんでゐること。
6、天皇陛下のお寫眞には最敬禮をすることを教へて、最敬禮の實踐指導をなす。

7 校長先生が勅語をお讀みになる時には、頭を下げて、心からよく聞いてゐること。
8 總べて、天長節の式場は嚴肅に過ごすやうに訓話し、その禮法を全兒童に實習せしめて、個別的になほしてやつたり、範圍を示したりして、十分指導すること。
9 「ヒノマルノハタ」 の歌唱と、遊戯を復習する。
10 明朝は早く起きて、各家の門に國旗を掲げて登校すること。

（拜賀式當日）

天長節の朝登校して、教室に集り、この日をお祝ひするために作つておいた、日の丸の旗を出し、教室の前方の中央に掲げる。

第十時

1 昨日行つた天長節の拜賀式について反省して、お話合ひをし、感想を發表せしめ、式場に於ける態度禮法についての實踐の指導をなす。
2 昨日は天皇陛下は觀兵式を擧行されたことを謹話する。
3 兵たいさんはみんな、天皇陛下のへいたいさんで、元氣よく活潑に働いて天皇陛下に忠義をつくしてゐること。
4 「ヨミカタ一」 ヘイタイサンの指導。

第十一時

1 「ヨミカタ一」 ヘイタイサンの指導。
2 「ヒノマルノハタ」 の歌唱。
8、「ヒノマルノハタ」 の遊戯。

㈤ 觀兵式と兵隊さん。

第十二時　1「ヨミカタ一」ヘイタイサンの指導。
第十三時　2「ヒノマルノハタ」の遊戯。
「ヒノマルノハタノ」歌唱。
3　體　操
第十四時　1　天長節の拜賀式反省お話。
2　天長節の日のことを主題として圖畫をかく。
(ハ)　天長節の畫
第十五時　1　天長節の日のことを畫いた圖畫の鑑賞。
2　旗拾ひ競爭
3「ヒノマルノハタ」の唱歌遊戯。

指導の過程は大略以上の如くであるが、尙授業の實況について、その主なるものを擧げて「天長節」を題目とする綜合授業の全貌理解に資したいと思ふ。

四　授業の狀況
1　お誕生日
天長節も間近にせまつてゐる四月十七日、金曜日の日のことであつた。第二時と第三時との間の休み時間の出來ご

とである。全部の兒童は南の庭に生ひ茂つたなづなの草原の上に腰を下ろして、眞白い可憐なぺんぺんぐさの花を集めてゐたが、その時、ふと一人の子供が、今日は自分の「お誕生日」であることを樂しげに言ひ出した。すると續いてもう一人の女の子が、「この間、わたしのお誕生だつた。お赤飯をいただいたの。」と發表した。この二人の女の子が元氣よく語り出した話題は、自然に、その附近にゐた多くの子供の注意を惹いて、夫々誕生日の祝に、家庭から送られた數々の催について發表し合ふ端緒を作つた。「お赤飯」「おすし」「おそば」「お人形」「おごちさう」「下駄」「お宮へおまゐりした」等々、世間なれた快活な社交型の兒童達は、思ひ出すままに發表し合つたのである。そして、一方には受容型の子供達の一團が聞き手となつて、或は自分自身のお誕生日を思ひ出す如く、或はいぶかしさうに忘却した自己のお誕生日のことを尋ねるかの如く、或は表現者の身振や顏附に氣をとられて見入るものの如くに聞いてゐるのであつた。

この表現と受容の雰圍氣の中に、子供達はその暖かい家庭の愛情につゝまれて、健やかに今日迄育まれて來た彼等の樣子をうかがふことが出來たのであつた。

「今日はM子さんのお誕生日ださうですよ。お誕生日つて、どんな日でせう。」と先生がいへば、「M子さんの生れた日ですよ。」「お祝ひの日！」「おごちさうのいただける日！」「生まれた日でせう。」「先生、さうでせう。」と口口に答へる。「さうです。生まれた日です。皆さんの、この世の中に生れ出て來たおめでたい日が、皆さんのお誕生日です。皆さんが生れたおめでたい日だから、おとうさんやおかあさんは、お喜びになつて、いろ〳〵おごちさうをして下さるのですよ。M子さんおめでたう。」

かくて一同は、お誕生日の意味を理解して、なづなの花を握りしめながらほほえんでゐた。

2　奉安所

思へば、同級生の顏も名前もよく知らない入學當初は、自分の整列場所も忘れてしまつて、しばしばまごつく子供があつたのであるが、この頃は大分馴れてどうやら整列も早く出來るやうになつた。四月二十四日(金)、快よく晴れ

た朝の第一時。この生活題目「天長節」指導の重要な指導要項の一つである鍵及び團體訓練に注意を拂ひ、集合、整列、整頓、歩行等についてことさら面倒を見ながら奉安所へ向ふ。四月當初、奉安所を拜してより約二十日、常盤樹の芽ぶきもすがすがしい朝の空氣のただよふ中に奉安所の拜禮をすました。そしてこの奉安所の前で四月二十九日は天長節で、もうすぐにその日が來ること。四月二十九日は天皇陛下のお生れになつたおめでたい日であること。國中でお祝ひ申し上げる式をあげること。天長節には、この奉安所から、あの御扉をお開けして天皇陛下の御寫眞を講堂におうつし申し上げて式をすること。皆さんもこの立派な式に參列すること。等のことを告げたのであるが、この時の一同の喜びは大變なものであつた。生れて初めて迎へる天皇陛下のお寫眞の前で行はれるこの佳節、子供達は小さな心に大きな喜びを抱きながら、「もう、四つねれば。」と指折り數へて、ひたすらに待ちあこがれる心情を滿面に表してゐたのであつた。そこで私はかういつて、次の目的を指示したのである。

「嬉しい天長節の式。天皇陛下のお生まれ遊ばされたよき日をお祝ひする四月二十九日。さあ今日は、これからお教室にはいつて、天皇陛下のお話を致しませう。」

3　天皇陛下

天皇陛下の御誕辰を慶賀し、聖壽萬歳を祈り奉る天長節を綜合教材とする生活題目「天長節」指導の主要指導要項としては、忠君の念を涵養し、國體觀念の確立に培ひ、國民精神の長養をはかることに主眼がなければならない。正に四月二十九日の天長節を中心に、この祝賀の儀式を通してこの目的を果すことは本題目最大の任務と言はなければならぬ。

さて、奉安所を前にして、天長節をお祝ひする喜びの心構が出來た子供は、その祝賀し奉る天皇陛下の御事について、一層深い教へへと導かれるのである。これから、間もなく來る天長節にお祝ひ申し上げる天皇陛下の御事についてお話しいたしませうと、兒童の情意的錬成を期すべく態度、言語には最も注意して、以下の項について謹話する。

(1)　私達はみな天皇陛下の臣民であること。

(2)　天皇陛下は、私達を我が子のやうに大事になさつて、可愛がつてくださること。

(3)　天皇陛下は、日本帝國をお治めになる最も尊い御方であること。

(4)　皇統は一系で、御代々の天皇は私達の祖先を深く御恵み下さつたこと。

(5)　私どもは有難い天皇陛下に忠義をつくすべきこと。

(6)　天長節には世界中どこでも、日本人のゐる所では日の丸の旗をかかげて、天皇陛下のお生まれになつたよき日をお祝ひ申し上げてゐること。

(7)　天長節には天皇陛下の御代萬歳を祈り奉り、このよき日を心からお祝ひ申し上げること。

ヨイコドモ上、八頁九頁の繪や、ヨイコドモの掛圖をみながら、自分達の奉祝の心構とその實踐方法について考へさせ、その計畫を發表させる。御仁慈深くあまねく國民の上を御軫念遊ばされ給ふ至尊の天皇陛下の御事を拜承した子供等をして、先づ第一に「お行儀よくして立派に儀式をやらう。」といふ儀式禮法を體得せんとする意志を、天長節を迎へる喜びの中に決意させなければならぬ。第二に、もとより子供達の大すきな日の丸の旗、日本中の子供達が、この旗をかかげて、この佳き天長節を壽ぎまつるやうに「自分達も亦、日の丸の旗を作つて、お祝ひ申さう。」といふ子供ながらになし得る實踐に導いたのである。かくして、至尊なる天皇陛下の御誕辰をお祝ひ申したい忠誠の心情にあふれ、そのうれしい希望の中に、日の丸の旗を作る計畫と勞作とが進行し、その間に自ら數量に關する理數的陶冶や色彩に關する練磨や、更に製作を通して子供ながらに工夫創造する心、或は初步的な技術的な修練がなされる。「日の丸の旗」の製作の六時間が展開するのである。

4　日の丸の旗

「もういくつ寢れば」と待つてゐた天長節も、日曜一日休んで、急に近づいた思がする。四月二十七日、クミノコヨミを見ては、その日を待つ。この子供の心持を日の丸の旗の製作にこめさせて意義深い日を迎へるのである。天長節

をお祝ひするために日の丸の旗を作らうといふと、溢れるやうな子供の喜びが湧き上る。子供たちの手を洗はせて教室に入る。日の丸の旗を作る心構へは、子供の實踐を通して指導されるのである。

先づ、わが國旗と滿洲國國旗を見る。二つを組合はせたのを見たことがあると言ふ子供がある。さうだ、日本と滿洲國とは仲のよいお友だちのやうな國であることを話してやる。「日の丸は日本の旗。」と誇らしげにSが言ふ。「さうです。日の丸の旗は私たち日本の國旗です。」と話し、忠勇なるわが日本の兵隊さんの進む所には、到る所、この日の丸の旗が飜へることを話し合ふ。

參考圖によつて、先づ製作の順序を研究する。

(1)地紙に糊代を定める。(2)赤い日の丸の圓二個を切り抜く。(3)地紙の中央裏表に日の丸の圓を貼る。(4)地紙を竿に卷きつけて貼る。と話合ひ、次に必要な工具材料について話し合ふ。(1)工具、唐鋏、(2)材料　地紙用半紙、赤い色紙二枚づゝ、篠竹、鉛筆、糊、糊下紙である。(ヱノホン一ハタ參照)

以下範を示し、仕事の順序や方法を說明して製作の作業を進ませた。先づ地紙を配つてそれを机上に置かせ、白地の美しさを最後まで汚してはならないことを話す。製作過程の(1)は造作なくすんだが、(2)(3)が最も困難であつた。

赤い色紙の表に日の丸の圓二個を寫させて鋏で切り抜かせる。これが今日の仕事の最もむづかしいところであり、技法指導上の重點であると考へて、示範と說明を丁寧にして行はせてみた。果して、この圓を畫いたり切り拔いたりする仕事は困難であつた。「これは、むづかしい。」「これ切れない。」とか言ふ者が多い。見ると鋏の先端を使つて、小刻みに、心許ない手つきで切つてゐる。ぎざぎざの圓周や、鉛筆で畫いた圓周と離れたいびつの圓を作り上げる者がある。ぎざぎざであらうが、いびつであらうが、平氣で仕事を進めてゐる者がある。中には、かうした困難な仕事に逢ふと、「先生、切つて。」と差出す者がある。一生懸命、力一杯のものを、自分の手で作つて、天長節のお祝ひをするのであることを話し、やり方を示範して、仕事を進めさせる。兒童は入學以來かうしたものを製作することは始めてである。仕事は相當困難であるが、多くの者は、天長節のお祝ひに立派に作り上げたいといふ強い心の動きにか、仕事は豫想以上に進捗するのであつた。

赤い日の丸の圓を中央に置き目分量で位置を定め、要所要所に當りをつけてから、裏面に丁寧に手で糊をつけて貼る仕事は、早く仕上げたい氣持に押されて、失敗し易い。位置を定めさせて、一々適否の指導をなし、日の丸の裏に糊をぬらせる。糊を多く使ひ過ぎて貼り損ふことが多い。四人組に小さな新聞紙の切端に少量の糊を與へて、かたまりの無いやうに丁寧にぬらせる。糊を使用する時に紙を汚すので注意を要するところである。

最後の篠竹へ卷き付けるところは、しはになつたり、離れ易い。いよいよ愼重に仕事を進める。

「萬歲　萬歲。」「僕のは一番高いぞ。」作つた日の丸の旗を高く差上げて、見上げてゐる幾人かの子供がある。

5　拜賀式の禮法

日の丸の旗を立てて、天長節を祝ふ用意の出來た子供たちは、いよいよその天長節を明日に迎へて嬉々としてゐる。今日はこの儀式における禮法を教へ、上級生に混つて立派な式が出來るやうに導いてやらなければならない。

入學以來、初めてこの大切な儀式に加はるのである。壯嚴な儀式の雰圍氣を亂しては、誠に恐れ多い極みである。生活題目天長節を指導するに當つて、不即不離なものとして、當然、儀式に關する禮法の指導をしなければならぬ。

今日は明日の式場である講堂に兒童を導き、式の次第に從つて、直接その實踐を指導するのである。日の丸の旗が出來た。明日はいよ〳〵うれしい天長節である。私たちをわが子のやうに可愛がつてくださる有難い天皇陛下のお寫眞の御前です。お行儀よくして心からお祝ひの式をしなければなりません。今日はこれからしつかりお行儀を習ひませう。と待ちわびる兒童の心を禮法の習得へ向けて行く。さて、便所を濟ませ、顏や手を洗ひ、服裝を正し、容姿を整へて講堂に向ふ。敎室を出る時から口を閉ぢて歩くやうに指導する。かうしたことは、式場にのぞむ心構を作るといふ點から大切である。講堂での指導は着席から始まる。

(1)　着席　講堂の腰掛への着き方、坐つてゐる時の姿勢について指導する。(ヨイコドモ上　敎師用書　七頁による)

(2) 敬禮　樂器合圖によつて、一齊にしかも靜肅に出來得るやうに指導する。(ヨイコドモ上　教師用書　十五頁による)なほ腰掛より立つたり、坐つたりする時、雜音が、式場の靜肅な空氣を亂すおそれがあるので、幾回か練習させる。

(3) 御眞影奉開　御眞影は天皇陛下の御寫眞である。この御寫眞はこの學校に下し賜はつた御寫眞で、學校中の者が眞心を以てお仕へ申し上げてゐることを教へ、御眞影の御前にあつては、言語動作を特に愼しまなくてはならないことを諭す。兒童は奉安所の御前での話を思ひ起してゐるであらう。

(4) 最敬禮　儀式中最も大切な最敬禮について、十分指導する。(ヨイコドモ上　教師用　二十二頁による)最敬禮は禮のうちでも最も丁寧な禮で、天皇陛下に對し奉つてだけする禮であります。明日は式の中で、たゞ一回、御眞影の御前で最敬禮をします。陛下に對し奉つてするのであるといふ心持を以て愼んでしなければなりません。と語り、その仕方についての指導を十分に行ふ。

(5) 君ケ代　君ケ代の歌詞について教へ、奉唱の指導をなす。特に君ケ代奉唱の際は服裝、姿勢を正すやうに教へる。又儀式中、歌唱の前後に咳拂ひをしないやう注意する。

(6) 勅語奉讀　校長先生がお勅語をお讀みになる時、天皇樣の御言葉を頂くのであるから十分注意しなければならないことを話しその禮法を指導する。(ヨイコドモ上　教師用書　二十二頁による)

(7) 勅語奉答歌　上級生が歌ふのを、姿勢を正して、靜かに聞くやう指導する。

(8) 學校長訓話　校長先生のお話を聞く時は、體を眞直にして、よく先生を見てお聞きするやうに話し、その指導をなす。

(9) 天長節式歌　天皇陛下の御誕生日を祝ひ奉る歌の意味を話し、靜かに姿勢を正して聞くやう指導する。

(10) 御眞影奉閉　御眞影奉閉の際の禮法を指導をする。

(11) 退場　退場して庭へ出る迄、愼しみの心を忘れないこと。天長節の一日をこの心持で暮すやう話す。

教室へ入つて、明日の式にのぞむ心構を教へる。

(1) 明日は一日、愼んで、樂しく暮すやうに。今日は湯に入り、早く寢るがよい。

(2) 明朝は早く起き、體を清め、爪などを切り、女子は髮をとかすがよい。

(3) 國旗を掲げること。(門の外より見て左側)

(4) 服裝・持物はすべて清潔にすること。
などを話せば、兒童は明日を待つ心で一杯である。

6　拜賀式のあと

拜賀式の壯嚴な雰圍氣につゝまれた中で拜する天皇陛下の御寫眞、君が代のひびき。この日大きな感激に包まれた子供達は、この感激の中に觀兵式のお話を聞きこれに因んだ學習をなしたり、その日の喜びを畫にしたりしたのであつた。

○ 丹波島川原

一　綜合授業指導計畫

綜合授業第十六指導計畫書

題目	十六　丹波島川原	要旨	六月の月次遠足に丹波島川原に遊んで體力を練り麥畠や川の觀察をさせ、自然に親しみ自然に學ばしめる。
指導要項		取扱場所	豫定
		時間	準備　連絡教科科目　同上題目及び主要事項
(一)綸圖調べ		教室　1	大綸圖・綸圖・家
(二)月次遠足		野外　一日	庭通知　古封筒・廣口瓶・自然の觀察　「麥畠と蟲とり」

	1繪圖 2麥畠と蟲と リ 3丹波島の橋 4川原遊び 5汽車 6歩行訓練			
(三)遠足の話し方・圖畫・綴り方		教室	2	記載用紙 圖畫・工作
(四)砂場遊び		砂場	2	大繪圖・砂場おこし・立てる繪橋の模型粘土・バケツ・スコップ
(五)體操		運動場	1	
				捕蟲網・籠から・胴亂

六月の麥畠で、麥の黃色にみのつた有樣や麥のとり入れを見せ、また草むらの中などに蟲を搜し、これを飼はせ、自然の中の營みに關心を持たせる。

「ハシレジドウシヤ」自動車のはしつてゐる所を寫かせて思想の發表をさせ、描寫の興味を起こさせる。

跳越　猫と鼠

二　週授業豫定表　十四、湯幅川原　十五、私タチノ身體　十六、丹波島川原

週	日	曜／時	1	2	3	4	備考
第五週	22	月	十四ノ(二)	十四ノ(二)	十四ノ(五)	十四ノ(一)	
	23	火	十四ノ(二)	十五ノ(三)	十五ノ(二)	十五ノ(二)	
	24	水	十五ノ(三)	十五ノ(五)	十五ノ(三)	十五ノ(七)	
授業豫定案	25	木	十五ノ(五)	十五ノ(四)	十五ノ(三)	十五ノ(五)	
	26	金	十五ノ(四)	十五ノ(五)	十五ノ(六)	十五ノ(七)	
	27	土	十五ノ(六)	十六ノ(五)體操	十六ノ(一)繪圖調べ		
	29	月	十六ノ(二)月次遠足	同上	同上	同上	
	30	火	十六ノ(三)遠足の話し方	十六ノ(三)遠足の圖畫・綴り方	十六ノ(四)砂場遊び	同上	

三　指導過程

(一)繪圖調べ(遠足の前日)

第一時　繪圖によつて遠足の目的地及び道順を調べて遠足の豫定を話し、繪圖に色を塗つてそれぞれの場所における兒童の既有の經驗や知識を發表せしめ、それを整理しつゝ遠足への意欲を喚起させると共に、遠足の計畫を豫め理解させる。なほ遠足についての家庭通知を渡す。

(二)月次遠足

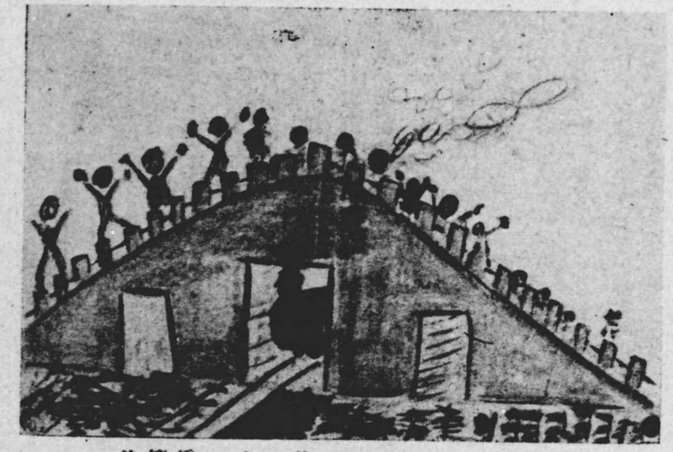
1　出發に際して、服裝、携帶品について遺漏のないやうに調査し、道路歩行上の注意をなして、主事や首席の先生に御挨拶をして出發。途中　繪圖をみながら町々や大きな建物を覺えて行く。

2　麥畠と蟲取り、第一の休憩地である美簑橋で打續く麥畠の樣子、麥叩きの有樣を觀察させ、刈取つた麥畠で蟲取りをする。

3　丹波島の橋の上から雨後の激しい流れを觀察させ、川原に下りては橋の全貌及び交通頻繁な有樣を觀察させる。

4　川原で晝食の食事訓練の後、川原遊びをする。

5　美笑橋上より汽車の觀察をさせる。



（作兒童）繪る見を車汽で上の橋笑美

6　學校間近い所から歩行訓練を行ふ。

㈢　遠足の話し方・圖畫綴り方（遠足の翌日）

第二時　遠足の大繪圖（兒童に渡した繪圖を擴大採色したもの）により、自由に發表させ、話し方の修練をなし、昨日の遠足の整理及び反省を行ふ。

第三時　遠足に於ける自由な思想の表現を圖畫及び綴り方によつて行ひ、それに關聯してエノホン一のハシレジドウシヤを扱ひ、表現への意欲を喚起するやう指導する。

㈣　砂場遊び

第四時　兒童が實際に歩いた場所を繪圖を見つゝ砂場の上に表現させ、模型製作の極めて初歩的な指導なし、手指の初歩的練磨をなすとともに、創作意欲を喚起し、協同作業の基礎を養ふ。

四　授業の狀況

遠足によつて兒童の環境は擴がりを持つ。兒童の探究心に對して新しく兒童の前に展開して來る文化的自然的環境は、豐富な內容を中に含みながら清新な姿を以つて答へて來る。「いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそめざむる心地すれ。」遠足に出かけた兒童は、眼前に展開する新しい世界を目の覺むる思ひで見るのである。その場、その場に卽した適切な指導を與へるならば、旺盛な生活力の輝やきをもつて見つむる兒童の眼に、生々と充實した學習がなされるのである。而しこの樂しい遠足の生活の中に生氣溢れる自然な健康な學習が行はれる爲めには、又充分な準備が用意されなければならない。變化多く內容豐かな遠足といふ學習環境は又それだけに、あまりに豐富なものめづらしさのために又時にはかへつて何もなさないで終へるといふ危險性も含んでゐるのである。遠足の機會を生かした指導がなされなくてはならないのは當然である。

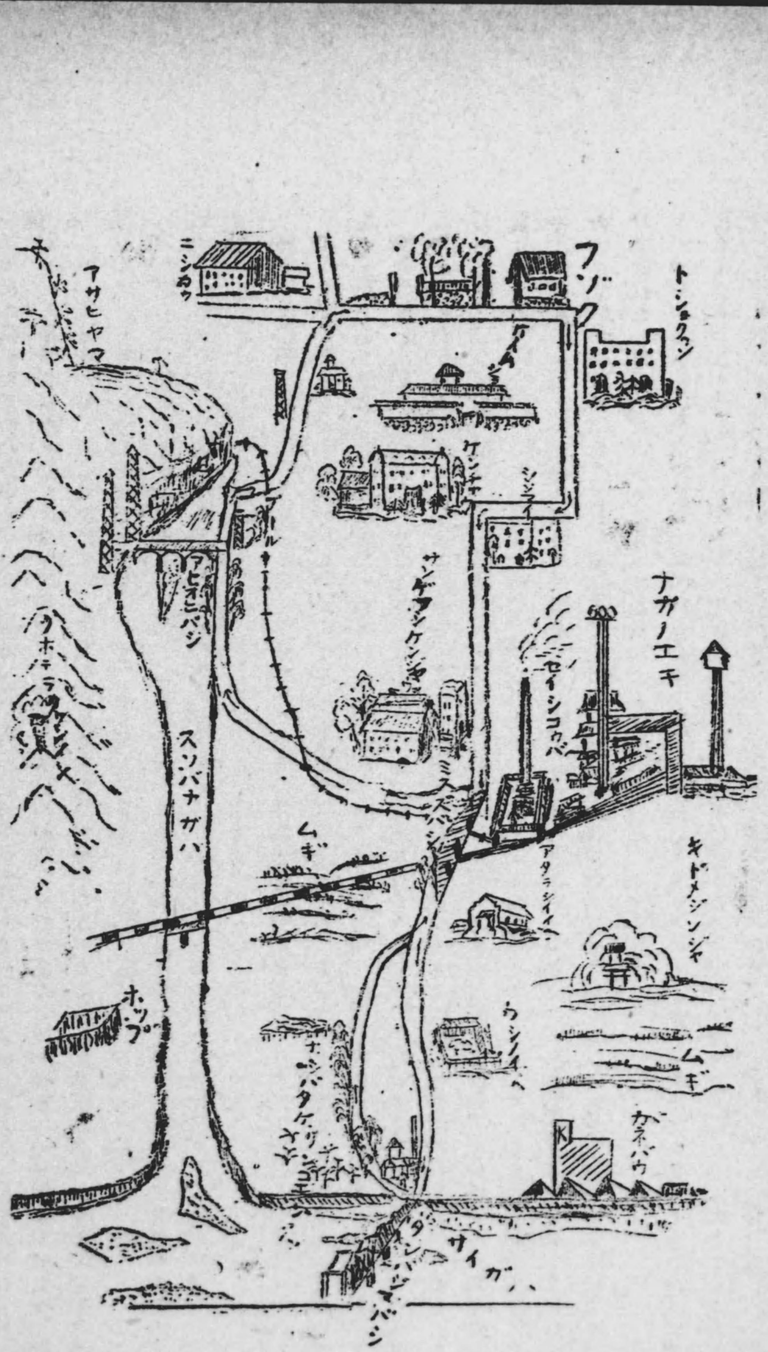
我が校には、遠足の系統案が出來てゐて、毎月の遠足の目的地の如きも初等科一年より高等科二年に至る迄一貫した指導の系統で考へられ學年の系統的發展の上に、季節やその他の教科・科目の關係を顧慮して、各期毎に目的地や順路が選定されてゐるのである。

かうした體系に則つて、こゝに十分な準備の上に遠足が實施されるのである。

更に遠足を實施する迄には、授業計畫に基づいた實地の下調査を行ひ、實狀に卽して更に案を檢討して、始めて實施案を樹立してこれによつて行ふのである。

敎師が自分の足をもつて歩いてみると、机上では思ひも寄らないやうな種々の問題が發見され、そしてこれは實施に際して有力な指導の參考を供してくれるのである。例へば時間に就いても、校門を出て校門に歸る迄子供の歩調で歩いてみて、必要な時間を計算し、出發・休憩その他の時刻を定め、かくして立てた時間の豫定こそ、實施に當つて眞に時間を生かし、隊の無い指導が出來、遠足の効果をあげることが出來るのである。その他參詣・見學・觀察の箇所や、飲料水の有無とか危險な場所など、必要な調査を十分になし、これに基づいた計畫案によつて指導されて、子供たちは樂しい一日の遠足をなし、その間に數多の學習をすることが出來るのである。その樂しさのうちに遠足ならでは得られない學習がなされるのが本題目の特質なのである。

この內容豐かな樂しい遠足は、その前後の日に指導されることによつて、更にその指導の効果をあげ得るのである。



1　讀圖と鄕土の觀察

我が校遠足の系統案として、讀圖についても指導が系統的に考へられてゐる。初等科一二年では繪圖を實地と見較べさせ、三年になると鳥瞰見取圖によつて實地と比較させ、四五年になるとこの鳥瞰見取圖とケバ圖によつて實地訓練をなすのである。更に六年に至つては、陸地測量部五萬分の一の地形圖による實地訓練をなす迄に至つてゐるのである。そこで一年の繪圖調べはかゝる高學年に於ける讀圖指導に發展する初步的なものとして、重大な意義を持ちながら兒童の興味の中に讀圖訓練がなされて行くのである。

次に遠足を通して行はれる讀圖の指導と極めて初步的な鄕土の觀察との實際について述べてみよう。

遠足の前日圖に示すやうな繪圖を渡すや、子供たちは「遠足、遠足。」と喜ぶ。クミノコヨミを見て日數を數へて待つてゐた遠足である。「何處へ行きますか。」―「丹波島川原、」と一齊に答へる。そこで丹波島について子供の知つてゐることが自由に發表される。川中島の親類へ行く時に自動車で橋の上を通つた者、螢狩りに家の者と一緒に行つたことのある者、日曜日に兄さんたちと共に川原へ遊びに行つた者などその時の經驗を話す。丹波島の橋について子供たちの知つてゐることは、「大きな橋だ。」といふこと、「鐵で出來てゐる。」と言ふことなどである。

次に順路について調べる。四月五月と二回の遠足によつて、道順は大體一人でたどれる。出發時刻、休憩地などの豫定について話す。

次に繪圖に色を塗る。自分たちの通る道、麥畠、梨畠、裾花川、犀川、旭山などへ色を塗り、初夏の自然を思ひながら、下調査の際採集して來た草や蟲などを見せて話合をする。かうした作業のうちにカタカナで記されたそれ〳〵の場所を讀んで、それについて知つてゐることを話合ふのである。

遠足の當日は歩きながら繪圖を見て行く。四月の遠足では、教室で喜んで繪圖を見た子供たちも遠足の當日は殆んど見ようとしなかつた。五月の遠足では自發的には休憩地で二三人が見たのみであつたが、六月になると、畫板には つた繪圖を首へかけて、道々見て行く者が多くなつて來た。繪圖を見ながら、如何にも面白さうに「信毎だ。信毎だ。」

など言つて、建物を指さす。そこで 信毎はどういふところか尋ねると、「新聞を出すところ。」「わたしのうちで新聞とつてゐる。」「信毎とつてる。」など話し合ふ。つき當りに見える縣廳を「刑務所だ」とKが言ふと、「地圖見よ、あれどの話が出る。繪圖によつて、最初に讀んで行くものは、道に沿ふ建物と休憩地である。「今度は海軍人事部だよ。」と言つたり、「先生、あれ山王學校?」と聞いたりする。

　農業試驗場を繪圖で讀みあてゝ「あそこ、農一杯飼つてる。」などといふ。最初の休憩地美慈橋近くなると、「今度は美慈橋。今に此處に着きますよ。」みな地圖で見て、「もう直きだ、もう直だ」と節をつけて叫ぶ。子供たちは異常な興味をもつて、繪圖によつて先へ先へと調べて行く。

　かうした發表する子供の言葉を中心として繪圖の觀方、鄕土の觀察の指導するのである。

「電車、電車!」ととHが呼ぶと、「電車じやないよ、ガソリンカーだ。」と既に乘つたことのあるらしいTが直す。他の子供はさうだと應ずる。ガソリンで動く、ガソリンカーと云ふ交通機關に對しては多くの子供の知つてゐるのに驚いた。麥畠の向ふを朝風をきりながらガソリンカーが走る。かういふやうにして、繪圖で調べながら目的地に着いた。

　川原で晝を食べた後、橋を眺める。大きな橋の上を人が通る。自動車が頻繁に走る。「乘合と貨物と競爭してる。」と皆立ち上つた。丹波島の橋が長野と川中島とを結ぶ交通上重要な位置にあることを知る素地を養ふことは、兒童が走る貨物や溢れるやうに人を載せたバスの行來を面白く眺めることによつて達せられるのである。

　川原で、今の鐵橋の前には木の橋がかゝつて居り、更にその以前は渡があつたことを話す。歸路、美慈橋の上で休んでゐると汽車が來る。汽車が自分の方へ眞向きに近づいて來るのを立ち上つて見る。「かもめ」だといふ。汽車がトンネルへ入るところを數へる。九台連結「短かいんだね。」とTが言ふ。「今のは新潟行きだよ。」と新潟へ行つたことのあるSがいふ。「汽車の中の人、手を振つてゐた。」とOがいふと「顏出した人、北海道の人だよ。」とKが言ふ。なぜ知つてゐるのか尋ねると、「親類の人に似てゐたもの。」と答へる。今度は逆な方面に汽車が橋下を通つて走る。みなで數へる、長い汽車である。「だん〳〵小さくなつちやふね。」とKが言ふ。「僕、この汽車に乘つた。」とSが言ふ。「この汽車は何處へ行くのでせう。」と尋ねると、伊那へ行くよ。」とSは答へる。

　子供は動くもの〻殊に遠い乘物などには非常な興味をもつのである。

　遠足の翌日は大きな繪圖を中心に昨日の話し會ひをし圖畫・綴り方を書いた。

ボクエンソクデキシヤヲミマシタ。キクワンシヤガ二ダイツナイデイマシタ。四十一ダイツナイデキマシタ。

ガソリンカーモミマシタ。

ハシノウヘデジドウシヤガキヤウソウシテキマシタ。

砂場遊び（準備。砂場を掘り起して平にして置く。大きな繪圖、厚紙へ書いた繪、厚紙で作つた橋、テープ、粘土、バケツ、スコップ）

　遠足後の砂場遊びは四月、五月と指導して來たところである。二回實施した上で感じたことは、

(1)　共同して作業することは非常に困難であること。

(2)　他との關係、全體としての立場から觀て行くことは殆んど不可能であること。

　皆共同して一つ仕事をしてゐるのであることを意識しない。自分で山を作つてゐれば、隣で川を作つてゐても踏んで平氣である。山を作る者は、自分の思ふやうに砂を盛り上げる。道を作る者は勝手な方向へ道をのばして行く。向ふの道を此方の道とつながるべきものが、それ〴〵勝手な方向へ行つたりする。互に助け合つて仕事を進めることは困難である。それぞれ自分勝手に振舞ふので、場所が狹くなり混雜する。これは四月・五月と次第に訓練されては來たが、この共同的な作業が、何時どんな形で子供たちの仕事の上にあらはれて來るかは興味ある問題である。

他との關係を見て作ることは更に困難なことである。四月の遠足において、兒童は貯水池に遊び歸校の途中善光寺を俯瞰して來たにも係はらず、砂場遊びで作られた貯水池は、善光寺より低く、善光寺は大きく立派な臺地の上に立派に作り上げられたのにも係らず、貯水池は低い小さな砂の上に作られたのである。かうした點から見ても、兒童の表現が如何に主體的であるか分る。砂場遊びと命名する所以も此處にあるのである。兒童が主體的な遊びの中に關係的、全體的な觀方が加はり、共同の作業が模型として一つのまとまつたものを構成するやう徐々に指導するのである。

さて、砂場の狀況の記錄を載せることゝする。

先づ持場を定めて仕事に取りかゝる。最初繪圖によつて、それぞれの位置を定める。山と川。山を作る者はどんどん砂を盛上げる。川を掘る者は、砂を運ぶ者にむかつて、「砂が一杯あつて困るよ。いくらでも持つて行つてをくれ。」「持つて行きますよ。」とバケツを提げた砂運びの者が砂をもらひに行く。

山を作る者たちは「もつと太くしれや。」「ばか、さはつてみろ、こんなにふにやふにやだ。もしもし砂はありませんか。」と呼ぶ。「早く來て下さい。」と言つてゐる所へ、「はい、どうぞお待ち遠樣。」と砂をあける。山を作る者川を掘る者、土を運ぶ者に、自らなる協力がなされてゐるのもおもしろい。

川を作る者は裾花川と犀川とを同じくらゐの大きさに作りあげてゐる。犀川の川原で遊んだ時と裾花川の畔で遊んだ時のことを思ひ出させる。犀川の方が大きい川であることは容易に氣づいて、川幅をひろげ、川の中へ白洲を作つたりなどしてゐる。

砂場遊び

山を作るところでは、「空色ないから、白でやれ、白でいゝや。」と言ひながら、眞上から砂をかげる。「山のてつべんから落ちて來る。」と喜んでゐる。山も少しく美觀を呈して來た。かうしたつまらないやうな點にも子供の工夫の力が伺はれておもしろい。

朝出發した學校の庭や麥たゝきを見た麥畠なども子供達に作られていく。麥畠に、かもじ草を取つて來て並べて、さして、麥畠の實感を出してゐる子。

「縣廳をころばした人　誰？　こらこら、Mさん、駄目ですよ。」と言ひながら建て直す子。

「縣廳こんな所にあるか」と繪圖を見て道に沿つて立てる子。

道を作る仕事は、相當に困難だ。町の道も滑らかに曲つて田舍道のやうである。そこを思ひ出させて、角をとらせる。子供たちは自分たちの歩いて來た道を、部分的には思ひ出せるが、大きな全體を想像し出すことは困難である。道に續いて丹波島の橋がかゝる。「道此處で止まるよ。今度は橋だ。」「橋、あんなに高いか。」と道より高い橋を直す。「先生、乘合と貨物と競爭やつてゐるたね。」と、「その時のやうにしてごらん。」といふと粘土の自動車をのせる。橋の上に自動車や人が載せられて賑やかになる。交通上の重要な丹波島の橋が砂場の上にあらはれた。兒童は正に行動的である。樂しかりし遠足も彼等の思惟の世界を通してよりもはるかに彼等の手先から砂上に形成される行動を通して、多く反省想起される。砂遊びによつて彼等は遠足の生活をくりかへし、樂しい遊びを通してかつて理解した環境を更に深く行動的に把握して行く力に驚かざるを得ないのである。

粘土で、人や自動車や汽車を作る。大きな汽車が二臺三臺と次第に線路の上で連結される。

四月五月に較べて、繪圖を見て仕事を進めたり、協同して仕事が出來るやうになつて來たが、折角作つた道を踏みつぶしたり、とんでも無いところにトンネルを作つたり、仕事からはづれて遊んだりしてゐる者もある。それらの子

供に仕事と方法を教へては、全部の子供が仕事に加はるやうにして來たのである。

出來上つた後、實地を思ひ出させながら、稱揚したり、まづいところを氣づかせたりして授業を終へたのである。

2　遠足に於ける自然の觀察

都市生活をする子供にとつては、遠足はこの上もない、自然の觀察の好機會である。

沿道の植物　道を歩きながら、子供たちは道に沿うた家の庭の花や畠の野菜に眼を止める。胡瓜・人蔘・甘藍・ゴバウ・里芋・茄子・葱など、子供に名を言はせながら、注意して觀察させる。里芋の葉にたまる露の玉に眼を止めさせたり。甘藍の上に蝶がひらひら舞ひ交ふ樣を見させたりする。甘藍の葉に穴が一杯あいてゐるのを見て子供たちが言ふ。「どうしたのだらう」といふと「毛蟲がたべたのだ。」と言ふ。穴をあけた青蟲を探して見せたいと思つたが見つからなかつたのは殘念であつた。

麥畠　休憩地の美蓉橋近く、實入つた麥畠が廣々と見渡される。刈り取られた束が行儀よく並んでゐる畠や、風に倒れた麥が續いてゐる畠、すつかり刈り取られたところ。

「麥、麥、麥。」子供たちは言ふ。長く續いた梅雨の後の麥畠に出て、あちらでもこちらでも麥たゝきをしてゐる。

さうした景色を見渡させながら、遠くの山、社の森、空の樣子などに眼を止めさせて、初夏の特徴を觀察させた。

麥たゝき　近くの畠の麥たゝきを見せる。パンパン打ちつけては、後へぽいと投げる、後の麥稈の束の山に一つ一つ

麥を見ながら「この前の遠足の時青かつたね。」とK子が言ふ。皆にこの前の遠足に雲雀の聲を聞きながら麥畠の間の道を歩いたことを思ひ出させる。あの時K子は「薄いのは小麥・濃いのは大麥」と言つたのを思ひ出す。

休む所に荷物を置かせて、麥畠に連れて來る。眞直に續くうねの間をのぞかせたり、麥と背較べをさせたりする。降り續いた雨や風の爲に倒れて、穗を土につけた麥から、綠色の芽が出てゐるのを見つけて告げる子供がある。又倒れたのを見て「これ、風で倒れたのだね、」と言ふ。倒れた樣子を觀察させる。穗に障つて「毛蟲みたいだ」などと言ふ。指でさはらせて觀察させる。

重なつて行く。少しも休まないで、働いてゐる樣子を見る。たゝいた束とたゝかないのを比べて見せる。前に積もる顆を手に載せて見せる。

道に上つて眺めると、何處も彼處も麥たゝきをしてゐる。遠くで大勢集まつて發動機で麥こきをしてゐる所もある。雨後寸暇を惜しんで働く、お百姓さんの樣子を見させる。たんぼの畦に赤ちやんを籠に入れて子守つてゐる子供たちも見受けられた。

叩いた麥を何にするかについて話合ひながら、今見た麥は自分たちの毎日の御飯に混るのであることに氣づかせる。その他、パン、ウドンなどに使はれるのもあることを話し、お百姓さんの苦勞や食物を粗末にしてはならないことなどを教へる。麥稈を一束シヤボン玉遊びに使ふやうに戴く。

虫取り　刈取つた麥畠で蟲取りをさせる。蛛蜘、蟻、雨蛙などを取る。取る前に蟲の動くところや住んでるおうちを注意して、教室へおうちを作つて飼つてやるやうに話して、取つたのを廣口瓶の中へ入れる。「ションベン蛙」とか「ありばゞ」など言ひながら持つて來る。蜘蛛の巢にとんぼをかけて、見てゐる子供がある。そこへ子供を集めて觀察させる。

苗代　道に沿うて苗代がある。子供に「これ何ですか?」と問ふと、「稻」といふ者と「麥」といふ者と半數ぐらづつである。都市に育つた子供はかうしたことは案外知らないのに驚く。「稻」で毎日頂くお米が出來るのであることを話してよく觀察させて置く。

川の流の觀察　橋の上から川下を見下ろす。「この水が海へ行くんだね。」H子が言ふ。眞下を雨後の激しい流が勢よく走つてゐる。「橋が動いてるやうだ。」「後へぐんぐん行つちやふよ。」「この橋、逃げてく。」と口々に言ふ。「水、動いてるからだね。」とT子が言ふ。

川の流の眞中邊に前の橋桁の跡と思はれる三本の棒杭のやうなものが、頭を水の中にかくして立つてゐる。流が激しく突き當り、水が盛り上る。白く泡が立つ。じつと見てゐると川をさか上つて來るやうに見える。橋の上から、驚

の眼を見張つて、話し合つてゐる子供たちの言葉を拾つて次に書き留める。

○

「魚、ゐるね。」「ほら、白い何か來るじやない。」「おさかなみたいな、ほれ　上つて來るじやない。」「魚つきり見てると、これ動いてるやうだね。」「だんだん、此方へ來る。」魚だと思つてゐる。

○

「白い石、ころんころん上つて來るよ。」「水潜つて來るやう。」と言つてる。いろ〳〵に見えるものだなと思つた。

○

「魚形水雷。」「魚形水雷、發射したんです。」と何時も戰爭の繪をかくNが言ふ。

○

「あれ、何だい。」「黑いのおさかなだよ。」盛上つたところは黑く見える。

○

「軍艦かや。」一番左のを指して、「此方の軍艦日本だ、とてもいゝや。」など言つてゐる。子供の觀察は全く主體的で想像的である。しかし、それぞれの言葉によく見ると實感が出てゐる。子供のこの自由な主體的な物の觀方をそのまゝ伸すことが、將來の客觀的に物を眺める力の地盤になるのではないかと思ふ。なほNは手すりに凭れて、「舟みたいに行く。」と橋が舟でもあるやうに、手を上げて別れる時の格恰をしてゐる。子供は何時迄も飽きないやうである。

今度は反對側に川の上流を眺めさせる。靜かな淺瀨が小さな波を立てゝゐる所がある。波の一つ一つが光つてゐる。「きれいだ、光つてる。」「魚が撥ねてる。」「魚みたい。」と言ふ。廣く靜かな淺瀨を「海みたい」といふ。海の歌歌ふ。雨後の增水も昨日あたりから急に水が減つたと思はれる。白洲に波の痕が模樣のやうになつて續いてゐる。「波のあとだ。」「波の形が砂に出來たのだ。」と言ふ。「あの砂の中に貝あるよ。」とE子が言ふ。雨後の流れを專らよく觀察させることに努めた。子供は非常な興味をもつて、觀察したが、尙子供たちの眼に留めなかつた、流に浮かぶ木の片、草、ごみなどや水のにごりに注意させた。

川原の石　割合子供たちに興味の薄いと思はれる石にも、機會を捉へて指導すれば、喜んで學習するものである。道でTが花崗岩の破片を拾つて、ぽいと捨てた。それを拾つて川原へ持つて來た。晝のあとで、子供を集めて、「ほう、この石光るよ。」と光に向けて動かして見せる。子供達はいろ〳〵の色の石を拾つて來る。「この石光るね。」と石を集める。色の美しい石を拾つて、子供同志較べあつて澤山集めた。形の變つた石を拾つて喜ぶものもある。持つて歸つて、金魚鉢へ入れたり、花壇に利用したりした。

川遊び　川原での晝食のあと、川へ入る。石を起して小魚の隱場所をさがしたり、手拭で目高の群を捕へようとして、一匹も捕れなかつたり、すいすいと水の上を走る長いあしのたいこんぼうを追つたり、何時迄も飽きない水遊びである。かうして、水中の小動物と親しみながら遊びのうちに、それ等の習性を學ぶのである。捕へたのは瓶や罐に入れて、教室へ持つて歸つて飼育するのである。大きな蒲を、根こぎにして教室へ植ゑると言つて持つて行く。歸りがけ川遊びの時の水、暑かつたといふ。歸る時に近くで麥をこくのを見てゐて、「ああいふふうにして藁にするんだ。」といふ。「草履を作るんだ。」とTが言ふ。草履にするのは稻わらであることを話してやる。林檎畠や梨畠やホップの伸びかゝる所など觀て歸る。

かうした遠足に於ける自然の觀察は遠足前に學習意欲を喚起し遠足翌日の話し方、綴り方と關聯して、これを整理し、更に蟲の如きものは飼育觀察を續けたのである。

○

タンポジマノハシノウエデミヅノナガレテイクノヲミマシタ。
サカナガオヨイデキマシタ。シロトクロトマヂツタサカナデシタ。

○

ボクハエンソクウレシカツタ。ソウシテボクハハシノウヘニタツタラハシガウゴイテキタ。ソウシテスイライミタイナモノガ川ヘナガレテ來タ。ソウシテボクハ川ヘハイリタイコンボウヲツリマシタ。

○

ワタクシハタイコンボウヲトリタイケレドトレマセンデシタ。タイコンボウハハヤクテワタクシニハトレマセンデシタ。イツシヤウケンメイトツテモダメデシタ。トウトウフエヲナラセラレテシマヒマシタ。

3　國語指導の面

遠足に於ける國語指導の面を抽出して見るならば、主として話し方・綴り方の發表面の修練がなされるのである。

しかし、隨時隨所に具體的な言葉を通して國語指導がなされたのである。

訛音の矯正　子供が我を忘れて叫ぶ言葉にその子供のもつ訛音が露出する、それをその場に卽した、雰圍氣の中に、自然に力强く矯正するのでなくてはならない。美濃橋へ近づいた頃、地圖を見て子供たちは「もう直だ、もう直だ」と叫んだ。中に「モージキラ。」と訛る子供がある。子供と同じ氣分に乘りながら、知らず知らずのうちに「モージキダ。」が自由に出るやうに直してやるのである。斯樣に遠足の日に矯正した子供の訛は次のやうなものがあつた。麥叩き—ムニ、タタキ。郵便自動車—ユービンジローシヤ。人蔘—ネンジン。橋が搖れた—ハシガユデタ。きれいだ—キレーラなどがある。

尻取り遊び　子供は以前に「シリトリアソビ」を學んだが、道を歩きながら、して行く。

「ボーシ　シカ　カヲス　スイカ　カメ　メダカ　カシ　シンマイ　イヌ　ヌカ　カミ　ミチ　チクワ　ワニ　ニッケー　ケートリ　リス　スマトラ　ラッカサン」

「サル　ルス　スミ　ミヅ　ズツク　クダモノ　ノリ　リンゴ　ゴトク　クシ　シシ　シリトリ　リス　スイカ　カヤ　ヤマ　マナイタ　タンポポ　ポンプ　プール　ルーズベルト」

語彙の豐かな子供はなかなか早い。大勢で次の言葉を考へて行くところに面白い語彙の指導がなされるのである。

この尻取遊びの言葉は翌日、その意味内容について問答し、語句の修練をなしたのである。

文字言語　の面では絶えず讀む機會を與へることが大切である。遠足の繪圖、展覽した動植物等片假名で名前を印し、讀む機會を多くした。遠足の往還に兒童の眼に觸れるものは漢字平假名が多く、機會は少くないのである。「コノニハデアソブベカラズ」丹波島近くの家の硝子窓に紙に書いて貼つてある。兒童は興味をもつて讀み始めた。すら讀めた者もあるが未だたどたどしく讀む者もある。讀めるやうに指導して、「どう言ふ意味ですか。」と聞くと、「ここで遊んじやあいけないと言ふこと。」とSが答へた。皆に考へさせると、「硝子がこはれるから、子供が此處で遊んではいけないのだ。」といふ。

話し方　遠足は話し方指導の好機會である。兒童が氣輕に話が出來るやうに、あらゆる機會に兒童の話し相手となることが出來たのである。廣々とした野外に出て、小鳥の鳴き聲や山のたゝずまひを見ては子供は殊更氣輕になり、話しかけるのである。兒童の個々にわたつて話相手となり、先づよき聽き手となり、言葉遣などの矯正は今後次第に行ふこととし自由に安心した言語發表が出來るやうに導いて來たのである。

綴り方　においても、誤字や假名遣などは次の問題にして、思ふことを自由に書かせるやうにし、しかも、强ひての表現を求めないのである。

ボクキノウキシヤヲミマシタ。

ボクハミスズバシノウヘデミマシタ。

キシヤニノツテキタヒトハテヲアゲテバンザイヲシテキマシタ。ボクミタキシヤハキクワンシヤヲ二ツツナイデキマシタ。ソレハカモツレッシヤデシタ。ボクハタンバジマデカハヘハイツテサカナヲツカメヨウトオモウケレドモアシガハヤクテツカマヘラレマセン。ボクタイコノヲミマシタ。タンバジマデカハヘハイツテサカナヲツカメヨウトオモウケレドモアシガハヤクテツカマヘラレマセン。ボクタイコンボウノアシノトレタノヲツカマヘマシタ。

以上の遠足における學習事項は、自然の觀察なり、國語的修練なりが、單獨に別々な機會になされるのでなく、そ

れぞれ具體的には分け得ない一つの生活の場において修練されるのである。ある一つの事象は一面數理的な修練として、取り上げられると同時に鄕土の觀察ともなつてゐる場合が多いのである。右に述べて來た遠足の學習事項は、そのうちの二三を記したものであつて、例へば汽車の數を數へたり、橋の形を觀察したりする、算數的な訓練と、音樂的な面の修練とかすべての學習事項が一體となつて指導されて來たのである。更に右に述べた外に、例へば步行訓練の如き身體鍛錬に關する指導、食事訓練の如き、生活の指導に關する事項等は遠足としては最も重要な訓練事項である。計畫案に示す通り實施して來たのではあるが、さうした點の詳述を省くことゝした。

次表は、生活題目「丹波島川原」の實踐指導の後整理記錄したものである。當校においては、毎月遠足の記錄を殘し系統案を修正して次回實施の參考に資してゐるのである。

遠足記錄　昭和十七年六月　初等科第一學年（1）

目的地	全粁程	實施前の準備事項	實地踏査	指導事項	準備品
丹波島川原	九粁	六月二十一日 日曜日	六月二十九日 月曜日	前日迄	教師
		實施時間 六時間	天候 前日 曇 午前 曇 午後 晴	○家庭への通知印刷 ○鳥瞰圖印刷兒童に配布、順路等に就いて指導する	ドーラン一箇、集氣瓶五ケ、空罐三ケ、捕蟲網、スコップ一〇ケ
		實施者 訓導 一名	出發 前日の注意	○元氣に行つて來ること ○列をよく整頓して步くこと	兒童 紙袋
			解散 午後一時五五分		
			出發 午前八時〇分		

出席狀況			
出席人數	缺席人數 病氣	事故	計
三六	四	〇	四

實施後の指導	反省感想	六月遠足指導要項　昭和十七年度　初等科第一學年（2）
解散前の注意	時期・目的地・順路、等	順路 距離（粁） 時刻 豫定 實施
歸校後に關聯して指導せる事項	其の他	注意事項
標本に作製せる植物	引率訓導	觀察事項
教材との關聯	擔任	參考資料
參考資料	補助	備考
學校	信前	信每
2km		
〇服裝檢査 ○便所へ行つて來ること ○手をつないで步くこと ○元氣よく步くこと ○列を離れる時は先生に言つてから離れること ○左側通行	圖書館	縣廳
〇藝能科圖畫と關聯して繪の指導 ○自然の觀察 麥畠と蟲取り 小川の小動物 ○蟲類の飼育 ○砂場遊び	神波訓導	
ガマ、トクサ、キツネガヤ、タチイヌノフグリ、トウダイグサ、カモジグサ、エノコログサ、ノビエ、ヤブジラミ、カバイモ、ナゲシ、ツメクサ、カハラマツバ	無	
一、時期は好適である。麥の收穫狀況小川の小動物等自然の觀察が非常によく出來た 一、目的地、距離等、適切 一、順路も適切と思ふ 一、午前中は曇で微風あり梅雨上りで氣持よく、午後晴天になり歸路兒童やゝ疲勞を感ずる		

美篤橋	八、四〇	八、三五	○帽子をまはさないこと ○てすりへ乗らないこと	麥畑 麥叩き、里芋、麥畑の蟲、蝶、汽車、ガソリンカー、陸稻、苗代、カンラン、ゴバウ、人蔘、茄子、紋白、紋黃蝶	自然の觀察 「麥畑と蟲取り」	
丹波島橋	九、五〇	九、五五 一一、五〇(發)	帽子をまはさないこと	橋往復一粁 ○長野市遠望 ○犀川と裾花川の合流 ○犀川の上流（犀口の遠望） ○川の流れ ○波跡 ○鐘紡工場 ○小川の小動物の採集 ○植物の採集 ○ツバメの觀察 ○トビの觀察 ○牛 ○小石の採集 ○桑グミ、林檎、梨 ○ホップ ○舟	自然の觀察 「小川の小動物」	「橋」に就いて、事務所の人の話、 橋の變遷について ①渡舟（一茶の句、北、南、西にも東にも三日月） ②舟橋（明治天皇御巡幸の時） ③木橋 ④鐵橋 昭和七年十二月完成 總工費八十八萬圓 着手昭和六年十二月 全長五四一米
九反						
美篤橋	〇、二〇	〇、二五(着) 〇、四五(發)	往の美篤橋と同樣	汽車	ヨミカタ 「イケニフネ」	

1.6km　1.8km　1.3km

相生橋	〇、五〇	一、一〇(着) 一、二五(發)	相當疲れたので元氣を出すやうに勵まし、歩行訓練をなす	前月の遠足の回想	
昭和通り					
刑務所前					
學校	一、四〇	一、五五(着)			

1.3km

○七夕祭

一 綜合授業 指導計畫表

綜合授業 第十九 指導計畫表

題目	十九 七夕祭	要旨	七夕祭を行つて國民的情操に培ひ工夫創造の精神を涵養する
指導要項	取扱場所	豫定時間	準備	連絡教科科目	同上題目及び主要事項
(一)七夕樣のお話 (二)七夕祭	教室 教室	1 4	星の繪 色紙・糊・紙捻・粘土・野菜・果物	算數	「七夕」兒童に形を作らせることによつて形量に關する直覺を一層明確にし且工夫創造の精神を養はふとするものである

(三)七夕祭の綴り方　教室　2　記載用紙　國語　「タナバタ」之を讀むことによつて、日本的なこの季節的行事の喜びを感得させる
圖畫
(四)七夕送り　裾花川　2　體　操　跳越・猫と鼠
(五)體　操　運動場　1

二　週授業豫定表　十九　七夕祭　二十　支那事變記念日　二十一　大詔奉戴日

第一週	日曜/時	1	2	3	4	備考
	土	二十ノ(一)	二十ノ(一)	十九ノ(一)七夕様のお話	十九ノ(二)七夕祭	
七月第二週	日曜/時	6	7	8	9	10	11	備考
	月	十九ノ(二)七夕祭	火	水	木	金	土	
		十九ノ(二)七夕祭	二十ノ(二)	二十一ノ(一)	二十ノ(三)	二十ノ(三)	二十ノ(三)	
		十九ノ(三)七夕祭の綴り方圖畫	十九ノ(三)七夕祭の綴り方圖畫	二十一ノ(一)	二十ノ(四)	二十ノ(三)	二十ノ(四)	
		3	4	備考				
		十九ノ(三)七夕祭	十九ノ(三)七夕祭の綴り方圖畫	二十一ノ(二)	二十一ノ(三)	二十一ノ(四)	二十ノ(五)	
		十九ノ(四)七夕送り	十九ノ(四)七夕送り	大詔奉戴日	十九ノ(五)體操	二十一ノ(四)		
		支那事變記念日				二十一ノ(五)		

三　指導の過程

(一)　七夕様のお話

第一時　七夕祭について問答をなし、子供の生活經驗を發表させる。次に七夕様のお話を聞かせ、子供の心を天上に向け、美しくやさしい行事七夕祭に對する意欲を喚起する。そこで、仕事の計畫について話し合ひ、七夕祭の準備に取り掛る。

(二)　七夕祭

第二時　先づ最初に色紙を與へて、四枚の短冊と一枚のしき紙を作らせる。この形を作る仕事によつて、形量に關する直覺を一層明確にし、併せて手指の初步的練磨をなしながら且工夫創造の精神を養はうとするのである。

第三時　短冊に七夕祭の言葉を書かしめる。子供たちは朝早く芋の葉の露を集めて來る。硯を洗ふ。そこで、どんな言葉を書くか話し合ひ、その言葉について指導しながら、筆で五枚の短冊に字を書かせる。

第四時　しき紙に七夕を祭る繪や言葉を自由に表現させる。なほ、その他、七夕祭の飾り物を自由に作らせる。

第五時　短冊やしきしの一端に紙捻を糊でつけさせて、竹の葉に吊るす。その際枝に附けた短冊やしき紙の敷へ方を指導する。その他の飾り物を附けて、長野の七夕祭の夜空を畫いた繪の前に飾りつける。なほ、野菜や果物、粘土で作つた果物などをお供へする。

飾り終つて鑑賞する。

(三)　七夕祭の圖畫・綴り方

第六時・第七時　ヨミカタ一タナバタを扱ひ更に七夕祭のたのしみを圖畫や綴り方に表現させて、この季節的行事に對する喜びを深める。

七夕祭の飾りつけをし、兒童の作品を展覽した前で、七夕祭のお話をさせる。

(四)　七夕送り

第八時・第九時　飾りつけた竹の枝を拂ひ、その枝を子供に持たせて、七夕様を裾花川に送る。

(五)　體　操

七月教材を扱ひ、體位の向上をはかる。

四　授業の狀況

清楚な竹に、七夕をまつるさまざまな言葉を書いた色美しい短冊やしき紙、それを吊して飾る美しい季節的な行事七夕祭を行はせて國民的情操に培はんとするのである。夏の夜空に輝やく美しい星、芋の露、供へ物に上げる果物、若竹にそよぐ涼風等。季節的な感觸を呼び起して止まないものがある。更にこの祭を行ふ過程には、未分化に國語・算數・圖畫・工作等の要素に關する學習が含まれてゐるのである。子供たちにこの行事を行はせて、七夕祭における生活指導を行ひながら、その學習の指導をなして來たのであるが、子供たちの實際は、單なる教科・科目の學習をするといふでなく、七夕を祭るといふひたむきな意欲の下に、これら一切の學習が營まれてゐたのであつた。授業の狀況を次に述べる。

(一) 七夕祭のお話

七月四日土曜日の第二時、次の如き問答によつて授業が始められた。

「みなさんは、七夕祭を知つてゐるでせう。」——「僕、七夕樣を川へ流した。」「僕も、裾花川へ流した。」

「みなさんのおうちでは、七夕祭には、どんなことをしますか。」——「竹を立てて赤い紙や白い紙を附ける。」「筆でね天の川、七夕樣つて書くの。」「僕のうちね、四本立てて一つばい附けた。」など口々に言ふ。

更に子供たちの意欲を七夕祭へと誘導するやう、カズノホンの挿繪を扱ふ。カズノホン一　二十一頁を開くや否や、

「みんな、七夕樣飾つてる。」「小竹に紙附けてる。」「二人で附けて、三人でしばつてゐる。」「色紙、きれいだなあ、赤・黃・青。」「十枚附いてる。」など、子供の口をついて次々に出る。そこで、子供の數や色紙の數を全體に數へさせる。次に、男の子と女の子が色紙を結び附けてゐることより、數の增減を扱ひ、更に色の指導をもした。挿繪を中心として、かうした話し合ひをしてゐる中に、「先生、僕たちにもさせて。」と、七夕祭に對する意欲が子供たちの胸に溢れて來た。

子供たちが家で書いたといふ天の川を知つてゐる子供は少くない。七夕祭の夜空を畫いた繪を見せながら、七夕樣のお話を聞かせる。子供たちは靜かに聽き入つた。かうして聽き方の指導がなされるのである。

話を終へて

「みんなで一緒に七夕祭をしませう。」と言ふと、大喜び。

「さて、どんな物を用意したらよいでせう。」——「竹」。と卽座に答へる。「竹は僕に持たせて下さい。」といふ。竹をNとTが持つて來ることになつた。

再びカズノホンの七夕の挿繪を開かせると、色紙の形には「ナガシカク」と「マッシカク」とあるといふ。「マッシカク」は「マシカク」と言ふやうに教へて、更に、短冊としき紙について指導し、これ等は次の時間に作ることにした。さうして、出來た短冊へは、六日の月曜日の朝早く、芋の葉の露をとつて來て、きれいに洗つた硯で墨を磨つて書き、しき紙へは繪や言葉を書いて飾ることに定めて、この時間を終へたのである。

(二) 七夕祭(短冊としき紙)

次の時間から、七夕を祭る仕事にかゝつた。この時間は先づ、短冊としき紙を作るのである。色紙を子供たちの前に出すと、手を打つて喜ぶ。

通り通りで紙をもらひに來る。來る子供は自分の通に必要な枚數を調べて言つて來る。子供たちと一緒にそれだけの枚數を數へて、それを渡す。短冊が更に一枚づゝ子供たちの机上に配られる。そこで、

「この色紙から、何枚このやうな短冊が出來るでせう。」と尋ねる。

一枚の色紙から四枚の短冊が得られることを大部分の子供は直覺した。中には五枚と言ふ子供もゐて、それをたしかめる方法を子供にたづねた。

○短冊を色紙の上に順に重ねて行く方法。

○鉛筆で、短冊をあてたところへすぢをつけて行く方法。

○四つに折つて合はせてみるといふ方法。などが上げられて、色紙を四つに折つて、四枚得られることが明らかにな

り、カズノホン一教師用書で示す切る方法も子供が工夫して、四枚の短冊を得、都合五枚の短冊を前にして嬉れしさうであつた。

更にしき紙を作ることになつて子供たちの喜びは増し、容易にしき紙を得る方法は工夫し出した。そして一枚のしき紙も加はつた。色紙からしき紙を切つた残りの小さな「ナガシカク」を前にして、まだ小さな「マシカク」も出來る」と三角を折つて「マシカク」を切つてゐた。しき紙を得た残りの「ナガシカク」から限りなく、「マシカク」が得られることを「いくらでも小さなのが出來る。」と子供が言つた。子供の數理的觀察力の鋭敏なのには驚かざるを得ない。色紙をとつた切端は長く綴つて、七夕姫の織物とし、紙を粗末にしないやうに教へた。

四月六日　月曜日

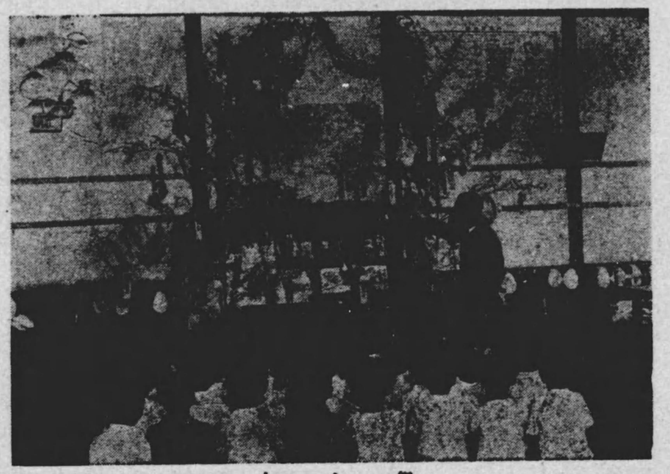
(三)　七　夕　祭　(飾りつけ)

朝早く登校した。天井に届くやうな竹をNとTは友達と一緒に運んで來た。子供たちは竹の周に集つて、今日の飾りつけを待ち兼ねてゐた。芋の葉の露を集めて來た子供たちも、びんに入れられた美しい芋の露を差し出した。朝露を蹈んで、芋の葉の上を、水晶か銀の玉のやうにころがる露を、芋の葉から集めて來た子供たちは身をもつて、よき自然の觀察をしたのである。それをいくつかのビーカーに集めた。きれいに硯を洗はせて、短冊に七夕祭の言葉を書かせることにした。

墨を磨ることは、今日の子供たちには如何にもたのしさうである。

「タナバタヒメ」「ヒコボシ」「アマノガハ」「七夕」「七月七日」「天の川」など、子供たちの言ふ言葉について話し合ひをしながら短冊に書かせた。漢字を書く時、非常な興味を持つて書く。「の」の字のまるめる所を教はるのを嬉れしがる。たのしい習字の學習であつた。

しき紙に星祭の繪を畫く。星を祭る言葉も書きたいものは、繪の上へでも、しき紙の裏へでも自由に書くやうに言つて、畫かせる。色紙の上に、色でかくので、暗い色と、明るい色の對照を考へざるを得ない。さうした點について



七　夕　祭

工夫させ、色彩感覺の修練をもしたのである。しき紙に書いた言葉に、子供の願を伺ふことが出來るのである。

○

タナバタノヒニドウゾテンキニオネガヒシマス。ナンブンテンキニオネガヒシマス。

○

七月七日ノバンドウカテンキニナルヤウニ。

アメガフラナイヤウニ。

オホシサマガデルヤウニ。

アマノ川ミエルヤウニ。

○

オホシサマ。

ドウカアメガフラナイヤウニ。オネガヒイタダキタイトオモヒマス。ソラハアヲゾラニシテクダサイ。

かくして子供の七夕を祭る一すぢの意欲とその喜びのうちに、算數、國語、圖畫の學習がなされて行く。

さて用意して置いた紙捻を短冊やしき紙の一端に糊でつけ、いよいよ竹の葉に結ぶことになる。竹がだんだん賑かに飾られるに隨つて、抑へきれない子供たちのぞよめきが教室に漲る。

共同の仕事で、その手配りや手順は子供たちには仲々困難である。その點の指導をする。一人一人の結ぶ短冊やしき紙、テープなどで段々全體の姿が出來上つて來る。

「その枝、黄ばつか四枚あるじやないか。」

「ここんとこばつか、澤山ついちやつた。」とか、言ひ合ふ。そこで、竹の枝は上へ行く程小さいから上の枝に少なく、下の枝に多くつけること、一つ枝に着ける數を大體同じくらひにすることを考へつかせて、一つ枝についてゐる數を數へさせ、色の配り合はせを考へたりなどして數へ方、色彩感覺に關する指導をしながら、よい位置につけ替へさせる。

星の繪の前に、すつかり飾りつけて、子供たちと一緒に眺める。

(三) 七夕祭の圖畫・綴り方表現

「七月七日ノバンドウカテンキニナルヤウニ。アメガフラナイヤウニ。オホシサマデルヤウニ。アマノ川ミエルヤウニ。」の子供の願に照應して「ヨミカタ一」タナバタの韻文は、

「タナバタノ
アマノ川。

ピカピカト
オホシサマ。

ニコニコト
オホシサマ。」

と五々の素朴な韻律をもつて應じ。讀むに隨つて子供たちの心に響いて行つたのである。

翌日七夕祭のことを綴り方と圖畫に書かせた。

○

キノウタナバタサマヲツクツテカザリマシタ。サウシテオゴチサウモカザリマシタ。オイモモカザリマシタ。

○

タナバタサマハニコニコシテキマス。

○

キノウタナバタサマヲツクツテカザリマシタ。ワタクシハカザツタアトトテモキレイデセイセイシマス。

○

タナバタヲカザルトキハウレシカツタ。キイロヤアカヤミドリノカミニ天ノ川トカ七夕トカカキマシタ。タンザクヲタケニツケタトキハオモシロカツタ。

○

タナバタマツリキレイダ。

トテモキレイダツタ。

ケフキテミルトカンジノガツイテイタ。ケフハオテンキニナツタ。

子供たちの圖畫を展覽した。子供たちは、自分等の協同で美しく飾られた七夕樣の前に坐つて、七夕樣のお話をした。子供たちの心は、遠く遙なる天上の星に向けられるのであつた。

○お天氣

一 綜合授業指導計畫表

綜合授業第三十八指導計畫表

題目	三十八 オ天氣	要旨	第一學期以來の天候の記錄を纏めて觀察し氣候觀察の初歩を指導する
指導要項	取扱場所	豫定時間	準備
	連絡教科目	同上題目及主要事項	

(一)この頃のお天氣「天氣」の記錄調べ	教室	2	觀察の記錄 自然の觀察
(二)各月天候狀態一覽表の製作	野外		自然の觀察
(三)各月別雨天日數表の製作	教室 2	同右記入用紙	算數
(四)觀察記錄	教室 2	自然の觀察記錄	自然の觀察
(五)算數的修錬	教室 4	積木	算數
(五)體操	野外及運動場 3		體操

二 週授業豫定表

十一月生活題目　三十六落葉、三十七買物ごつこ、三十八オ天氣、三十九物指、四十ストーブ

十一月	日曜/時	1	2	3	4	備考
第四週	17 月	三六ノ(七)	三七ノ(一)	三七ノ(一)	三七ノ(四)	
	18 火	三六ノ(七)	三六ノ(二)	三七ノ(七)	三七ノ(五)	
	19 水	三六ノ(三)	三七ノ(二)	三七ノ(四)	三八ノ(一)この頃のお天氣	
	20 木	三七ノ(七)	三八ノ(六)體操	三八ノ(一)この頃のお天氣	三八ノ(二)各月天候狀態一覽表	惠比須講

三 指導の過程

天候は人生にとつて極めて深い關係を持つ。農作物成長收穫はもとよりのことである。兒童の作る花畠の發芽から發育の狀況に關しても同樣である。更に衞生生活の上にも大きな影響を與へてゐるのである。のみならず、日常の生活が、雨天の爲に左右されることは決して少くない。樂しみに待つた遠足が雨天のために延期となつたり、炎天續きのために水道が斷水してお掃除の水に事缺いたりすることなどしばしば經驗してゐる所である。併しながら、かかる人生と緊密なる關係をもつ氣象現象も普通子供にとつては個々の出來としか受けとれないのであるが、繼續的な作業として記錄せしめて行く時に、自然に季節の推移に伴ふ天候の變化を認めることが出來るのである。かくして特に氣節風帶地域にある我が國の天候の狀態を作業を通して子供ながらに認識せしめ、天候・氣象と深い關係のある日常生活について思ひを致さしむるのが、本題目指導の趣旨である。

(一)　この頃のお天氣、「天氣」の記錄調べ

以前に取扱つた生活題目「飛行場」「落葉」に於ける自然の觀察の「とり入れ」「もみぢ」などと關聯しつゝ兒童を

豫定表

	21	22	24	25	26
	金	土	月	火	水
	三八ノ(二)各月天候狀態一覽表	三六ノ(一)	三七ノ(三)	三八ノ(四)修練	三九ノ(一)
	三七ノ(七)	三八ノ(三)各月雨天日數表	三八ノ(六)體操	三九ノ(四)	四〇ノ(五)
	三八ノ(六)體操	三八ノ(三)同上	三六ノ(八)	三八ノ(四)修練	三九ノ(九)
	三七ノ(二)		三八ノ(四)修練	三九ノ(八)	三八ノ(四)修練

西校舍周圍、運動場等に引率して、十一月下旬の氣候を經驗させ、秋空の美しさを十分に味はせる。次いで教室に於てその印象を語り合ひ、四月以來の各自の連續觀察の記錄中の「天氣」の樣子を調べて、その晴雨の狀態に氣づかせる。

(一) 各月天候狀態一覽表の製作

前項の記錄を一つの表に纏めて見ることに導き、四月以來の天候狀態の一覽表を作製せしめて、圖形の製作、統計の初歩を指導する。

(二) 各月別雨天日數表の製作

前項の圖表を擴大したものを一緒に觀察して、四月以來の晴雨の狀態を調べ、これから各月別の雨天日數表を各自に製作せしめ、これを觀察して、圖表の觀察處理及び差を求めることの指導をなす。

(四) 算數的修練

右圖表の觀察から、カズノホン(一)第二章「積木」「飛行機」の指導をなし、高さを比べて差を求めること、二數の差を求めることの修練をなす。

(五) 體操

右の間に野外及び運動場に於て十一月教材を適宜指導する。

四 指導の狀況

第一學期に、兒童が片假名を書けるやうになつた頃から、日々の學校生活の簡單な日誌を書き込む月別の用紙を與へ、それに月日、曜日、祝祭日、動植物の飼育狀態、學級園の樣子等を、月日、エウビ、ヤツタコト、ハタケ、天キ等の項目にして「私タチノ日記」として記入することを指導して來た。そして別に教師が四月以來同樣な項目について記入して來たものを印刷して兒童に與へて、これと合せて一年間の月別の記錄を各自に夫々作らせたのであるが、この中「天キ」については、それを晴、曇、雨、雪の四種に分けて、初めは「ハレ」、「クモリ」「アメ」等と記したのであるが、後にはその符號を教へて○◎●㊍の如く記入して記錄を續けて來た。この記錄は月を重ねると共に兒童は次第に興味を持つやうになり、各自のものを大切に保存して、それの增して行くのを樂しむやうになつた。第二學期に入つては兒童は自發的に毎日その日にあつた主な出來事や、天氣などに注意して記錄するやうになつた。本題目に於てはこの日記の中の天氣の記錄を表に纏めることを各自の作業とし、更にこれの觀察をなし、圖表の製作、引率指導等に及ぶやうにしたのである。

第一日には野外に於てきれいな空氣を胸一ぱいに吸ひ乍ら、日本晴の澄み切つた大空を仰ぎ、僅かに見える淡い雲の消失を見たり、立木、學級園の紅葉が日光に照らされて美しく輝く樣、或は稍肌寒くなつて來た、この頃の氣候を經驗させながら秋空の美しさを味ひ、翌日はこの印象を語り合ふと共に、近頃は雨が少くてよい天氣が續いてゐること。屋外で遊べるのでうれしいことなどから、反對に雨の多かつた時を問題として、そこで私たちの日記によつて、四月以來の天候の變化を調べてその晴雨の狀態に氣づかせ、(一)に於てこれを纏めて見ることにしたのである。先づ四人組毎に各自のものを比べ合せて相談させ、四月の初めから一日は雨、二日は晴、三日は晴の如く符號を區別して、それを日附の下につけて、月末迄記入して天候のみの表を作つた。兒童はかつて、豌豆の種子をしらべて、その數を表にして比較した時のことなどを思ひ出し、これに興味を持つて、更に五月以下は各自に印刷して與へた記入用紙へ丹念に記載して、四月以來の天候狀態の一覽表を次の如く作製したのであつた。

兒童の觀測した天候記錄の整理表の一部（昭和十六年度に於けるもの）

●…雨　◎…曇　○…晴　㊍…雪

四月	日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
	天氣	●	○	○	○	◎	●	◎	○	◎	◎	●	○	●	◎	○	○	○	◎	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	◎	◎	○

五月	日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	天氣	◎	○	●	●	○	○	○	○	◎	◎	○	◎	●	○	○	○	●	○	◎	○	◎	◎	◎	●	◎	●	●	●	○	○	○

六月	日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
	天氣	○	○	○	○	◎	●	◎	○	○	◎	●	●	●	○	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	●	●	●	◎	●	

七月	日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	天氣	◎	●	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	●	●	●	○	◎	●	●	○	◎	●	◎	●	◎	○	◎	○	◎	◎	◎	●	●

八月	日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	天氣	●	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	●	◎	◎	●	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	●	●	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	●	●

九月	日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
	天氣	○	○	○	○	●	○	○	○	○	●	●	◎	◎	●	●	◎	●	◎	◎	○	○	○	○	●	●	○	◎	◎	●	●	

十月	日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	天氣	◎	○	○	○	◎	●	◎	○	○	○	○	◎	●	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○

昨日（二十一日）迄の表を調べて黒丸は二つしかなかつたことによつて、雨天の多いのは七月と九月で各十日、雨の日數を數へて既習事項との關聯を保ちつゝ、兒童はこれから各月別の雨天日數表を各自が次の如く作製した。

次に整備したこの表を擴大したものを示して、これを觀察し、その符號の排列によつて晴雨の狀態を調べ、晴

四月	4	8	8	10	6	10	4
五月	8	8	10	10	6	10	4
六月	8	8	8	10	6	10	4
七月	8	8	8	10	6	10	4
八月	8	8	8	10	6	10	4
九月	8	8	8	10	6	10	4
十月	8	8	8	10	6	10	4

雨ガフッタ日ノカズ

製作後觀察をさせ、各自に考察させた時、兒童は先づ月別の雨天日數表によつて、雨天の多いのは七月と九月で各十日であること。その次は五月と六月で八つゝであること。最も少いのは四月と十月で四つゝ、八月は四んであることなどを發見し、十一月はどうだらうと言ふ者が出て　昨日（二十一日）迄の表で問題を作ることがすぐ行はれて、各月の雨天日數の比較から、8−4, 10−8, 10−4, 10−6, 8−6, 6−4 等の計算が行はれた。卽ち高さを比べて差を求めること、十以

下の二數の差を求めることが修練されたのである。圖に記錄することについては既に度々行はれて來た圖表の製作が思ひ出され、更に各月別の天候一覽表を調べた時、兒童は各自の「私タチノ日記」によつて、五月二十七日の海軍記念日には、鯉のぼりをつるして小運動會をやつたが、その朝は雨が降つて校庭がぬかつて、運動會が出來るかどうか心配したこと。六月二十六日には丹波島川原へ遠足に行つたが、歸りに雨にあつたこと。七月二十二日にシヤボン玉遊びをした時、屋外で出來なくて本校との間の廊下でやつたこと。九月十一日には「箱庭」が出來上つてみんなで調べたが、その日は前日から朝まで大變雨降りで心配したこと等を思ひ出して當時のことを語り合つた。その他六月十一日は入梅と言ふ日で、以後雨の降つた日の多いこと、この符號は天氣豫報の符號と一致することなどにも氣がつき、鄉土に卽した地理的指導の意味を採つた取扱も行はれたのである。この他、この題目の學習全般に關聯して、既に扱はれた教科書の教材の中の天候に關する事項も思ひ出されてそれらに關聯して取扱はれた。ヨイコドモ上「四、トモダチ」雨降りの日。ヨミカタ一「十二、ウシヒバリ」ソラガハレタキレイニハレタ。「十九、ヒカウキ」アヲイソラ、「二十五、アメガヤミマシタ」。「三十五、ユフダチ」。ヨミカタ二「二、アシタハウンドウクワイ」天氣の様子、「六、カマキリヂイサン」キレイニハレタ秋ノ日。自然の觀察一「十二、雨あがり」。ウタノホン上「四、エンソク」、ソラハアヲゾラヨイテンキ。「十一、タネマキ」マイタラ日ガテレアメガフレ。エノホン一「十七、アメガフル」雨降りの情景等が卽ちそれである。

これ等の指導によつて、兒童は更にこのやうな觀察に興味を持ち、十二月からは新しく雪の符號も出て來るやうになり、比較的抽象的になり易い氣候に關する觀察がこのやうな作業に依つて具體化され、生活化されて、一年間を通じて興味深く、繼續して、自發的に日記へ記入するその他の事項と共に、この天氣の記錄をつけて行くやうになつたのである。

○善光寺

一　綜合授業指導計畫表

綜合授業　第四十一　指導計畫表

題目	四一　善光寺	要旨	善光寺に參詣してその壯嚴なる規模に接し、圖畫、繪方等に表現することによつて一層尊崇の念を深め、歷史的感情に培ふ
指導要項	取扱場所	豫定時間	準備	連絡教科科目
(一)善光參詣	善光寺	3	記載用紙	同上題目及主要事項
(二)善光寺に關する既有知識の發表知りたいことの質問	學校	1		
(三)仁王門、山門、本堂等の附近を題材とする圖畫繪方の協同製作	善光寺及學校	4	記載用紙	
(四)善光寺に關する傳說	同右	2	繪圖繪地圖	
(五)鳩	同右	4	鳥の羽	
(六)「ハトポツポ」の歌	學校	2	鑑賞用音盤「小鳥屋の店」	
(七)體操	學校	3		

二　週授業豫定表

十二月生活題目　四十　ストーブ　四十一　善光寺　四十二　氷や雪

十二月第二週授業豫定表

日	曜	時	1	2	3	4	備考
5	金		四一ノ(一) 善光寺參詣	四一ノ(一) 同上	四一ノ(一) 同上	四一ノ(四) 傳說	
6	土		四一ノ(二) 善光寺に關することの發表	四〇ノ(一)	四〇ノ(八)		
8	月		四〇ノ(三)	四一ノ(七) 體操	四〇ノ(六)	四一ノ(三) 圖畫綴り方	
9	火		四一ノ(五) 鳩	四一ノ(三) 圖畫綴り方	四一ノ(三) 同上	四一ノ(三) 同上	
10	水		四一ノ(六) ハトポツポの歌	四一ノ(四) 傳說	四〇ノ(六)	四一ノ(七) 體操	
11	木		四〇ノ(六)	四一ノ(五) 鳩	四一ノ(五) 鳩	四二ノ(六)	
12	金		四二ノ(一)	四一ノ(五) 鳩	四一ノ(七) 體操	四一ノ(六) ハトポツポの歌	
13	土		四二ノ(四)	四二ノ(一)	四二ノ(六)		

三　指導の過程

(一)　善光寺參詣

二天門跡、仁王門と仁王樣、元善町のお土産物及び宿屋等道に從つて觀察し、本堂前において、大伽藍を仰ぎ、堂前の大香爐を拜觀せしめて、規模の宏大なるを感得せしめる。更に堂内に入り、奥深い堂内の尊嚴なる情景を眼のあたり拜せしめ、中陣に入つて、本尊阿彌陀如來を拜んで尊崇の念をいよいよ深めるとともにお宮やお寺に參拜する時の禮法を指導し、神社佛閣に對する心掛けを養ふ。

(二)　善光寺に關する既有知識の發表、知りたいことの質問。

參詣の翌日、今迄家庭その他に於て見聞して來た善光寺に關するお話や、自己の經驗した事柄など、思ひのまゝに綴り方に記述させ、善光寺に對する關心を深めるとともに、次の學習への誘導をなす。

(三)　仁王門・山門・本堂等の附近を題材とする圖畫・綴り方の共同製作。

四人組毎に場所を擔當せしめて、圖畫・綴り方の協同製作をなさしめ、これによつて、觀察力と表現力を練り、併せて協同作業の訓練をなす。

(四)　善光寺に關する傳說

善光寺參詣の際に、布引傳說に關する、繪や像を觀察することより誘導して、境内及び教室に於て、そのお話をする。又、指導要項(三)の協同製作の後これを鑑賞し、最後に本尊緣起の傳說を聞かせて、善光寺に對する尊崇の念をいよいよ深めるとともに、歷史的感情に培ふのである。

(五)　鳩

參詣の際に、善光寺境内において觀察せしめた鳩の增減を契機として、百までの數範圍における簡單な加減についての指導をなし、更にその計算練習をなして計算力の習熟をはかる。なほ、境内における鳩の觀察の折などに、その羽を拾ひ持たしめ、教室にて、それを飛ばしたり、水に濡らしたりさせて、自然の觀察の指導をなす。

(六)　「ハトポツポ」の歌

鳩の扱ひに關聯して、唱歌「ハトポツポ」を教へ、「小鳥屋の店」の音盤を鑑賞させたりして、音樂の指導をなし童心に培ひ、動物愛護の精神を涵養する。

(七)　體操

右指導の内に於て體操「十二教材」を取扱ひ、體位の向上をはかる。

四　指導の狀況

九月の生活題目として「お彼岸」を取扱ひ、善光寺に參詣して、これに對する尊崇の念を涵養するやう指導したのであるが、更に本題目「善光寺」においては、この全國的信仰を有する善光寺に參詣させ、これを圖畫・綴り方に表現させ、その持つ傳說を聞かせることによつて、一層善光寺を知り尊崇の念を深めるやうに導かんとするものである。

なほ、本題目はまた、低學年における國史的教材としての意味をも含み、上學年における鄉土の史蹟に關する史話と相俟つて、高學年國史學習へ發展する素地に培ふものである。善光寺に關する傳說は非常に多いが、本生活題目「善光寺」においては、指導計畫表㈣に示してある二つを扱ふことゝした。さて、かやうな觀點に立つて、授業にのぞんだ譯であるが以下、そのうちの二三を撰んで授業の狀況を記すこととする。

善光寺參詣

初冬の信州の空は冷く澄んで、陽の光も清らかに感ぜられる十二月五日、金曜日の朝、わが鄉土の名刹善光寺に參詣した。善光寺門前の大門町を上つて、二天門跡の立札を讀ませる。子供たちは讀むことを非常に喜ぶ。意味のわかるわからぬことは問題でなく、讀み得ることをたのしむかのやうであつた。二天門あとのことについて簡單に話して仁王門に進む。坊の名前や大本願について知つてゐる者もあつて話合ふ。

仁王門で仁王樣を仰ぎ、元善町の土產物賣店を見て進む。「牛に引かれて善光寺參り」この耳に聞き馴れた傳說を、土產物賣店の看板に畫かれた繪を見て「知つてゐる。」と言ふものがある。これは後で話してもらふことにして進む。かうした自然な動機を摑んで話し方聽き方の修練をなさうとしたのである。山門前に鳩が群がる。子供たちは鳩と遊びながら鳩の觀察をする。兒童が如何に興味深く觀察したかは、子供たちの描いた圖畫の作品に伺はれる。舞つてゐるもの、止つてゐるもの、水を飮んでゐるもの、豆賣婆さんに棒で追はれてゐるもの、人の肩にとまつてゐるもの等種々の姿が描かれ、而もそのすべてが足を赤く非常に大きく描かれてあつた。

鳩の觀察を終へて山門を仰ぐ。山門に掲げられた「善光寺」の額を指して讀む者もある。一緒に皆で讀んで見た。「お彼岸の時この上まで上つたよ」。と言ふ者があり、かうした話合の中に山門に對する理解が與へられた。

本堂前に於ては、大伽藍を下から仰ぎ見る、軒一ぱいの燕の巢を見て指すもの、高い上のものが小さく見えるとなどを話し合ひ、大香爐を見たりして規模の宏壯さがよく感じられた。

本堂の壇を上つた正面で一同揃つて禮拜しお戒壇廻りをする。初めての者もあり、知つてゐる者もあり、それ〳〵喜んで入つた。終つて中陣の廣間に坐つて本尊阿彌陀如來を禮拜する。常燈明がきらめき、香華の漂ふお堂內の奧深い情景に、兒童は一種の壯嚴の感に打たれたもの〳〵やうであるが、今更にこゝでは口を閉ぢ、無言のうちに拜禮して赤い柱を眺め、天井を見上げる。本田善光の像をも拜して靜かに本堂を出た。

本堂を出て堂邊を一巡し、柱の數を數へたり廊下を廻つたりして更に境內の牛の像の前で布引傳說について、兒童に話させ、不十分な點は補つて說話し、話し方を指導するとともに歷史的感情の啓培をなし、途中坊さんや全國より集り來た參詣の人々の間を縫つて歸校したのである。

仁王門・山門・本堂等の附近を題材とする圖畫・綴り方の協同製作

「今日は、あの大きく立派な善光寺を圖畫に畫いてみよう」。といふので、四人組が二組づゝで一場所を擔當して、その製作に取りかゝつた。分擔の場所は二天門跡、仁王門、山門、本堂前、本堂の內部の五つとした。

先づ教室內でその場の樣子を思ひ出して畫き始めた。畫くに從つて不審な場所は相談し、なほ現地に再び赴いて觀察し、或は各自仕事を分擔して製作したりなどして、適宜教師指導の下に、この協同作業は興味深く行はれて行つた。各組とも作業に熱中し、兒童の希望によつて全部を引率して再三現地に赴いて詳細觀察した。製作が進むに從つて、兒童達は或は參詣の人を畫いて切り抜いて貼つたり、鳩の姿態を切り抜いて貼つたりなどした。かうした點にも兒童の自發性が伺はれた。

かくしてひたすらなる意欲の下に各組の協同製作が完成すると又實地に赴いて比較したり、更にそれを綴り方に表現したりして、それ〳〵緻密な觀察が行はれ、善光寺そのものが一層深く印象づけられて行つた。

出來上つたこれ等の繪は、翌日學級全部で鑑賞し、それを中心に話し合ひ、最後に善光寺本尊緣起の傳說を兒童たちは興味深く聞いて感銘を與へられた。

次に載せた兒童の綴り方は各組の協同製作によつて成つたものである。

十二月九日作

善　寺

二天門ノアト。（第二組）

○

ワタクシタチハ、二天門ノトコロヲカキマシタ。二天門ノアトデシタカラ門ハナイデス。ネエサンカラ、二天門ガモトアツタトキハ赤門ダツタトキキマシタ。ソレデ二天門ノアツタトコロノソバニハ、カウバンヤ、トウロウヤ、水ヲノムトコロヤ、ハタヲタテルトコロガアリマシタ。

ニワウ門。（第四組）

○

ニワウサンノカホハ、オツカナイカホデシタ。ダケドエデハカワイラシクナツテシマヒマシタ。人ガイツパイ來マシタ。ソシテ店モアリマシタ。ソレカラサン門ガ見エマシタ。

サ　ン　門。（第五組）

○

サン門ノソバニ、ハトガキマシタ。ハトガ水ノソバニタクサンタクサンキマシタ。ハトガマメヲタベタリ、シテキマス。ハトガトンデキルノモキマシタ。イロンナハトガキマシタ。サウシテ、オキセンセイガ、マメヲカツテクダサイマシタ。ソレカラオキセンセイト、オクムラセンセイガ、マメヲ三ツヅツクダサイマシタ。サウシテ、ハトニマメヲクレマシタ。「ハトコイコイ」ト、イツテクレマシタ。

（作製同協の童兒）寺　光　善

本ダウ前。（第七組）

○

オンナノ人ガダンヲオリテ來マス。ムカフノツチノ上ニオンナノ人ガフタリト、オトコノ人ガフタリアソンデキマシタ。ムカフノ方ニ石ドウロウガアリマシタ。窓ニハハトガイツパイトンデキマシタ。ボクタチハ、センソウノトキデスカラ、マケナイヤウニオガミマシタ。

（第八組）

○

ゼンクワウジヘイキマシタ。イツタライツパイ、イツパイ人ガキマシタ。シヤシンヲウツシテキマシタ。ハトガキマシタ。ダンタイモキマシタ。ゼンクワウジノオカイダンニハイリマシタ。ボクハ、オカイダンノカギヲ、ガチヤガチヤヤリマシタ。ミヤウチサンハ、コハクナイトイツテ、ガンバツテキテアトデコワイトイヒマシタ。ソレカラ、オカイダンヲヒトマワリシテ、出テ來マシタ。ソシテコンドハ、ニワウ門ノニワウサンヲ小サクシタノヲ見マシタ。オダウノダンハ十アリマシタ。オダウノ中ニアカリガツイテキマシタ。

本ダウノ中（第九組）

○

イリグチノトコロニタイコガタクサンアリマシタ。タイコノトコロヲ、オバウサンガ「ドンドン」トウチマシタ。モウヒトツハ「チンチン」トオトノスルカネデス。ソレカラムカフニ、アカリノラウソクガタクサンアリマシタ。ソレカラ、天ジヤウニキンデ、トテモピカピカスルモノガアリマシタ。オマキリシタトキハ、トテモシヅカナヤウナキガシマシタ。中ニハオバウサンガイツパイアリマシタ。タクサン見エマシタ。ソシテ、大キナアカイマルイフトイ、ハシラガアリマシタ。天ジヤウニハシカクナアカイ、イロヲシタノガ、イツパイアリマシタ。オダウノ中ニオカイダンガアリマシタ。

オダウノヨコデ、ヘイタイゴツコヲシマシタ。ソウシタラ、ダイカンジンノオシヨウサンガ出テオイデニナリマシタ。ボクハヘイタイゴツコヲヤメテ、レイヲシマシタ。オシヨウサンガイツテシマヒマシタ。ソレカラマタヘイタイゴツコヲシマシタ。ソノトキ西ダクントフクハラクント、フジハラサンヤ、スズキサンガ、オダウノ方ヘイツテキマシタ。オダウノマハリノハシラハ五十二ホンアリマシタ。ソレカラ、ハトノハネヲヒロヒマシタ。ソレカラオダウノリヨウガハニテツノ水ヲタメルノガアリマシタ。トウロウモタツテキマシタ。オジザウサマモタツテキマシタ。水ヲノムトコロガアリマシタ。ソレカラ、ナフコツダウノモケイモアリマシタ。タテフダモアリマシタ。オダウノジムシツモアリマシタ。ソノ中ニ、オマモリサンヲウツテキマシタ。ドコカノ人ガマメヲカツテキマシタ。ソシタラソコヘ、ハトガ、ソノ人ノカタニトマツテ、バタバタ、アバレテキマシタ。ソシタラ、ソノ人ハコマツテキマシタ。小サイ子ガマメヲウツテキマシタ。オキセンセイガ、マメヲカツテ、ミンナニワケテクダサイマシタ。ボクガマメヲモツテイツタラ、ハトガヨツテ來マシタ。ボクノカタヤセナカヤ、イロイロノトコロニ、トマリマシタ。フジハラサンヤ、イヒジマクンヤ、ニシダクンヤフクハラクンタチハ、ムカフノハウデヤツテキマシタ。イヒジマクンノカタヤ、セナカヤイロイロノトコロニトマリマシタ。フジハラサンノカタヤ、セナカニトマツテキマシタ。フクハラクンノカタヤセナカニ、トマツテキマシタ。ニシダクンノ、カタヤセナカニトマツテキマシタ。オキセンセイノ、バウシヤ、カタヤ、手ヤ、セナカヤ、イロイロノトコロニトマリマシタ。オキセンセイハ、ワラツテキマシタ。オクムラセンセイハ、ヨコノ方デ見テワラツテキマシタ。ボクモ、サイトウクンモ、ミヤサカクンモ、西ダクンモ、イヒジマクンモ、フクハラクンモ、ミンナワラツテキマシタ。サン門ノトコロニハ、イツパイ、イツパイ、ツバメノスガアリマシタ。サン門ノトコロニゼンクワウジトイフ、フダノヤウナモノガアリマシタ。イケノスナガ、ミンナホツテアリマシタ。六ヂザウガ、アリマシタ。イケニ、タイコバシノヤウナハシガ、アリマシタ。カメハ、ミエナカツタデス。イケノムカフニハ、大カンジンガアリマシタ。イケノスナハ、六ヂザウノトコロニ、山ノヤウニツンデアリマシタ。ボクハ、ハジメ六ジザウノトコロニアルスナハ、ナンダト、オモヒマシタ。ソシタラオキセンセイガ、アレハ、イケノスナダトオツシヤイマシタ。ソシタラ、ムカフノ方カラ、ジドウシヤガブート來マシタ。ソノジドウシヤヲシヤシンヤサンガ、ウツシテキマシタ。ソレカラスコシオリテキタラオミヤゲ店ヤ、イロイロノミセガアリマシタ。ソレカラ二ワ門ガアリマシタ。二ワ門ノトコロニ、ニワウサンガ、オツカナイカホヲシテ、タツテキマシタ。ソレカラ、大本ガンガアリマシタ。ソレカラクリヲウツテキル人ガアリマシタ。サイフヲウツテキルオヂイサンガアリマシタ。ミカンヲウツテキマシタ。ソレカラ、ダンタイガオホゼイ、トホリマシタ。オヂイサンガゾロゾロトホリマシタ。ソコニハ、ボクノシラナイ人バカリデシタ。ソレカラ、フジキサンノマヘヲトホツテ、ギンカウノマヘヲトホツテカヘツテ來マシタ。

○お客樣

一　綜合授業指導計畫表

綜合授業第四十六指導計畫表

題目	四六 お客樣	要旨	比較的多くの來客に接し訪問の機會も亦多い年末年始の後を受けてお客樣に關する禮法の實踐を指導する。		
指導要項		取扱場所	豫定時間	準備	連絡教材科目
(一)お客樣の經驗發表 イ、お話 ロ、圖畫		教室	2	修身	同上題目及主要事項
(二)お客樣接待の禮法 イ、迎接の際の禮法 ロ、訪問の際の禮法		教室	1	修身	「オキヤクサマ」禮法生活の想起 お客樣を迎へた時 他所へお客に行つた時のお話、圖畫 「オキヤクサマ」 迎接の禮法及び長上に對する禮法
(三)禮法の實習 イ、準備 ロ、實習	禮法教室		2	修身 茶碗、茶托、菓子皿、盆又は小蓋、急須、茶菓、菓子箸	「オキヤクサマ」 客に對する挨拶の仕方茶菓の運び方すゝめ方の實踐 「キマリヨク」 坐つた姿勢及び坐禮

二　週授業豫定表

一月生活題目　四十五　兵たいごつこ　四十六　お客様　四十七　日なたと日かげ　四十八　節分

一月　第五週授業豫定表	日／曜／時	1	2	3	4	備考
26	月	四五ノ㈢	四四ノ㈣	四四ノ八	四五ノ㈢	
27	火	四五ノ㈣	四五ノ㈥	四六ノ㈠お客様の經驗發表	四六ノ㈠同上	
28	水	四六ノ㈡お客様	四六ノ㈢禮法實習	四六ノ㈢同上	四七ノ㈡	
29	木	四五ノ㈡	四五ノ㈣	四七ノ㈡	四五ノ㈣	
30	金	四七ノ㈡	四七ノ㈣	四七ノ㈣	四七ノ㈢	
31	土	四八ノ㈢	四七ノ㈢	四八ノ㈨		大掃除

三　指導の過程

第三學期は、第二學年の分科的取扱に移行する前提をなす時期である關係上、その授業も亦次第に分科的傾向を持つやうに考慮しなければならない。生活題目は生きた生活自體から取材される故に、あらゆる錬成面を含んだ全一的綜合體に外ならぬが、特にその一つの面を抽出して修練することが試みられ始めるのである。本題目の如きもこの意味を持つもの〻一である。

「お客様」は禮法の指導に重點を置いた生活題目である。年末年始の時期は一年の中で比較的來客に接することが多く、その接待の手傳ひをなす機會も亦多く、或は親類などの他所を訪問してその接待を受けることも度々ある時節である。このやうな生活の後を受けて、それ等の生活經驗の發表をなさしめ、これに卽して禮法に關する心得を論し、長上に對する禮法、兒童相應に果し得る茶菓の運び方、客に對する接待の仕方等の實踐を指導するのである。

㈠　お客様の經驗發表

お正月を中心として兒童の來客に對する禮法生活を想起せしめ、お客様を迎へて接待した時のこと、或は他所を訪問して接待を受けた時のことなどの經驗を話させ、又その時の狀態を圖畫に表現させてその態度・情景・用具等についても具體的に想起せしめる。

㈡　お客様

ヨイコドモ上「オキヤクサマ」を教材として迎接訪問の際の禮法、及び長上に對する禮法について自覺させる。

㈢　禮法の實習

客に對する挨拶の仕方、茶菓の運び方用具の名稱及びその取扱ひ方を具體的に禮法教室に於て實習し、禮法の實踐を指導する。

四　指導の狀況

今玆に指導要項㈢に於ける禮法の實習についての具體的に記して見ることにする。

先づこの取扱に含まれる主要なる事項は次の如くである。

1　ヨイコドモ上「十七オキヤクサマ」の取扱

イ　讀み　自由讀、指名讀

ロ　問答　掛圖觀照

2　禮法の實習

イ　挨拶の仕方、出迎への實習
　客に對する挨拶の仕方
　出迎へと取次ぎ
ロ　茶菓の運び方進め方
　用具の準備、名稱の指導
　茶の運び方進め方
　菓子の運び方進め方

3　整理、說話

初めにヨイコドモ上「オキヤクサマ」の讀みを行つた後、その掛圖を鑑賞して、前時に學習した「オキヤクサマ」の說話を想起してその情景を味ひつゝ、お辭儀、挨拶、茶菓の運び方進め方に注意させ、皆さんもこれからお行儀よく出來るやうに習ひませう。」とて實習の心構を作つた。

實習に於ては先づ全員にて客に對して坐つて應答する挨拶の仕方を取扱つた。卽ち先づ、「上手に坐るにはどうすればよかつたでせう。」との問に對して兒童は以前に習つた坐り方を直に思ひ出した。次に「お客樣にはどんな風に挨拶しますか」。とのことを考へさせながら、先づ姿勢を正して先方に注目し、上體を徐に前に傾けると共に、兩手を膝前に進め、指尖の間を十糎位とし、頭は座面より十糎位の所まで下げる。そして、寸時その姿勢を保ち、後徐に元の姿勢に復することを話し敎師が示範して行はせる。次に挨拶の言葉「イラッシヤイ」。「イラッシヤイマセ」。「オイデナサイ。」「コンニチハ」、等を定めて、挨拶をしながらこれ等の實習を各自向き合つたもの同志で行はしめ、敎師はその結果を觀察して個別に指導をしたのである。

次に來客を出迎へる時の態度に及び、これも全體にて行ふことを考へさせ、男女に分れて相對して訪問の組、迎接の組とし、相呼應して應對せしめ、次でそれを交替して行つた。

(1)　出迎へ　立つた姿勢の組は立禮して「ゴメン下サイ。」と言ふのに對して、迎接の組は坐禮して「イラッシヤイ。」又は「オイデナサイ。」(女子は「イラッシヤイマセ。」)と言ひ、尙男子は「コンニチハ」と言ふことも適宜加へた。

(2)　次に取次ぎの組では

「オカアサンガイラッシヤイマスカ。」と言ふのに對して、「ハイ、ヲリマス。少シオ待チ下サイ。」と答へ、又は「ドウゾオ上リ下サイ。」といふ仕方に導いた。

茶菓の運び方進め方では、前日にこのことを兒童に豫告して、用具のある者には家から持參させておいた「茶托」「茶台」「盆」「小臺」を取出して用意させ、その名稱と取扱ひ方について指導し、更にその全體の數を數へさせ、どんな風にやつたらよいかを考へさせた。その結果學校備付けのものも合せて二十組の用具を用ひて矢張り全員を二組に分けて、主人の組と客の組とに分け、主人の組の進める茶菓を一方の組は受けつゝその所作を見學するやうにした。

茶の運び方進め方は、先づ客の組の正面に運び、坐つて茶托を兩手に持ち、客の前に進め、菓子の場合も同樣に客の組の正面に運び、坐つて菓子を客の前に進めることを指導し、また卓子を用ひる場合についても話してきかせた。

整理に於ては、ヨイコドモ上「オキヤクサマ」の挿繪にある私、母、オキヤクサマを兒童の中より選ばせて、以上の實習の實演を再び行はせて、他の兒童に見學させた。

終つてから用具の整理をなさしめて、その數量を調べ、取扱ひ方の注意を與へて持ち歸るものを處理し、尙お父さんやお母さん、お客樣など目上の人に對しては言葉遣ひを鄭重にし、呼ばれた時は元氣よく「ハイ」と返事をすること、お留守番の時などにお客樣がいらつしやつたならばどうするか、を考へさせ、その時は丁寧に挨拶して留守であることを告げ、お客樣のお名前と御用をお聞きしておくことを敎へ、また近所の人に逢つた時は何時でも丁寧に「オハヤウゴザイマス」、「コンニチハ」などと挨拶することを指導して終つた。

この授業に於て、兒童は終始眞面目に、而も落着いた氣持をもつて行ひ、言語動作もすべて眞劍な態度で、お互に

主人、來客になり切つた氣分を持つて實習し、單なる遊びとしてではなくして、よく禮の雰圍氣を體得して、次第に實踐に及ぼすやうになつたことが認められたのである。

第四章　綜合授業實施上の諸問題

第一節　綜合授業の反省

當校に於ける綜合授業は、國民學校制度の實施に先立つこと既に一ケ年、師範學校附屬國民學校の使命に鑑み、進んでこれが實施研究に當り、及ばずながら苦心經營して今日迄三ケ年に及んでゐるのである。今、この間の授業の實際について反省して見る時、尙解決すべき幾多の問題が與へられてゐるのである。而も、綜合授業の組織たるや實に複雜多岐であり、從つてその研究の部面も極めて廣汎に亘るのであつて、凡そ綜合授業の困難なことは當局が示す愼重なる態度の中にも窺ひ得られる如きものがあつたのである。その故に、實施の結果に對する考察や判斷に於ても簡單に論評し得べき性質のものでないのはもとよりである。且又、單に形の上に現れたもののみによつて成果を論ずることの妥當でないのも亦言ふまでもないことである。寧ろ、綜合授業の結果に對する成否の判斷は兒童が上學年に進んで展開する諸能力、諸成果と合せ考へて初めて下さるべき性質のものと考られねばならぬであらう。併しながら、今玆に過去三ケ年の綜合授業研究實施の報告を公にするに當り、その主なる點の反省について記し、大方の參考に供したいと思ふ次第である。

一　綜合授業學級兒童の學力

先づ第一に、過去二回に亘つて送り出した綜合授業教室の初等科第一學年の兒童が、第二學年の教科の分科學習に圓滑に移ることが出來たといふことを報告しなければならない。心身發育の未分化の特性に順應して、彼等の生活を通して未分化的、全體的、根源的に教育して行く綜合授業に於ては、果して初等科第一學年の課程を十分に消化し、第二學年教材に無理なく接續する學力を身に着けさせることが出來るであらうか、といふ杞憂は誰しも持つ所であらう。然るにそれが單に杞憂にすぎなかつたといふのは當校に於ける立案が、既に明らかに論述し、又その實際に於て報告せるやうに、「生活題目」選擇決定の際に初等科第一學年の教科書の教材內容を悉くこの生活題目に包括せしめ、全一的生活の間に具體的に會得するやうに計畫されてゐた故に外ならなかつたと考へられるのである。ここに、國民學校に於ける綜合授業の特質に鑑み、生活題目取扱に於ける指導要項の計畫立案の重要なる着眼とこれに對する緻密なる心構の必要とを思はざるを得ないのである。

二　全一的人格の育成に向ひ得たこと。

分科的抽象的教育に陷入ることなく、兒童の心身を一體とせる全生命の全一的修練が出來たことを思ふものである。凡そ、わが綜合授業にあつては、鄕土の環境の中にあつて、それが文化物・文化現象にもあれ、自然物・自然現象にもあれ、總べてその中に沒入して生活することから學習が始まるのであつた。從つてその生活自體が兒童の志向する目的であつて、この目的達成の爲の諸計畫や動作や表現や思考やは正にその手段に外ならない存在にして、この故に兒童が生活する「生活題目」の營みの結果を抽象分析する時に成立する諸要素に、分科的修練の意味附けとその位置決定とが施し得られるに過ぎないのであつた。かかる觀點に立脚する綜合授業の特質の然らしむる所として、心身不離、知行一體の錬成がなされ、決して學問の授與、知識の修練に盡力沒頭する如き抽象的教授、主知主義の教育に流れることはなかつたのである。この點に關しては、第三章に於いて述べた授業の實際を考察する時一層明確にされることであらう。例へば、生活題目、「天長節」に於ては、天長の佳節を壽ぎ、聖壽の萬歲を祈り奉る心情に溢れて、この儀式行事を實踐し、心身知行不離一體の全一的人格の育成がなされてゐるのである。而も、天長節を待ちわびる心のもとに、奉安所を中心とする生活をなし、天皇陛下に對し奉る敎へを受けて、一層國民的情操に燃えて、更に佳節に臨み、佳節を壽ぐ實踐的修練として、國旗日の丸の旗の製作、儀式禮法の體得がなされて行き、やがて當日

の拝賀式の感激的實踐となり、更にこの日の樂しい反省となつて幾多の表現的生活を營んだのである。この際、日の丸の旗の製作が直接目的として工作の指導を意味し、工作のための工作に終るのでもなく、數の加減も形の觀察も、算數のための算數に終止するものでなく、それ等は實に天長節奉祝の生活事實として、歴史的な現實に於ける兒童の全生活活動の全體を遂行するための必要に應じて、情熱的に營まれる必然的な生活要素として定位されなければならぬ學習に外ならなかつたのである。民族的傳統精神に基づいて二星を祭る「七夕祭」の生活題目指導が、お星樣のために祈り祭る兒童の全生命の活動として展開し、その全體的錬成の中に、その目的達成の諸要素として、諸々の營みを通して學習せしめてゐるのも亦同樣である。正に、綜合授業は認識に出發する主知主義思潮の弊を一掃して、生命の全體的な啓培育成にあづかつて力ある授業の形態であることを知らなければならないのである。

三 活動性・勞作性の助成に力あつたこと。

兒童はその本性の然らしむる所、洵に生活力旺盛にして、活動性に富んでゐる。然るに、綜合授業は、未分化の發達段階にある兒童をして、全一的根源的生命の營みに基づいて全體學習を營ましめ、その受容樣式としては直觀的具體的體驗的原理を原理として營ましむる學習に外ならなかつた。この故に、綜合授業はその形式に於ては、兒童生活の展開そのものと言つても過言ではあるまい。かかる綜合授業の必然的要請として、兒童の原本的な生活活動を要求し、これが又、彼等本然の性格をなす彼等の活動性と緊密に結んで、愈々その活動性を助長し、且それが指導の計畫性と結合して彼等の勞作性を助成すること甚だ大であつたのである。今その一例を擧げるならば、動植物の飼育栽培及びその愛護觀察の一環境として學級園の經營をしたことについてである。

綜合授業學級は約二アールの面積の學級園を經營し、ここを一つの重要なる生活環境として飼育栽培の生活が營まれたのであつた。ここには花卉が植ゑられ、馬鈴薯、甘藷、綿、大根、落花生等が栽培されたのであるが、彼等には觀察の對象といふよりもむしろ作る對象育てる對象に外ならなかつた。育てること、作ることのために彼等は放課後などによく學級園に群がつたり、日曜なども畠の見廻りをし、灌水などの世話に興がつてゐるのを見受けたのであつた。開花收穫の時の兒童の喜びは絶大なものがあつた。地中から莖なして掘られる赤褐色の甘藷をはじめて見る喜び眞白き大根を數へながら積んでゐる兒童の笑顏。かくして、收穫の喜びは勤勞の樂しみを喚起し、自ら進んで小さい手と乏しい力ながら、嬉戲として勞作にいそしんでゐたのである。

そしてこの働きは、他の總べての活動に於て見られたと同樣に、先生の力を借りながらも、彼等の自發性に基づいた活動であつたことを思ひ出すのである。正に、彼等にとつては、學ぶことを持つといふより、働くことがより大きな存在である。

圖　畫（兒童協同作）

四 個別的指導と協同學習の指導がよく出來たこと。

家庭生活の營みの中から、新らたに入學して來た兒童は、その精神的發達に於ても又、身體の發育に於ても一樣ではない。この懸隔の甚だしい力を漸次接近させなければならぬのであるが、ここには一齊指導を本體とする教室に於ては仲々の困難が伴ふことは言ふまでもない。所が、綜合授業はその主體が既に生活である。生活は一切を含む全體的性格を持つが故に、易と難と、輕と重と凡そあらゆる程度の事柄の系列をもつてゐるのである。この故に、如何なる能力の子供でも何れかの仕事の何れかの點には好んで手が出せる道があるのである。ここに生活を通した、個別指導が容易になされる道があるのである。況んや、教師主體の一定知識の授與にあらざる、兒童自身の力に應じた生活形成を指導するに於てをやである。例へば、數の把握の隔離も、机に着けて一齊に一定基準迄引き上げやうとする時は、力の優劣の差の甚しい兒童の取扱ひが圓滑を缺くのであるが、自然物の蒐集を通し、砂場の遊

びを通し、凡そ生活の中に數の把握を求むるならば比較的無難な指導が果されるのである。卽ち兒童は活動を愛し、生活に沒入してその營みを繼續する。石を並べ、花を並べ、これを數へたり模樣を地面に描き出したり他心がないのである。かゝる間に、個々の兒童の相手となり劣れるものはその力を助長し、優れるものは更にその工夫を助成する如きはこれである。尙又、兒童は學級生活に馴れ協同意識が發生して來るに從つて、快活な活動性を多分にもつ子供から先にお友達の生活動作に口を入れたり、助力したりして、相互扶助の素朴な社會性を發揮して、この個人差の緒少に貢獻するのであるが、それにも增して協同學習精神の涵養とその實踐の美點を取り擧げなければならない。生活題目を生活し、その間の作業に於て勤勞に於て自然に發生した協同の心は、やがて、協同作業、協同製作等の高次な協同性へと發展したのであつて、こゝに一入社會協同體を維持すべき根源の精神に培ひ得ることを思ふのである。例を擧げて見るならば、二アールの學級園の經營に於ける如き、或は圖畫工作模型の協同製作の如き皆それでその實相を見ることが出來る。

尙この他に、自發性を長養して能動的に積極的に學習する傾向も認められ、又生活そのものが常に計畫や處理を伴ふ處から、自然に工夫する心、創造の念を養ひ得たことも亦大いなる長所と言はなければならないであらう。生活題目中に含まれた諸種の作業や協同製作中にもこの工夫の姿がしばしば現れてゐたのである。例へば、五月の「海軍記念日」には、兒童の砂場遊び中に作られた大きな軍艦の模型の仕上げをして喜んだのであつたが、兒童は軍艦の繪や寫眞を見て研究したり、軍艦の胴體の赤色部を作るのに煉瓦粉を澤山作つて塗ることを考へ出したり、靑色部や波の部分は瓦のかけをすつた粉末や、色白墨を利用することなどを發見したり、又區劃された線を表はすには石灰を用ひればよいことなどを考案してその製作を進めて行つたのである。又、冬が近づくに從つて、お日樣の日射しがだんだん北の方へやつて來ることに興がつてその日脚の伸びるのを實測したり、ストーブの周圍に吊した書初だけが風もないのに舞ひ上つてゐるのに不審を抱いて、ストーブに火が燃えてゐるためであることを發見したり、或はドングリコマの製作から重心の位置の最も良い點を考へ合つたりしたのである。生活を現實に營まんとする時兒童には兒童なが

らに素朴な工夫創案が伴ふことをつくづく思はざるを得ないのである。

五　環境による兒童創造性の開發

綜合授業の學級は特別なる教室と施設とを所有してゐることは次節によつて明らかな所である。教室には凡そ家庭生活、學校生活に必要不可缺なものは一應準備されてゐるのであつて、この施設や調度品が自然のうちに、兒童の心を惹き活動を起さしむることが非常に多いのであつた。例へば野外に於いて捕獲した小動物は、教室の机上に置かれた幾つかの飼育箱を想起して、直ちに持ち歸つて飼育せんとする心を惹起せしめる。教室の一隅の蒐集物陳列棚は、白樺の花でも栗のいがでも凡そ目につく面白い自然物の採集陳列を要求するのである。兒童は實によく集めよく捕獲したのみならず、よく整理して處理し、育てることに興がつた。凡そ如何なる兒童も常に環境の中にあつて、環境を對象に生活し、その生活を通して種々なる事柄について學習するのではあるが、綜合授業學級兒童の如くその生活對象に計畫的持續的研究の興味を持ち、採集と飼育と處理とに心掛けるものは少ないだらう。綜合授業學級では正に、教室の施設環境に觸發されて、兒童自ら生きた教室環境を作つて行くのである。

六　修練の不足になり勝な點

數に關する修練や、文字の習得等については、その修練の機會が不足勝になる恐れが認められよう。併しながら、文字に關しては、兒童の表現意慾が旺盛であり、從つて比較的早くからその修練を開始し、あらゆる機會をとらへてその指導をしたので、繪と文字、繪と文章とをしきりに表現し、大部分の兒童はお話をそのまゝ文の形に綴れるやうになつたのであつた。次にかゝげる作品は六月十日のものであるが(1)(2)(3)(4)は比較的能力の劣つた兒童の作であり(5)(6)(7)(8)は上に屬する兒童の作であるが、凡そこの程度に習得することが出來たのである。

(1)ヘイタイサン　アリガトオ。カチマシタカ。

(2)ヘイタイサン　ゴクロサマデシタカ。ニホンノテッカブトアルネ。

(3)オベンタウヲモッテキマシタ。オカアサンニオベンタウヲ　ツクッテイタダキマシタ。

(4)ヘイタイサンシナノカタナ　ブンドリマシタカ。

ヘイタンサン　ゲンキデスカ。オキズ　イカガ。

(5)ヘイタンサン　オゲンキデスカ。ボクハ毎日學校ヘキテ　ベンキヤウシテキマス。イマニ大キクナツタラ　日本ノ兵タイサンニナッテ　テガラヲタテマス。フゾクノ一年生。

(6)ヘイタイサン　アリガトオ。ヘイタイサンゴクロオサマ。シナノヘイタイヲゼンメツシテ　シナノコドモト　イシヨニアソンデクダサイ。ボクタチモ　ガッコオデオモシロクアソンデイマス。ヘイタイサン　シナノ　ヘイタイサンハヨワイデショ。

(7)オベンタウノオカズ。オベンタウノオカズハマメ。ソシテオベンタウハオイシカッタ。アア、ウレシイヨ。オベンタウハオイシイナ。オイシイナ。アアヨカッタ。ヨカッタヨ。ウレシイヨ、ウレシイヨ、アアヨカッタヨ。アアカヘラウヨ。マアチヤンカヘラウ。アアウレシクナッタヨ。

(8)ガッカウデハジメテタベタトキハ、ゴハンガタリナカッタ」ウチヘカヘッテカラ、「モウスコシイレテ。」トイッタラ、ツギノヒカラタクサンハイッテキタノデ、タベラレマシタ。

これは、「ヨミカタ」學習と同時に、又それ以外に於ても、あらゆる機會に表現させ、表現することによつて文字を習得する方法によつた効果であつた。

以上の如く、綜合授業による時、特に文字習得の不足や修練の不徹底はないのであるが、唯これは修練の機會を多く求め、練成意圖のもとに學習指導した結果であつて、若し單に生活活動を肉體的な動作活動に止めるならば、或はこの文字習得に於ても、又その修練の機會に於ても、こと缺くことがあらうかと思ふものである。

算數に於ても、基礎的事項の修練の欠け易いことを警戒しながら、基礎的な主要事項は意志的に修練させる態度をとつて行つたのである。僅かに生じた空時間や、天候の變化によつて急に豫定を變更した場合などを利用して、その修練の機會としたのである。更に夫々の指導の段階にある成績を時々考査してその調査に基づいて、欠陷はこれに修練を加へて救濟するようにしたので、計算練習の如きも、その力の不備を來たさなかつたのである。例へば十二月末に於ける初等科第一學年全兒童の調査に於て、比較的修得困難であつたと見られるものは綜合授業の組に於ても、然らざる組に於ても漢字に於ては新、庭、走、列、唉、病、呼、妹、急、消等であり、平假名に於ては、ぬ、ゐ、わを、む、ち、る、そ、れ、ゥ等であつた。或は基數の加法に於ける 3+4, 4+3, 4+6, 3+6, 2+7, 3+7, 2+6, 2+8, 1+7, 1+5 等や減法に於ける 9−7, 8−3, 10−7, 9−6, 9−3, 8−6, 9−4, 10−8, 8−1, 7−3 等が抵抗あるものであつた。これ等は何れも綜合授業の組と然らざる組とに區別を見なかつたのである。これ等は以後機會ある毎になるべく修練するやうに努めたのである。

七　躾・訓育の問題について注意を要すること。

生活を原理とする學習であるから、兒童の表現的・活動的・作業的訓練はその活動を通して躾けてゆくことが出來るのであつたが、その反面、靜座して謹聽する如き受容の生活樣式の躾については、十分の注意を以て指導に當らなかつたならばその効果を擧げ、徹底を期することが出來ないやうに考へられるのである。

以上、綜合授業實施の結果を反省しその主要なるものについて記したのである。

第二節　綜合授業に關する施設

兒童の毎日の生活の中で最も大きな影響を與へるもの〳〵一は環境である。人を育てるものは環境であると言はれる程、環境は教育上大きな役割を持つ。環境とは兒童の生活に影響を及ぼす一切のものを意味する。綜合授業に於ては兒童の學習環境を殊に考慮しなければならないことは言ふまでもない。

今これについて考慮すべきものを擧げて見れば

一　教室設備

綜合授業の教室設備

準備する。兒童の讀書力は、ヨイコドモ、ヨミカタ等の教科書のみには限られない。これは向後當然考慮されるべき課外讀物の指導の問題と共に重要視される事項である。

○繪本としては、ノリモノチシキ(武井武雄)、ムラノコドモ(武井武雄編)、ハトポッポ(鈴木としを畫)、天まであがれ(與田準一編)、金太郎(幼年繪本研究會編)、桃太郎(同上)、ドウブツノチエ上下(武井武雄編)、オヒサマトオツキサマ(武井武雄編)、ヒカウキ(幼年繪本研究會編)、カハノタビ(武井武雄編)、海ノノリモノ 幼年繪本研究會)、ヒロヲニイチヤン 與田準一)、ミコチヤンナコチヤン(與田準一)、三匹ノクマ(高橋五山編)、オサルサン(高橋五山編)、エサガシアイウエオ(高橋春雄編)、オソラハヒロイ(與田準一)、オトモダチ(木村みさを畫)、ユリカゴ(秋吉英彦畫)、カハイイオウタ(武井雪夫編)、ワンワン物語(サトウハチロウ譯)、ハクラク動物(與田準一)、太陽ノ子供(奈街三郎)、海ノコドモ(與田準一)、ハナトコドモ(セイコウ社編輯部編)、マルイセカイ(阪見緋佐子畫)、オソラヲトバウヨ(西田稔編)、等である。

○お母様の童話(武田雪夫)、らくだの耳(長尾豊)これ等は兒童に讀んで聞かせるによい。

1　圖書類　繪本・雜誌・低學年向讀物等をなるべく豊富に

○カタカナ童話集(坪田譲治)、カタカナ童話集(徳永すみ子)、ウマ(田村欣三)、廣介童話名作選(濱田廣介)、ニゲタカメノ子(濱田廣介)、一年生綴方繪本(百田宗治)、以上はすべて文部省推薦圖書である。

○オモヂヤノクニ(與田準一)、海のエホン(奈街三郎)、オサルノエウチエン(松葉重庸)、ボクノ見タ蒙古(選聖歌)、ヤギトヒツジ(選聖歌)、ヒカリトソラマメ(與田準一)、ヤマノムラ(熊谷元一)　以上文化協會推薦。

○この他、日本童話一學年(濱田春夫)、童話讀本(沖野岩三郎)。コロチヤントオートバイ(與田準一)、オヤマノカキノキ(百田宗治)、ヨイ子ニヨイユメ(後藤楢根)、學校家庭の兒童劇一、二年用(兒童劇協會)、童話一年生(童話研究會)、小學生童話一年(徳永スミ子、村田花子)等もよい。

2　玩具類

兒童の教育的玩具は、又幼學年兒童には重要な意味を持つてゐる。現在我が國に於て教育的な玩具が非常に缺乏してゐることは考慮を要する問題である。

玩具は兒童にとつては生活を構成する一要素として大きな役割を持つものである。兒童は必ず何等かの玩具を作つて、遊び又それを生活の素材とする。玩具は兒童にとつては正に精神的な食糧である。而も教育玩具は決して高價な、美しく用意されたものを要しない。木片でも木の葉でもよく、一本の竹の棒も直に騎兵の馬となる。これと共に兒童には單に飾つて眺める靜的なものよりも、所謂動くもの、構成するもの、科學的玩具が必要である。そしてこれ等は常に自由に積んだり、こはしたり、動かしたりして十分に使用し、親しませることが大切である。

○輪投げ道具、繩飛び繩、コマ、マリ

○カルタ、一極立方體、スゴロク、數字カード、數字サイコロ、積木類

○砂場遊び、水遊びの道具、人形類、兵隊ごつこの材料、お客遊びの材料

○ハーモニカ、木琴

これ等は又理數科方面、藝能科方面の教具類と共に、兒童には自由に十分使用せしめ親ませるやうにする。

3　その他次のやうなものは設備したい。

○柱時計、日めくり、月曆表、時計盤、寒暖計、米尺、三角定規、コンパス
○水漕、ビーカー、シヤーレー、試驗管、アルコールランプ、フラスコ
○飼育箱、蟲籠、植木鉢、如露、根掘り、空鑵
○石鹼、ウガヒ藥、洗面器、藥鑵、檢溫器
○小刀、鋏、金鎚等の工作用具、粘土がめ、粘土板
○數字板、數圖表、片假名圖表、平假名圖表、五十音圖表、漢字表、暗算練習圖表、和音圖表等
○額、鑑賞畫、揭示板、鏡、花瓶、本立、兒童用棚、兒童用具掛け
○ラジオ、蓄音機、オルガン等
○小黑板、方眼塗板、兒童用黑板
○觀察臺、實驗臺、同上腰掛
○世界地圖、大東亞地圖、日本地圖、長野市地圖、地球儀
○掃除用具、習字用具、屛籠
○鉛筆、クレヨン、消ゴム、等兒童に貸與し得るもの

4　教室はなるべく廣く、（當校教室は五間に六間）、明かるく、通風よく、窓も兒童に準じた高さであり、兒童の座席以外に共同作業などもなし得るやうな廣い餘裕を持ち、又色々の棚を多く設けるがよい。

そしてこの教室にはその學校の特別教室にあるやうな全教具が小規模の形で備つてゐる方が効果的である。而もこれ等の中には、教師が工夫し、製作出來るものが多く寧ろその方が教育的價値が高いのである。

又綜合授業を實施する教室は獨自な樣式位置を必要とする。階下であつて、校庭へ出るに便利であり、水呑場、便所、下駄箱に近いこと、なるべく他學年の教室から離れてゐること等の條件が必要である。

二　教室外の設備

なるべく教室に近く遊び用具を豊富に備へ、手輕に使へるやうにする、砂場、理科園、農場、池、禽舍、等は是非欲しい設備であり、運動具としては滑り臺、シーソー、ブランコ、鐵棒、低鐵棒、等が必要である。尙校地內に針葉樹濶葉樹の木立、小川、草原、等があれば非常に結構である。

三　自然的環境

就學前兒童は絕えず周圍の自然的環境によつて、その精神生活の上にも、健康生活の上にも、生活の潤ひや豊さを患まれて來た。入學後と雖も兒童の生活は依然としてこの自然的環境に繫るのであつて、これがまた鄕土愛の精神涵養の第一步ともなるのである。自然的環境に於ける學習材料の研究は特に重要視すべき事柄である。

當校に於て平素常に接する自然的環境の主なるものには、旭山、鄕路山、賴朝山、水道山、等があり、又城山公園湯福川、裾花川、鐘鼓川、師範學校本校運動場、農場、櫻枝町、立町、旭町、若松町、大門町、元善町、西長野、狐池、妻科、加茂神社、妻科神社、城山縣社、善光寺、湯福神社、細神社、加茂國民學校、等の文化的環境がある。更に月次遠足及び夏期修養會の指導系統案に從つて擴張される環境には、展望道路、安茂里阿彌陀堂、飛行場等とその順路に從つた地域がある。

四　實際上の問題

以上によつても判る如く、綜合授業のために希望する環境設備は極めて多い。從つて直に問題となることはその經費の多額に上ることであり、到底現在の狀態にあつては一般にこれを實現することは困難である。而しこれは理想的要求である。經費が潤澤で學習環境が充實し、施設が立派に整備されることは望ましいことではあるが、一面これは指導者の考へ方の問題である。少い經費をも生かして使ひ、足らない點は教師の努力と熱意とによつて或程度償ふこ

とは出來る。教育は物によつてなされるのではない。教師の不斷の努力研究によつて、與へられた施設環境をよりよく生かした指導をなすところに教育の目的が達成せられるのである。

第三節　綜合授業擔任教師

教育の成否は一つに懸つて教師その人にあることは今更言ふまでもないところであるが、殊に教師の實踐を以て兒童の實踐を導き兒童の全生活を通じて皇國の道の修練をせんとする國民學校の教育に於ては、一層その感が痛切なのである。國民學校令並に國民學校令施行規則制定の要旨を述べたる文部大臣の訓令中にも「教育ノ事タル教師其ノ人ヲ得ルニ非ザレバ其ノ實効ヲ得テ望ムベカラズ國民基礎教育義務制ノ刷新整備モ要ハ教師ニ有爲ナル人材ヲ得テ始メテ可能ナリト謂フベシ。」とあつてその間の消息を強調してゐる。初等科第一學年の綜合授業に於ては前述の如く、この種授業の性質上その成果をあげ得るか否かは特に教師その人の如何に存するのである。

綜合授業に於ては一人の教師があらゆる科目は勿論兒童の全生活の指導に當るのであるから、その擔任教師には性格的にも、技術的にも、身體的にも、社會的にも特別なる要求が存するのである。

先づ家庭愛撫の中心となつて生活して來た幼けない兒童が、父母の膝下を離れて學校といふ未知の團體生活に入つて來るのであるから、教師は皇國民錬成の高い理想と共に慈愛溢るる母性的な心根を持たねばならない。兒童には教師の懐がいつも翼を休める憩場所とならねばならないのである。愛情濃かにして而も快活であり、兒童が好んで接近し得るやうな明朗な態度を持つことが大切である。かゝる教師にして本當に兒童と一體の生活が出來、教師の生活を以て兒童の生活を導くことが出來るのである。

尚綜合授業に携はる教師は兒童生活について深い關心を持ち、細心なる注意を拂ひ、兒童の生活に絶えず驚異の眼を睜つて鋭敏なる觀察をして行かねばならない。進んで兒童について組織的に研究することも大切である。この自分の受持つてゐる兒童について具體的にその特質を明確に把握してゐることが綜合授業を適切に展開して行く上に如何に重要であるかは言ふまでもないところである。綜合授業が本來兒童の心身發達上より考慮せられた皇國民錬成への過程的取扱である以上、兒童心身の特性について明確なる理解を持つことは最も大切なことであるといはねばならない。更に綜合授業は兒童生活の展開に卽して全教科の修練を間然する所なく指導せんとするものであるから、これが擔任教師は工夫創造力に富み研究的で企劃性の豊かなることが又大切なる資質となるのである。教科についてはあらゆるものに堪能なることが大切である。殊に圖書・工作・音樂・お話・遊戲等が巧みであり、衞生的知識もあつて、これ等の指導を適切になし得ることは非常に大切なことである。

又身體強健にして明朗快活で、兒童と共に何時もぴちぴちして居り、煩瑣をいとはず手輕に些細のこと迄氣輕に世話してやる親切さが必要である。

前述のやうに綜合授業は鄕土的原理に立つて指導せらるべき實狀に鑑みても、鄕土の自然、そこで交はされる談話慣習、道德、產業、文化施設等あらゆる文化的環境に對して深い理解を持つことは綜合授業の擔任教師として又重要な事項である。

かく擧げ來たれば際限なく、各種の資質が要求せられるのでありそこに國民學校教師としての理想像が描かれるわけである。綜合授業擔任者はこれ等資質を十二分に具現發揮すべく精魂盡した努力をせねばならないのである。事實綜合授業を實施して見て數師の努力の並大抵ならざるを思ふのである。この努力に缺くる所あらば綜合授業の効果は得て望むべくもないのである。

最後に綜合授業擔任教師に最も大切なることの一つは詳細なる記錄を取ることである。教授・訓練は勿論、兒童の個々の特性に至る迄日々の指導の具體的生活の實踐を通して丹念に記しておくことである。この中に如何に教育上重要なる珠玉が藏されてゐることであらうか。實に想像も及ばない程である。我々は授業の展開につれて記錄を集積して、綜合授業の反省考察にも、分科教授への移行にも事實的基礎を提供しなければならぬ。實踐記錄の必要なるは單に綜合授業に於て然るのみならず、國民學校教育全般に於て要求せられることである。殊に大東亞建設下大國民の錬

成の上に我々教育實踐者の努力は世界史的意義の下に要求せられてゐる。この努力を無意義に終らしめず、又忠實なる經驗を積んで大國民錬成の全きを得んがためには記錄の作成と考究は最も大切なることと言はねばならない。

長野縣師範學校附屬國民學校教科研究會員

新井芳實　有賀積男　赤羽千鶴　青木正二　磯川準一
帶刀周一　太田美明　隱岐忠　上條茂　清澤清吾
久保義幸　神波利夫　小山菊　清水國人　下島節
壚野入忠雄　菅原清康　中山清文　中村一雄　原田忠作
丸山利雄　村田好道　柳原定行　吉池勘右衞門　吉岡正幸
和田五郎

昭和十七年十月十五日印刷
昭和十七年十月二十日發行
定價九十錢

承認番號ア290.357
發行部數2.000

長野縣師範學校附屬國民學校
編輯者　教科研究會
代表者　上條（カミデウ）茂（シゲル）
長野市妻科四六
發行兼印刷者　大日方利雄
長野市南縣町六五七
印刷所　信濃毎日新聞社印刷部
長野市南縣町
發行所　信濃毎日新聞社出版部
會員番號一二、三四番
電話長野四、三六一振替長野一二〇番
東京市神田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社